

---

# NARUTO 無限剣製

ゆきっこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NARUTO 無限剣製

### 【コード】

N0964R

### 【作者名】

ゆきつこ

### 【あらすじ】

\* 答えを見つけた英雄エミヤは、座へと帰るはずだった。だが気がつけば、彼は忍びの存在する世界へとやってきていた！

\* Fate / stay nightのUBW後のアーチャーがちっちゃくなってNARUTOの世界で苦悩しながら、周りとともに奔走する話です。英雄のくせに最強じゃないです。

\* 完全自慰小説につき、不定期更新になります。がよろしくお願いします。

## 序章 終わりと始まり

「答えは得た。大丈夫だよ遠坂、オレも、これから頑張っていくから」

そういつて無理に笑ってみせる。

目的は果たせなかった。だが満足している。

自分の行ってきた事は、間違いではなかった。

体の感覚が薄れていく。

このまま『座』に戻り、今の自分の『記憶』はただの『記録』に成り下がるだろう。きつと自分はこれからも世界に使役し続けるだろう。

だがきつと大丈夫だ。顔にかかる雨が少し物寂しさを水増しするが

雨だと！！

おかしい。聖杯が消えた今、この体が現界していること自体あり得ない。なのに今自分は、顔に当たる雨を、肌寒さを感じている。現界している、と言うよりも受肉している……。こんな事があり得るのだろうか？

ゆっくりり瞼を空ける。そこに移るのは木、木、木。森の中、なのだろうか。水の流れる音も聞こえる。近くに川が流れているのだろうか。

川の方に近づくと、俺は驚嘆した。

「ッ！ これは一体どういう事だ!？」

体が縮んでいるだと！　せいぜい10歳前後といった少年がそこにいた。だがその出で立ちは、黒みがかつた肌に白髪にぼろの着流し

「先ほどの姿とも、自分の幼少時代ともかけ離れていた。」「何故……しかも魔力まで落ちていたのか」

はつきり言つて魔力がかなり落ちていた。かつての師　遠坂凜に弟子入りした時並の魔力量だ。

投影は……試しに自分が最も愛用した剣、干将・莫耶を投影してみる。完成度は特に問題はないが、今の魔力の量を考えると、他の宝具は投影できまい。

途方に暮れていると、風に乗って不快なおいがやってきた。自分にはかぎなれた鉄　血のにおい。

「何か起きているのか……なら、行くしかあるまい」

そう、自分は正義の味方なのだから　今更正義を名乗るのもおこがましい気もするのだが。

自嘲気味に笑つてから、気を引き締め、血のにおいのする方へ駆け出す　！！

## 序章 終わりと始まり（後書き）

主人公を志貴か士郎かで悩みました。結果史郎でいきたいと思いません。

あちこち原作を捏造してますが、「明らかにここおかしいだろ！」と言う箇所があれば遠慮なくご指摘ください。

**第1章 出会いと亡命案（前書き）**

2 / 24 誤字、内容修正。

## 第1章 出会いと亡命案

森を抜けると、そこには木で出来たボロ家が佇んでいた。

血のにおいが濃い……。つまり、この家の住民が葬られたと言っているのか。

「ッ！ これは、一体……魔術の暴走か？」

家の中にあるのは、血、血、血、死体、死体、死体、氷、氷、氷。そこにいたのだろうか。人々は氷に貫かれ絶命している。

だが、僅かに生きている人間の気配がある。正確には、その人間から漏れている魔力のような力を感じるのだ。

念のため投擲用の短剣　ダークを右手に投影し、ゆっくりと近づく。

そこには、一人の“少女”が倒れていた。

「う、うーん……」

「お、気がついたか？」

倒れていた少女を先ほどいた森にまで運んで数時間　雨はすでに止んでおり、雲の隙間から西日が差し込んでいる。

遺体は埋葬し、簡単な墓を造ってやった。その後彼女を運び、たき火で暖を作っておいた。ちなみに火種はマッチを投影した。簡単な作りの日用品なら投影出来るが、残りの魔力を考えると多用しない方が良さそうだ。

「……あなたは？」

「私か？ 私は……しがない旅人だ」

「僕より年下みたいなの？」

しまった……。今の容姿は子供だった。どうも自分らしくないっからだ。まさか、凜マスタの影響がこんな所に出てきたのか？

「それより、一体あの家で何があった？」

魔術の事も触れようか悩んだが、今はそうするべきではないと考える。もし彼女の家系が魔術師の家系なら問題ないであろうが、あの死体の中に魔術師がいたのだとすれば、下手をすれば彼女は知らなくても良いことを知ることになりかねないからだ。

「僕は……生きてちゃいけないから……特別な力を持っているから……」

彼女は話した。自分のこと。一族のこと。血継限界のこと。

エミヤシロウにとっては聞き慣れない単語が次々と出てきた。が、彼女の母方が特別な力を受け継ぐ一族で、その力を隠しながらひっそりと生活してきたのだが、その母親の力（血継限界）が父親にばれ、襲われたときに力を発現、暴走させた、ということまでは理解できた。

「……そうか。辛かったな」

この手の相手とは生前、いや死後も何度か立ち会った。もちろん、殺す側としてだが。一般人にとって、人知を越える力を恐れ、滅ぼそうとする事は至極当然な事だと思う。そして力を持つ者は、それを隠し、ひっそりと生きていくしかない。

「君も、僕を殺すの？」

「なんだ、殺して欲しいのか？」

恐怖を浮かべていた少女の顔がさらにゆがむ。目の前にいる少年シロウがただ者ではない事を感じ取っているのだろう。

「そうだな。もしお前がまた力を暴走させてしまうのなら、そうするしかあるまい」

「……」

じつと自分のことを見つめてくる。自分の言いたいことがわからず、困惑しているのだろう。

そっと笑いかけてシロウは言葉を続ける

「君がまた誰かを殺さない限り、私は君を殺さない。好きに生きれ



ばいさ」

「……生きていて良いの？」

「この世に生を拒絶される存在など……いるはずがないだろう？」

隣にいる少女にそっと微笑む。そう、生を拒絶される存在など……きつと自分はその一人なのだろうが、彼女はそうではないと願いたい。

シロウの笑みを見た途端、彼女は泣き出した。

その心情を読み取ることにはできないが、シロウはそっと彼女の方を抱いた。

少女が落ち着いてから、川で捕った魚をたき火で焼く。

「そういえばまだ名を名乗ってなかったな。私はエミヤシロウという」

「……白といいます」

まだ目頭は赤いが、すでに自分に対する警戒は解いてくれているのがあるがたい。

「さて、これからどうする？ 行く宛はあるのか？ まあ私もないがね」

焼けた魚を手渡して尋ねる。自分は此処のことを全く知らない。

彼女の口ぶりから、自分は平行世界、下手をすれば他の世界にきた可能性もある。

「……わかりません。でも、此処に残っていれば、“霧隠れの忍”に狙われるかもしれない」

「“忍”、だと？ 詳しく教えてもらえないか？」

「僕も本で読んだ位で詳しくはないけど」

彼女の話では、この世界には多くの国があり、特に力の強い「火、水、風、土、雷」の国には、それぞれ「木の葉、霧、砂、岩、雲」の隠れ里があり、そこには“忍”がいるという。

霧隠れの忍、と言ったのだから、此処は水の国と言うところか。ついでに彼女に日本や自分の世界で有名な物について尋ねてみたが、どれもわからないと言った。どうやら、本当に他の世界にきたらしい。

「……………なんでさ？」

空を仰ぎながら、懐かしい口癖をこぼす。そんな自分を不思議そうにのぞき込んできたから、何でもないとやっておいた。

というか彼女にのぞき込まれると視線をそらしてしまう。とにかく、ものすごく美人なのだ。はつきり言ってあの“表向きは”頭脳明晰、容姿端麗の『遠坂凜』をも凌ぐ。(精神的に)いい年して少女にときめくとは…………肉体的にはそう変わらない年齢なのが。今更ながら僕っ娘なのも影響しているのか？

「と、とにかく、此処にいるのはまずいということか。ならどこか他の国に亡命するか…………？」

一度白の家に一人戻って地図を持ってくる。雨の国は大きな島国のようだ。海を越えれば少なくとも今よりは安全か？

「亡命って、何です？」

「ん、ああ、自分の住んでいる国に追われているから、他の国に『助けてください』って逃げることだよ。」

と、やんわりと説明し、地図に視線を落とす。

小さな国に逃げ込んだとしても、この国の忍とやらを敵に回せば危ない。そうなれば隠れ里のある大国に逃げるのが得策か？出来ればその隠れ里とやらで保護してもらえれば、白にとっては好都合であるう。

「……………どうしたの？」

よほど難しい顔をしていたのだろう。白が心配そうな顔をしていった。

「いや。下手に小さな国にとどまるよりは、大きな国に逃げる方が得策だと思ってね。火の国あたりが一番近いかな、と考えていたんだ」

地図を指さして考えていたことを説明してやる。

「さて、問題は資金繰りぐらいか。荷物は少ない方が良いとして…  
…どうした？」

白が驚いたような顔をして自分のことを見てきた。何か変なことでも言っただろうか？

「い、いえ……その、まるで着いてきてくれるような口ぶりですの  
で」

「なんだ、一人で行くつもりだったのか？」

そう答えると、また驚いたような顔をされた。

「私だつて行く宛はないからな。無事に生活できる拠点があればあ  
りがたい。それに、君に関わってしまったんだ。このまま放ってお  
けるような性分じゃないんでね」

こんな時に皮肉な言い方しか出来ない自分が少し悲しい。だが目  
の前の少女は、自分が言わんとしていることを理解してくれたよう  
だ。表情が明るい。

「じゃあ、一緒にいてくれるのですね！」

「君が迷惑でないのならね」

「そんなことありません！ お願いします。シロウ君！」

君付けとは……つい苦笑が漏れてしまった。だが彼女が素直に自  
分の気持ちを表してくれたのは嬉しかった。

この日は一晩明かし、翌日、白と一緒に西の海辺に向かって出発  
した。

## 第1章 出会いと亡命案（後書き）

第1章です。いきなり白ちゃん登場です。

いきなりTSデスね。今作では白ちゃんはおにやのこです。

なんだかんだ言っつて、やっぱ白は助けたかったので……正義の味方を登場させました。

あ、シロウの話し方は英雄の頃のまままでいく予定です。

白と母親が襲われるイベントについては、複数人の人間に襲撃され、生き残りは白のみ、ということにしています。

第2章 木ノ葉隠れの里上陸（前書き）

2 / 2 4 誤字、内容修正  
3 / 2 1 一部修正

## 第2章 木ノ葉隠れの里上陸

シロウ君に助けられから早一カ月、僕たちは無事に水の国を抜けて大陸に移動する事ができました。

それにしてもシロウ君はすごいです。僕より年下に見えるのに、いろいろなことを知っていて、船に紛れ込む時なんて本当にびっくりしました。

なんでも荷物に隠れた方がいいと言って、木箱の中に入れてしまふんですから。まあ中の荷物は処分させてもらいましたが。

彼がうまく立ち回ってくれてなのか、追っ手も来ていません。元々忌み嫌われる一族だから、追ってくる人もいるかどうか分からないけど。

……本当はこれは夢で、朝起きたらまたあの家にいるんじゃないかって思うことがあります。

でもそういうときはいつも、シロウ君が優しく頭をなでてくれて、安心できます。

辛いときには何時でも助けにきてくれる……まるで“正義の味方”みたいですね……シロウ君。

シロウと白は無事に国を抜けることが出来、白は喜んでいたが、シロウはこれからが本番だと考えていた。

これから火の国に向かうわけだが、はっきり言って今自分たちの状況は密入国者なのだ。

この世界で亡命という概念があればなんとか口八丁で誤魔化す気だが、もしなければ……。今から不安要素を取り上げても仕方がないが、万一のことを考える必要がある。

それに、はつきり言っただけ先立つ物がない。たまに山賊あたりをボコって盗んでしまおうかとも思ったが、自分が今どの程度の力を持っているのかわからないので不可能だ。

最終手段は刃物を投影して売ることだが、子供二人でそんなことをすれば怪しまれるのは必然的だ。というか、そんな手段はアカイアクマに脅されて……。ぐらいのことがなければしない。

この世界では森に入ってしまったえば食べ物には困らないが……。彼女、白は女の子だ。あまり無理なことをさせたくはない。

「……。ん？ 何でもないさ。暗くなる前に寢床を探そう」

白が不安そうな顔をしたので、微笑んで頭をなでてやる。この手の相手はこうするのが一番楽なのは経験している。まあ、（不本意だが）年上らしい彼女にそれをしてあげるのは些かどうかとも思う。身長は僅かにシロウが小さいが。彼女が満更でもないようにするので、この方法をとっているのだ。

……。しかし、自分はこうも甘い人間だっただろうか？ かつては1を切り捨て9を救う“正義の味方”<sup>ひじり</sup>で、その後はただ世界に使役させられる“掃除屋”だったのだ。

それなのに、今はこうして自分のそばにいる少女の笑顔を見ているのだ。自分には不相応な願いだとわかつているのだが、それを捨てる気にもなれない……。これも答えを得たから故の感情だろうか？

森の中を進んで数日たった。一応、街道が見えるようなところを歩いている（ちなみに、これはサーヴァント時代の保有スキル“千里眼”並の視力があるため、白には見えないらしい）。

この日も、適当な場所で暖をとって休む はずだった。

( ツ！ 人の気配だと……なんてスピードでくるんだ！)

人間では出せないような速さで迫ってくる。数は……4人。

さて、彼らが水の国の忍なら戦うしかないが、来るなら後ろからくるはずだ。もし彼らが火の国の忍なら、此処で敵意を出すのは旨味がない。後手に回るしかないか。

「……シロウ」

「大丈夫だ。私に任せろ」

白も気がついたようで、シロウがそつと庇うように前に出る。

「そこの者達、止まれ」

4人に周りを囲まれた。全員黒っぽい色の服に薄い緑色のジャケツトを着ている。そして同じ紋の入った額当て 彼らが“忍

”という者か。4人から敵意は感じないが、下手に動けば自分はともかく、白はどうなるかわかったものではない。出方をうかがう。

「さて、私たちは此処で暖をとって休むつもりだったのだがな。それで、そちらはどういった見かな？」

「なに、この近くに来ていたら偶然君たちを見つけてね……。なにやら特殊な力を持っているようだか？」

目の前に立つ男が率直に言ってくる。瞳が白い……。なにやら魔眼のような物でも宿しているのだろうか？

それにこの男が言った『特殊な力』……。すでにこちら二人が訳ありだということがばれていると考えた方がいい。どう出るべきか。

「そうだな。この力のせいで私たち二人は迫害されてね……。それで出来れば火の国あたりの大国に保護を求めたい、と思った次第だ」  
言っていることは嘘ではない。さて、どう出る？

「……そうか。こんな小さな子供が 「いや、少年ははともかく  
其方の女の子は血継限界だろう？」 ツ！」

前に立つ男以外の同情は買えたにも関わらず、前の男の言葉でさらに警戒を強められた。



シロウはあくまでポーカーフエースだが、白は明らかに怯えている。これでは『はい、そうです』と言っているようなものだ。

「もしそうなら、どうする？　ここで始末するか？」

直ぐにでも干将・莫耶が投影できるようにする。

「嘘をついていないのは分かっている。第一この状況でならもつとましな嘘をつくはずだ」

「ヒアシ様、どうします？」

シロウの横にいた男にヒアシと呼ばれた白い瞳の男は、じっと見透かすようにシロウの目を見ていた。

任務の帰路の途中で思わぬ拾い物をしてしまったと、日向ヒアシは内心苦笑した。

二人に流れているチャクラ　少女のほうはふつ々の忍のそれよりも質がいい。2種類の性質変換を行える血継限界のものと似ている。

だが問題は少年のほうだ。本来チャクラが流れる経絡系とは別に、謎の回路のようなものが存在するのだ。数は……27本。例のない物である。

そして、この少年たちが目指しているのは木ノ葉の里であろう。ただ火の国に入るだけでは、彼らが自身を隠そうとするには少しばかり足りない。察するに、少年のほうはそう考えていると見ていいだろう。

しかしこの少年……我々上忍4人に囲まれているにも関わらず、その鷹のような双眸が光を失うことはない。彼は一体何を背負って生きているのだろうか……。

さて、ここで彼らを始末するのは容易いが、もし彼らを内包出来れば、木の葉にとっては利となりうるかもしれない。

実際は娘と同年ぐらいの子供を手に掛けることを無意識に避けていたりもするのだが、それは本人も最後まで気がつかなかった。

「そうだな。君たち子供を手に掛けるのも気が引けるしな。このまま木の葉の里まで連れて行くか？」

かまをかけてみたら、二人の子供の表情が変わった。少女のほうは純粹に驚いているようで、少年のほうは探るような目をする。

「あまり子供だと思って舐めない方がいいのではないかな？ 少なくとも彼女は血継限界だし、私も隠し玉があるやもしれんぞ」

「君たちにとってはうれしい提案ではないか？ それに自身の身を守るには、忍のいる隠れ里に住むのが最良だと考えているようだしな」

鷹の目が鋭くなる。全く、本当に彼は子供なのか？

「それに、仮に君たちが里に害する者であっても、この状況では何もできまい」

事実だ。すでに彼らにとって現状は『詰み』だ。

「……そうだな、なら一つ頼めるか？」

「何かね？」

そう言つと、少年の目から力強い意志が溢れ出した。

「彼女の保身を約束してほしい。してくれるなら、私は何も言わずに従おう」

少年の発言は、この場にいる全員を驚かせた。あくまで、血継限界の少女の無事を優先するのだ。

「わかった。君たちの名は？」

「エミヤシロウ」

「……白です」

「シロウに白か。私は日向ヒアシという」

十数日後、シロウたちは確かに木ノ葉隠れの里にたどり着いた。白はヒアシ達のうち誰かが背負い、シロウは暫くは自らの足で走ったが、直ぐに負ぶわれた。

その中でシロウは自分の体の変化に驚いていた。何しろ『強化』を使わなくても、以前と変わらないような身軽さで動けるからだ。ただ、魂が動き方を分かっているも体がついていかない、と言ったところだった。少しでも無理をすれば、体が悲鳴を上げるのだ。身体だけは年相応というのは、何とももどかしいものである。さて、閑話休題……。

里はかつての日本のような雰囲気で、シロウは郷愁の思いを感じた。

といつても、街灯やらなんやらと、その頃の日本には存在していないものもあつた。青年期までは現代科学の恩恵を被っていたシロウにとってはありがたいのかもしれない。

二人は里の中で特に大きな建物、『火影邸』なる場所に連れてこられた。

通された先には、威厳を醸し出す老人が3人いた。

ヒアシが事情を説明している間、白は雰囲気に飲まれていたが、シロウはこの老人達をを警戒していた。特に頭に『火』の文字の入った赤い帽子をかぶった老人……はつきり言つてかなりの実力の持ち主だと、本能が告げる。かつては自分よりも遙かに強い敵と戦ってきたのだ、相手の実力を測る能力には自信がある。敗北は一度だけだが。

「さて、事情はわかった。儂がこの里を治める火影、猿飛という『エミヤシロウ』です。そしてこちらが白。で、検討してただけでしようか？」

相手の目をまっすぐ見て話す。少しでも彼が考えていることを把握し、彼女に有利な状況にまで持って行きたい。

「そうじゃの……。どの里でも、血継限界というものは恐れられるものじゃ。じゃが、あくまでその力を扱うのはその人間じゃ。君たちなら問題ないであろうと、僕は思うがお」

はつきり言ってくれる。おかげで白が完全に怯えているではないか。

「猿飛、彼らを引き込むというのか？」

「問題ないであろう。それにこの少年　強い意志を持っておる」

じつとシロウの目を見てくる。自分の奥底まで見透かされている気分になる。

「それに、彼女は自分の力のコントロールを覚えた方がいいじゃろうな」

「それには私も賛成です。いいよな、白？」

そつと微笑んで話を振ると、黙って頷く。相変わらず固いなあと、シロウ含め周りが苦笑する。

「では、監視を含め、日向の方でしばらく様子を見る、ということではよろしいかな？」

そついつてこちらの意向を確認してくれるあたり、火影の優しさが伺える。今の白にはありがたいかもしれない。

「構いません。むしろその方が私は納得できます。いきなりばいと放り出されても此方は困りますしね」

「ではそついうことで。ヒアシ、頼めるか？」

「了解しました」

こつしてエミヤシロウと白は、無事に(?)木ノ葉隠れの里で生活できるようになった。

## 第2章 木ノ葉隠れの里上陸（後書き）

少しシロウの体についての話が出てきましたね。

魔力やチャクラについては後ほど出てきますので、まだ突っ込まないでください（汗）

あと、白が襲われる事件は、この作品では9月とします。なので、シロウと白が木の葉隠れの里に着いたのは10月下旬、ということになります。

**第3章 日向家の食卓（前書き）**

2 / 25 誤字、内容修正

### 第3章 日向家の食卓

「……………」

「ん、どうかしたかね？」

「い、いや……………」

3人は夕方には日向宗家の屋敷に着いた。着いたのだが、子供2人は完全に硬直していた。

「おつきいですね……………」

でかいのだ。日向一族は木の葉隠れの里を代表する一族であるとはヒアシから聞いていたが。白なんて完全に目が点である。

「さて、ここが日向宗家の家だ。しばらくは此处にすんでもらうことになる。他の家族は追々紹介する」

「……………了解した」

「……………」

未だに白は放心状態。

野宿生活を続けていた身には、風呂の温かさが心地良い。しかも、今は10月下旬……………寒いのだ。野宿は。

余談だが、この世界の時間軸や月日は、元の世界と変わりなかった。もう秋も終わるといふ時期に自分たちは野宿など……………もしかしたら拾われて命拾いしたのかもしれない。

湯船につきりながら、シロウはここ最近ずっと張りっぱなしだった神経を緩めた。

「しかし……………こうも大きい家なのに、使用人はほとんどいない、か」  
そう、大きな武家屋敷の出で立ちではあるが、少なくとも使用人くらいいてもおかしくないだろうと思っていたのだ。屋敷までの道のりで、日向一族について聞いたとき、宗家と分家の話題になった。こういう大きくなった一族では横の繋がりが強くなるのはよくある話だが、その話題になった時のヒアシの表情が固くなったのを見逃

さなかつた。……なかなかその亀裂は大きいのかもしれない。

とはいえ、折角ゆつくりと休めそうなのだ。疲労の溜まっている体や脳が休息を要求しているのがわかる。今はとにかく疲れをとることにしよう、と思うシロウだった。

風呂から上がると、先に済ませていた白は寝室の布団の中でぐっすり眠っていた。

やはり、彼女もかなり消耗していたのだろう。

とりあえず、居間で家族に先に説明しておくと言っていたし、そろそろ顔を出すとするか。

「む、シロウか。白は疲れていたようだから寝かせたが構わなかったか？」

「大丈夫でしょう。彼女も相当疲れていたようですし。安心して良いと思つたのでしよう」

居間にはヒアシの他に、2人の子供がいた。どちらも女の子で、1人は自分と同じくらい、もう1人は少し小さいくらいだ。どちらも瞳が白い。彼女たちがヒアシの言っていた娘か。

「先ほど言っていたエミヤシロウ君だ。しばらく一緒に住むことになる。もう1人は今寝てしまっているから、後で紹介する」

「エミヤシロウという。しばらくの間よろしく頼む」

ヒアシの紹介に次いで頭を下げる。

「日向ハナビです！」

「日向……ヒナタといます」

小さい娘がハナビで、同年代くらいがヒナタ、か。姉妹でも性格は全然違う。というか真逆といっても良いだろう。しかし……

「ヒナタとやら、私は何か怯えられるような事をしただろうか？」

「え！ いや、その……」

明らかに怯えられている。心当たりは……あるんだな、残念ながら。

「目つきが鋭いのは生まれつきだ。気にしないでくれ」



そういつて笑ってやると顔を赤くしてうつむいてしまった。なるほど、私の目つきはそれほど悪いと。

「ハナビは格好いいと思います！ 姉さんそんなに怯えなくても良いと思います」

なるほど、ハナビとやらは思ったことをド直球でぶつける性格のようだ。これが年相応の無邪気さから来るのだから、咎めることは出来ないだろう。

「それくらいにしてあげてくれシロウ君。ハナビ、今日の稽古だ」「はい、父上！」

といつて、ヒアシとハナビは出て行ってしまった。

……空気が重い。完全にヒナタは自分に怯えている。

「ええと、ヒナタは彼らと一緒に行かなくて良いのか？」

「え！ あ、今日はお休みをもらって……明日アカデミーで調理実習があるから練習しようと思って……」

「あかでみー？」

聞けば、この里には忍者を育てるための忍者学校アカデミーなるものがあり、彼女の『くのー』クラスでは、家庭教養も課程にあるらしい。

「で、その予行ということが。普段は誰が料理をしているんだ？」

「うん……。普段は、私が……」

「普段からしているのに、自信がないのか？」

そう聞くとうつむいてしまった。どうも、会話が続かない。

「みんな、上手いから……」

「なるほど。そういうことなら、一つ教示するとしよう」

そういつて立ち上がると、ヒナタは驚いたような顔をした。

「こう見えても料理には自信があつてね。和食なら誰にも負けないつもりだ」

そういつて自信満々だと顔に書いてみる。もちろん、目つきが陰しくならないようにかなり気を遣ってだが。

「えと……じゃあ、お願いします」

「了解した。厨房借りるぞ」

そういつて、シロウは居間をでて、すぐに戻ってきた。

「すまないが、厨房はどっちだ？」

もちろんわざとだ。

「……フフツ、こっちはです」

お、ようやく笑った。

日が落ちるころ、稽古から戻ってきたヒアシとハナビは、居間に食欲をそそる匂いが立ち込めているのに気がついた。

普段よりも少し多いくらいの量の皿が並んでいるが、そのどれもが、普段よりも数段階高いクオリティとなっているのだ。

「うわあ、凄くおいしそうですね父上！」

「そういつてもらえると、作った側はとても嬉しいな」

そういつて、残りの料理をシロウとヒナタが運んできた。すでにうち解けているようにヒアシは安心したが、少しばかりヒナタががっかりしたようにも見える。

「……こんなに上手なんて……私……」

「そう気を落とさなくてもいい。ヒナタの料理も十分上だ。私が保証しよう」

「その保証する立場のシロウ君がうらやましいよ……」

どうやらヒナタは、シロウの料理の腕前に意気消沈しているようだ。

「え、これシロウさんが作ったんですか!？」

「そうだが。口に合えば良いのだが」

ハナビが嬉々としてシロウに話しかける。ヒアシも料理の品々をまじまじと見てみると、確かにかなり食欲をそそられる物ばかりだ。「それでは、私は白を起こしに行ってくる。ヒナタ、後はお願いできるか」

「あ、はい」

そういつてシロウは白の寝ている寝室に行った。

「さて、全員そろったところで、彼女が白だ。シロウ君と白はしばらくうちで暮らすことになる。ヒナタ、ハナビ、良くしてあげてくれ」

「改めて、エミヤシロウだ。家事全般はできるが、料理は特に得意かな。ま、これを食べてもらえばわかると思うが」

「……白、といます。……お世話になります」  
相変わらず、白はどうも前に出ない。居間に来るときもぎりぎりまでシロウの後ろに隠れていたのだ。

ヒナタとハナビもそれぞれ自己紹介をし、ヒアシの音頭で食事になった。

「……」「む?」「……」「え!?!」

三者三様ならぬ四者四様のリアクションに、まんざらでもない気分になる。

料理の腕は生前通りだった。これはかなりの利点となりうるな、と密かに思ったりした。

「おいしいです！ シロウさんすごいですー!」

「ほう、これは……」

「……おいしいよう。私より全然上手いじゃない……」

「シロウ君、僕は今ものすごく感動しています」

落ち込むヒナタを除く3人からはかなりの高評価を得ることが出来た。

「そういつてもらえるならありがたい。食事の用意くらいなら、いくらでもしよう」

「本当ですか！ ハナビはおいしいもの毎日食べられるですー!」

「そ、そんなことしたら、私の仕事なくなっちゃうよ」

「ん？ 元々はヒナタの料理の指導ではなかったか？ もちろん手伝ってくれるのだろう?」

初日からすでになじみは始めている彼らを見るヒアシの目は穏やかだったとか。

翌日から、ヒアシがしばらくの間任務がないと言うことで、ヒナタがアカデミーに在る間、シロウと白は彼の指導を受けることになった。おそらく任務を空けて、監視という所だと思われるが。ちなみに、ヒナタがアカデミーに持って行った弁当のクオリティに多くのくのの卵たちが涙したとかなんとかなんとか。

「二人はまずチャクラを練るところから始めてもらおう。その感覚を覚えられれば、白も術の暴発を防げるかもしれんしな」

「はい」

ヒアシの説明では、チャクラは『身体エネルギー』なるものと『精神エネルギー』なるものを混ぜ合わせた物らしい。白は早々にコツをつかんだようだ。一方シロウは、

(魔力と何か違うモノなのか？いまいちわからんが……)

とりあえず自分の中で魔力を練るイメージをする。

「む、シロウも大丈夫なようだが……少し不思議なチャクラだな」と言われた。シロウの中では、「いまいち違いがわからん」と結論づけられた。

「後はそれを自在にコントロール出来るかどうかだ」

そういって、ヒアシは短刀のようなモノに、チャクラなるモノを集中した。そうすると、そこから淡い蒼色の刃が出てきた。

「このように、苦無などの武器の補助をすることも出来る。拳にチャクラを集中させれば岩を砕く事もできるらしい」

……いまいちつかめない。

白はどうやら才能があるようで、ヒアシ曰わく良く出来ているらしい。

やはり、私にはこういった才能はないのだろう。所詮『強化』と『投影』しか出来ない二流魔術師だ。……いかん、目から汗がでて

きたな。

「うん。本当ならアカデミーで基礎をやっても良いのかもれんが、今の君たちをアカデミーに送る訳にはいかないのではな……」

「しょうがあるまい。あくまで監視される身です。それぐらい我慢しますよ」

そう、これ以上望むことは出来ないだろうし、望むものはない。これでもかなりの優遇だと思っている。

「ところで、君たちの血継限界について話してはもらえんか？」

「それによつて指導法が変わる、ということだろうか？」

「そうだ」

確かに、白はそういった指導を受けるべきだろう。

「僕は、氷を作る位で……」

「なるほど、『風遁』と『水遁』を同時に行う『氷遁』か……」

ヒアシが何やらぶつぶつ言い出した。此方二人は全く理解できていないのだが。

「それでシロウは？」

話を振られる。さて、どうするべきか……

軽く目を閉じて、干将・莫耶を投影する。魔力の消費は激しいが、これが一番説明しやすいだろう。

案の定、ヒアシは目を見開いて驚いていた。

「これが私の使える力。自分が見たモノを『解析』し、『投影』する能力、というところでしょうか。最も相性が良いのは剣ですけど。後は『強化』も出来ませんが、それはまた後ほどで」

しかし……やはり魔力の絶対量が落ちしている今、下手に宝具など投影は出来まい。

「……それは君の中にある、27本の特殊な回路による力か？」

「ッ！ 気がついていたのか」

まさか、魔術

回路がばれるとは。しかも本数まで正確に把握されている。

「日向一族のもつ『白眼』は、チャクラの流れる経絡系をも見るこ  
とができる。君には本来人間のもつ経絡系とは別の回路が存在する。  
そこにもチャクラが流れていけば、わかるのは必至のことだ」

やはり、魔眼のような代物はこちらにもあるのか。どうやら彼が  
監視役なのは、その眼によるものが大きいのだろう。

「私はこの力については誰よりも理解している。だがそのチャクラ  
コントロールとやらはわからんし、チャクラそのものが足りない。  
出来ればご教授願いたいのだが」

「良いだろう。彼女の指導と並行して行うとしよう。だが、今日は  
ここまでにしよう。それでも日向一族を取りまとめるものなのでね」  
シロウと白の木ノ葉隠れの里での生活は、このように始まった。

### 第3章 日向家の食卓（後書き）

シロウのお人好しっぷり發揮です。原作キャラの心理描写が結構難しかったりしますね。

個人的にはヒアシがあんまり冷たくないようにしたいのですが、いかんせん原作に沿う形にしたいので……むつかしい

それと、日向宗家の家庭事情ですが、仕事で分家ぐるぐらいで、使用人は基本いないという風にしましたが、原作で描写ありましたっけ？

## 幕間 設定？（前書き）

エミヤシロウと白、そしてチャクラと魔力の関係についての設定です。



## 幕間 設定？

### キャラ設定 エミヤシロウ

#### ・基本設定

薄黒い肌、白髪、鷹のような目。英雄エミヤをコンパクトにした感じ。オールバックではない。

実年齢不明。身体年齢は10歳程度。後にアカデミーではナルト達の学年に放り込まれます。

身長はアカデミークラスで中ぐらい。

#### ・能力<sup>スキル</sup>

サーヴァント時代のスキルと同等の『千里眼』と『心眼(真)』は兼ね備えている。

身体能力はNARUTOの下忍の平均並(初期)。『強化』で底上げは出来るが、肉体の限界を超える強化を使えば崩壊しかねない。

#### ・性格

基本的には原作通り皮肉屋でお人好し。ただ周りがガキンチョなので皮肉は抑えめです。そして原作よりも甘いです。段々と“正義の味方”(過去の自分)から変わっていく様子を書きたいです。

#### ・魔術

魔術回路は機能するので『強化』『投影』『固有結界』は発動可能。ただ、魔力量的大幅低下、肉体の未成熟により、制限がかかっている。無理をすれば宝具の投影もすることは可能だが、死のリスクを払うことになりかねないのが現状。「干将・莫耶、ダーク」等使い込んだ神秘性の低い宝具は低リスクで投影可能(初期)

#### ・戦闘

干将・莫耶による白兵戦がメイン。他の宝具の投影はよほどのことがない限りしない(前述)。神秘性のない剣類は投影することもあります。

魔力とチャクラについて

シロウ曰く「あまり違いがわからない」。結論から言えば 魔力  
チャクラ と設定します。

「チャクラ」は『身体エネルギー』と『精神エネルギー』を混ぜ  
合わせた物であり、「魔力」は『原初の生命力』という定義になっ  
ています（各作品参照）。

この小説では、

「チャクラの元となる『精神エネルギー』『身体エネルギー』は、  
魔力となりうる『原初の生命力』から派生したもの」ということに  
します。

偉そうなこと言いましたが、はっきり言って原料が同じで、各々  
を変換した魔力とチャクラもほとんど同じものとします。

シロウは回路に魔力を流していますが、NARUTO世界の人間  
から見れば謎の経絡系にチャクラを流しているように見えます。

ただ、元々才能のないシロウには、相性の良いもの以外の忍術習  
得にはかなり苦勞してもらいますが。

## キャラ設定 白

### ・基本設定

女の子です！そして永遠のスレンダーです。

原作ではナルト達より3歳年上でしたが、今作では1歳上です。  
というのも、白が狙われるイベントが、ナルト達のアカデミー卒業  
年の一年前となりますので。そのため再不斬とは会ってません。

身長はシロウより僅かに高い。

### ・能力

血継限界「氷遁」の使い手。ただ原作のように使いきなせませ  
ん。

- ・性格

原作の白から冷たい部分を引いた感じ。原作で斬不斬に依存していたように、シロウに依存気味。

- ・戦闘

原作と同じく千本を使用。ただ戦闘能力は原作より3割減くらい。

## 幕間 設定？（後書き）

（初期）とついている項目は、今後の鍛錬次第で変わりうるということですよ。

疑問、批評等ありましたら感想からガンガン入れてください。

## 第4章 後押ししてくれる存在

任務で日向宗家を離れてから早2ヶ月。ようやく帰ってくる事が出来た。

分家である自分も例に漏れず、宗家に対して良い思いを持つてはいない。だが仮にも自分は幼少のヒナタ様の世話をさせてもらった身。最低でもヒアシ様に挨拶していかなければ。出来ればヒナタ様とも会いたい。

さて……む？道場が騒がしい？この時間ならヒアシ様は雑務があり、ヒナタ様はアカデミーにいるはずなのに。

そーっと除いてみると……一人はハナビ様だ。だが彼女の相手をしているのは……誰だ？白髪に赤っぽい服の少年が相手をしている。片手には短い竹刀をもって相手をしているが、何者だ？

しかもハナビ様の攻撃を上手く捌いている。あれは鍛錬で出来る動きではなく、実戦経験の多さから出来る動きだ。下手をすれば自分よりも多いのかもしれない。

「そこ！」  
彼に出来た隙を見逃さず一気にハナビ様は柔拳を突き出す。さすが、御年5歳にしてあの動き。やはり才能はヒナタ様を大きく凌ぐ

「フ、甘いぞ！」

な、わざと隙を作ったということか。素早く竹刀で受け流すと同時に半身を開き、一気に竹刀を振り下ろす

「ハナビ様あぶなああい！」

「……！」

気がついたら飛び出していった。そして白髪の少年に思い切り竹刀で迎撃されてしまった……

日向コウ、一生の不覚……ガクッ

木ノ葉の里にきて一ヶ月。未だに監視体制ではあるが、シロウたちは特に問題なく生活出来ている。

ヒナタがアカデミーに在る間、暇を持て余すシロウと白は、チャクラコントロールの特訓や書物庫の物色をして暇をつぶしていた。特にシロウは暇つぶしにガラクタいじりでもしようかと思つたが、さすが木ノ葉を代表する一族の宗家の屋敷、そんなモノ存在するはずがない。仕方ないので掃除洗濯など家事全般で気を紛らわしたりしている。そのため年期の入りつつあつたこの屋敷は、気がつけば新築時の輝きを取り戻しつつあつたとか。

白は自分の力の暴走を恐れ、真面目にチャクラコントロールの修行に励み、今では書物庫にあつた初歩忍術の教本（巻物）を読んで独学で術を習得している。たまにヒアシが手ほどきをしているが、その才能を高く評価していた。シロウも誘われたがもちろん断つた。才能が皆無だということは自覚している。そのため魔力の絶対量を増やさんとトレーニングをしている。

表向きには体力向上の一般的な自主訓練。夜にはこっそり庭で干将・莫耶を振り回したり、そのときに使える魔力を総動員しての宝具の投影などをしている。何故夜にやるかという点、他の人間に見られたく無いからだ。無理矢理に魔力を絞り出し、宝具を投影して毎晩死にかけている姿など見せられるはずがない。

そして訓練の一環として、ハナビの稽古の相手というモノもある。以前ヒナタとハナビの相手をしてから、ハナビには良く頼まれるようになったのだ。ヒナタとはその一回きりである。まあ、アカデミーで忙しいのと、ヒアシとハナビが主に道場にいるため、彼らがいる時間になかなか入ってこないというのが理由だ。

この日もハナビに頼まれて相手をしているが……彼女の才能はシロウも感じていた。

攻撃に迷いが無く、キレもいい。何より戦闘センスがとても高い。気を緩めれば今の体力では良い一撃をもらいかねない。だが所々が雑で突っ込むタイプなので、ちよつと隙を作ってやれば、

「そこ！」

ほら、突っ込んできた。

「フ、甘い！」

軽く捌き、二刀流用の竹刀（短い方）で迎撃しようとする。と、

「ハナビ様あぶなああい！」

「「！！！」

……いきなりの出来事で無意識に迎撃してしまった。

飛び出してきた青年は分家の日向コウというらしい。ヒナタの幼少時代の世話をしていた人物だという。

「コウさんは今日はどんなようですか？」

「ようやく長期任務が終わったからね。ヒアシ様に挨拶して、出来ればヒナタ様にも挨拶できればと思ってきたんだ」

というこらししい。

「騒々しいぞ。何かあったのか？」

「お久しぶりです、ヒアシ様」

騒ぎを聞きつけて入ってきたヒアシに、コウは頭を下げた。

「長期任務でしばらく顔を出せなかつたので、こうして参つた次第です。可能ならヒナタ様にも挨拶をと思つていたのですが」

「そうか。ヒナタならそろそろ帰ってくる時間だ」

「そうですね。して、彼は一体……」

そういつてシロウの方を見てくる。そりゃそうだいきなり宗家に見ず知らずの餓鬼がいるのだから。

「ふむ。シロウ、私から説明しておこうか」

「お願いします」

特に隠してきた事はないし、ここは頭首たる彼が説明した方が良

いであるう。

シロウはハナビと先ほどの立ち会いの反省会をすることにした。

「ハナビ、攻めに勢いがあるのは良いことだ。それは認めよう。だが、相手の出方をうかがわずに突っ込むなどあれほど言ったはずだ」「う、すいません。でも、相手に攻撃される前に倒してしまえば……」

「それはただの奢りに過ぎん」

彼女の才能、実力は確かに本物だ。勢いに任せて攻めていても、的確に良いところを突く感性を持っている。だが、

「その戦法は格下にしか通用しない。相手がカウンターを得意とするなら、一発で討たれるぞ」

厳しく言うと、ハナビは悔しそうにうつむいた。正論だとわかっ  
てはいるが、納得できないのだろう。

「確かにお前の才能は本物だ。だが、戦場では才能があるモノが生き残るとは限らないんだ。力の無い者は、あらゆる戦術を用意して戦いに望む。真の強さは才能では無い。どれだけ自分に勝利を引きつける事ができるかだ」

少し難しい話になってしまったか。だが自分はこれは正論だと思  
っている。何より自分はそうやって生き抜いてきた。自分よりも遙かに強い敵とも何度も対峙した。だが、自分は決して負けなかった。勝つためにあらゆる戦術を練り、そのときの状況から最も有効な手段を選択し、相手を滅ぼしてきたのだから。

「……言ってることが少し難しいです」

あ、やっぱり難しかったようだ。頭を抱えてしまっている。

「ようは弱者には弱者の戦い方があるということだ。仮に戦いが才能だけの世界なら、私はハナビに指一本触れることなく敗北することになるぞ」

「そんな！ だってシロウさんはそんなに強いじゃないですか！」

驚愕した表情で迫ってくる。

「本当の話さ。私には剣を複製することしか出来ない。それ以外に



は戦う才能は無いのさ。だから必死にどうすれば勝てるのかを考えて今まで生きてきた」

断言してみせるとまた驚きの顔になった。ちなみに自分の投影はあくまで剣製という風に説明してある。宝具の投影の事は言っていないが。聞かれてもいないし。答える気もさらさら無い。

「それで、シロウさんはどれくらい勝ってきたのですか？」

「百戦無敗かな。……すまん。正しくは一度だけ敗北したがな」

そういつて自嘲気味に笑ってみせる。

「それでは私は戻っているぞ」

そういつてヒアシは戻っていった。が、シロウはその後ろ姿を追うコウの表情の変化を見逃さなかった。

「……コウさん、少し良いか？」

気になっていたことを、此処で聞いておこうと思う。今を逃せば、きっと聞けなくなるであろうし。

「あなたは日向分家の人間か？」

「そうだけど、どうしてだい？」

振り返った時に表情は戻っていたが、その目は未だに曇ったままだ。

「やはり、日向宗家と分家の仲は良くないのか」

ハナビに聞こえないように近づいて言う。

「……そうですね。色々とありまして。元々良くは無かったです  
が」

「そうか」

これ以上は詮索しないで置こう。これは日向一族の問題、部外者が首を突っ込んでいい問題ではない。何より自分では役者が不足している。

「ただいま戻りました……コウさん！」

「ヒナタ様、お久しぶりです」

先ほどの暗い表情から一変、ヒナタを見たコウの顔色は良くなっ

ていた。

「今日長期任務から戻ってきたので、挨拶をと思ったのですよ」

「そうですか。お疲れ様です。父上とは？」

「先に挨拶しましたよ」

……さて、空気約2名はおいとましますか。そろそろ夕食の準備をしても良い時間だし

「あ、シロウ君！……ちょっとだけ、付き合ってくれない？」

「なんでさ？」

コウはすでに帰宅し、ハナビも着替えに行った。道場にいるのはシロウとヒナタの二人だけ。

「で、どうしたのだ？ 急に稽古相手をしてくれたなんて」

「うん……あの、ね。シロウ君、よく、ハナビの稽古相手してるでしょ？ だから……その……」

ふむ、並々ならない事情があるというのは理解した。妹ばかりずるい自分の相手もしろ、というキャラでは無いのはわかっているからな。

「では、どこからでも良いぞ。すまないが私は剣を使うから、竹刀一本だけは了承してくれ」

そういつて先ほどまで使っていた短い竹刀を投影する。

「じゃあ、行きます！」

そういつてヒナタは突っ込んできた。この気迫……以前のモノとは違う。

数回打ち合って捌いて……何かを振り切るように攻撃しているのだとわかった。中途半端に勢いがあって、雑になり、隙だらけだ。

「そこ！」

「ガッ！」

申し訳ないと思いつつ、脇腹に思い切り胴払いを入れさせてもらった。

「集中力が散漫しているぞ。そんなことではいつまでも攻撃は当て

られないぞ」

「……まだ、まだあ！」

「ッ！」

確実に戦意を削り取るように、あえて痛むように打ったのだ（もちろん跡が残らないように加減はしてある）。それなのに、普段あんなどにおどおどしている彼女が、妹以上の気迫で迫ってくるのだ。

「ハア、ハアッ！」

「……」

白眼を使つて、的確に急所を狙ってくる。だが、そのように目に涙を浮かべて、振り切るように挑まれては……

彼女の柔拳による突きを脇の下に通すように交わして、そのままそつと抱きしめる。

「何があつた？ 君らしくない」

「ッ！……う、うう、グスッ」

そのまま泣いてしまった。仕方がない、今回は胸を貸そう。自分にはそんな資格が無いのだとわかつてはいるのだがね……。

「落ち着いたか」

「うん……。ありがとう」

数分で泣きやんだ彼女とともに、道場のすぐ近くの縁側で夜空を眺める。

「……私、不安だつたんだ。父上には才能が無いって見捨てられて、ハナビにも勝てなくて。そしたらいきなりシロウ君と白ちゃんが出てきて。……いつの間にか私はいなくなっちゃうんじゃないかって……」

「そうか。すまないな、いきなり押しかけてしまった」

「いや、そんなつもりじゃなくて！」

「わかっている」

どうやら冗談も通じないようだ。相当追い込まれているのだろうな。

「詰まるところ、唯でさえ才能のない自分の周りに、また自分より強い人間が現れて、自分の存在価値を見失った、と言ったところかね」

「……」

「凶星か……」

「そうだな、確かにハナビと白の才能は本物だ。だが私にはそのようなモノは皆無だよ」

「……うそ」

「嘘ではない。私に出来るのは剣を造ることだけだ。だから私は常に相手を打ち倒す自分を、最強の自分を想像するしかない」

「そう、これがエミヤシロウの全て。」

「でも、シロウ君は強いよ」

「強さは私にとっては手段以外の何物でもない。だが、目的を達するには強くなるしかなかったのさ」

「そう、正義の味方となるために力を欲した。遂には世界と契約する始末だ。」

「だからひたすら努力し、勝つための戦略を練って戦ってきた。最後は呆気なかったがね」

彼女はただシロウの話聞いていた。自分と同年ぐらいの少年が、出きるはずもないような話を真剣に聞いていた。

「だから、毎晩あんな無茶してるの？」

「気付いていたのか!？」

「そう、ヒナタは知っていた。見たのだ。偶然トイレに起きた時、彼が限界以上のチャクラを絞り出して何かをしていた姿を。」

「私には真似できないよ」

「しなくていい。ヒナタはヒナタのやり方をすればいい」

秘密の訓練を見られた事実に向けたシロウは、停止している思考を無理やり回転させて合わせる。

「それで、誰かいないのか? 自分を肯定してくれるような、後押

ししてくれる存在は」

自分にとつてはそれは騎士王であり、遠坂凜だった。

「うん……アカデミーにね、いつつも失敗ばかりしちゃう男の子がいるの。みんな落ちこぼれて馬鹿にするけど、本当は違うんだよ。ナルト君は大事なときにはちゃんと決めれて、どんなに失敗しても諦めないの」

「なるほど、ヒナタはそのナルトという少年が好きなのだな」

「ッ!」

シロウが茶化すと、ヒナタは顔を真っ赤にして固まってしまふ。

パクパクと口が開いたり閉じたりする姿はとても癒される。

「後押ししてくれる存在というものは、かけがえの無いものだ。大事にしろ、ヒナタ」

それだけ言つて月を見る。

自分を後押ししてくれた二人はもういない。騎士王とは あの戦争《聖杯戦争》で別れた。凜とは、生前は自分が姉イリヤに何もできなかった無力さ故に故郷を捨ててから会っていない。マスターとサーヴァントの関係になってからは……最後の約束がそうなのだろうな。

「……シロウ君？」

気がつくとヒナタが覗きこんできていた。よほど変な顔をしていてに違いない。

「すまない、少し話しすぎたな。そろそろ夕食の支度をしよう」

そう言つて立ち上がる。最後にこれだけ……

「ヒナタ、君が強くなるうとするのは自由だ。そうあるうとすれば、いくらでも強くなれる。あと、自分を支えてくれる人間を大事にする。君にとつてそれがナルトという少年だろうとなかろうと、そういう存在は決して手放すな」

そうすれば、きつと、自分のような人間にはならないだろう……

自分のようにだけは、なってくれるなよ……? ?

#### 第4章 後押ししてくれる存在（後書き）

コウの口調分らない……

今回はなんかグダグダですね。

作者のシロウの解釈が大きく出てきた話だと思います。如何でしょうか？

お気付きかと思いますが、このシロウ君はF a t eルート U B Wルート  
のシロウ君です。

ヒナタはすでにナルトにときめいております。

そうしないとシロウの優しさがフラグになりかねないので……（汗

## 第5章 忍者アカデミー（前書き）

お気に入り登録数が100件を突破しました！  
みなさんありがとうございます！

## 第5章 忍者アカデミー

シロウと白が木ノ葉の里に移り住んでから4ヶ月、季節は3月に入ろうとしていた。

「アカデミーに入学？」

「そうだ。これは火影様の意向だ」

日向宗家の屋敷の居間で、ヒアシ、シロウ、白の3人が話していた。

「つまり、監視体制が解けるということでしょうか？」

シロウの問いに、ヒアシが黙って頷く。

「ただし、そのためにはこの木ノ葉の里の忍として、忠誠を誓ってもらう事になる」

「なるほど。私はこの里を出る気はないし、恩もあるから構いはいませんが……白は？」

「ぼ、僕も、ここにいたいんです。行くところも無いし……」

シロウと白は了承する。

「では、来年度からヒナタのいる最終学年に入れるよう申請しておく」

そういつてヒアシは居間を後にした。ただ、シロウはその話の裏を考えていた。

本当に信用されたと見て良いのか？忍という立場に立たせることによつて行動を監視するという手と考えることも出来るが……。いや、考え過ぎか。

あまり悪い方に考えても仕方がない。木ノ葉の里から出る気は無いし、自分はともかく白にとっては、アカデミーという環境に身を置くのは良いかもしれない。

彼女は未だにシロウ以外の人間に慣れていない。人間不信といつても良いかもしれない。

一緒に生活しているヒナタたちとも、うち解けるまでかなりの時



間がかかった。ヒアシに至っては未だにおどおどしている（そのためたまにヒアシが寂しそうな顔をするのをシロウは知っている）。

「……シロウ君？」

「ん？ いや、白が他人と慣れる良い機会だと思ってるな」

そういつと白はうつむいてしまった。

「僕は……まだ、人が怖いです」

それはそうだ。彼女は他人に殺されそうになった経緯を持つ。そしてその相手を殺した経緯をも。

「いきなりとは言わないさ。徐々に慣れていけばいい」

そういつとシロウも居間を後にする。

彼女が何を恐れているのかは、彼女が示してくれない限り自分で想像するしかない。それでも、シロウは彼女の力になろうと思っていた。彼女が……下手をすればかつての“自分”のようになってしまいそう。彼女の“人としての心（感情）”が欠けて、かつての自分と同じような……『人間になろうとするロボット』とならないよう、支えてあげなければ、と思ったのだ。

季節は流れ4月、アカデミーの始業式の日となった。

シロウと白は入学式には参加せず（白が人の多さに怯えてしまったため）、ヒアシとともに職員室に来ていた。

「この子たちがシロウと白だ。一年間よろしく頼む」

「わかりました。責任を持って預からせてもらいます！」

ヒアシと話しているのは、顔に一文字の傷がある男。話している雰囲気からして、この男が教師ということだろう。

「やあ、シロウ君に白ちゃん。俺の名前はうみのイルカ。アカデミーで男子クラスの一つを担当している。よろしく！」

こちらを向いて自己紹介をされる。

「エミヤシロウといいます。よろしくお願いします」  
「……」

白は完全にシロウの後ろに隠れるようにしている。「丁寧にシロウの片袖をギュッと握りしめて。」

「……あー、彼女が白。少々あって、若干人間不信気味だがよろしく頼む」

そつとイルカの耳にささやく。その後イルカの表情は曇ったが、すぐに明るくなった。

「そういうことが。ならくのークラスの先生にも伝えておこう。さ、教室に行くか」

そついつて、シロウと白とイルカの3人は職員室を出た。

「この階が最上級生のクラスがある。そこが女子クラスで『くのークラス』と呼ばれてる、奥の二つが男子クラスだ」

到着早々、クラスが分かれる事に白は怯えていた。つい昨日まで一緒にいた、自分の恩人のシロウと離れなければならないのだ。

「……シ、シロウ君」

「そつ落ち込むな。中にはヒナタもいるし、合同授業があれば会えるだろう?」

おどおどする白をシロウが励ます。その光景はまるで兄が妹を励ますようで、イルカはつい笑みをこぼしてしまった。

「う、うん……わかった」

「頑張れ白。困ったことがあればちゃんと私やヒナタに知らせるのだぞ」

そついつて、彼女はくのークラスの教師に連れられて、教室に入っていた。

その後ろ姿を見るシロウは、少し寂しい気もしたが、彼女のためを思えば仕方ないと割り切った。

中にはヒナタもいるし、きっと大丈夫、だろう……うん、きっと……。

「全く、まるで君たちは兄妹だな」

「実は彼女のほうが年上らしいのですがね」

「……え？」

まあ仕方がない。そういう風に見えただろう。やっていた自分でさえそう思ったのだから。

「それじゃシロウ君も。君は俺のクラスだからこつちだ」

そういつてイルカは自分が担任をする教室に入った。

中ではまだ大勢の子供たちが騒ぎあっていた。新学期が始まったと同時にあったクラス替えの話題が主を占めているのかな？

「おーい静かにしろー！」

そうイルカがいうと、教室は静かになる。去年担任をした生徒も多くいるが、そうでなかった生徒も自分の言うことを聞いてくれて少し嬉しくなった。

「みんな進級おめでとう！ このクラスの担任のうみのイルカだよ。よろしく！」

見知った顔も多いが、とりあえず自己紹介をする。節目というものは大事だと思っっているのね。

生徒のみんなも挨拶を返してくれる。

「それと、今日から新しい友達がこのクラスに来ることになった。入ってくれ」

生徒全員の表情が嬉々としたもの変わる。アカデミーでは入学以外で他の子供が入ってくるのはまれなのだ。どの子供たちも興味津々といった顔をしている。

「じゃあ、入ってくれ」

そういつと、前のドアが開いてシロウが入ってくる。

「じゃあ自己紹介してくれ」

そういつと、シロウは頷いて子供たちのことを一通り見てから話

し始めた。

「エミヤシロウという。趣味は……強いて上げれば料理かな。今は日向宗家にお世話になっている。一年間よろしく頼む」

こうして挨拶をするシロウを見ると、彼は本当に年相応の少年かと疑ってしまふ。

「よろしくー！」

「どこからきたのー？」

「かっけー！」

……生徒たちはすでに受け入れているようだし、まあよしとしよう。

子供というものはつくづく恐ろしいと、シロウは内心苦笑した。いきなりの転入生である自分に興味津々だったりするのだから。

空いている席に座るように言われ、つんつんと跳ねた金髪の少年の隣に座った。

「隣、かまわないか？」

そういうと、クラス中の空気が一瞬変わった気がした。金髪の少年もびっくりした顔をしている。

「……だめか？」

「ッ！そんなことないってばよ！俺、うずまきナルト。よろしくっだてばよ！」

ほう、この子がヒナタのお気に入りナルトか。それにしても、周りがコソコソ話しているが、こういうときはあれだ、無視しよう。

この日は特に授業もなく、顔合わせぐらいで終わった。

教室を出ようとすると、廊下ではよく知る少女が2人待っていた。

「白にヒナタか、どうかしたか？」

「こっちが終わったから、一緒に帰ろうと思って  
どうやら待たせてしまったらしい。」

と、野郎共の視線が2人の少女に向けられている。

「え、ヒナタちゃんの隣にいるの、誰だろう？」

「か、かわいい……」

「美しい花が二輪も」

なるほど、たしかに白は飛び切りの美少女だ。ヒナタもその容姿と性格からか、男子生徒からかなりの人気のようだ。

しかしこの視線……はつきり言っていられなく。白なんて怯えているし。

「ほら、帰るのだろうか？」

そつと、だがしつかりと白の手を握って教室をでる。白が顔を真っ赤にしていたので、野郎共のダメージはデカいだろう。ヒナタもついて来るし、このまままっすぐ帰るとするか。

しかし、白、すまない。私はかつての朴念仁ではない。君の私への好意のようなものには気がついていない。だが、私にはその手をとる資格があるのだろうか……？

私がしてきたことで、救われた人は大勢いるだろう。だが、私の手が血で汚れていることは確かだ。だから……私はまだ、自分を許すことが出来ない。

## 第5章 忍者アカデミー（後書き）

ようやくシロウ達を入学させることができました……  
これからが本番ですね！頑張ります！

現在アンケートを「活動報告」で行っています。この小説の今後にかかる（？）ものなので、奮ってご応募下さい！

## 第6章 強くなりたい

アカデミーにある演習場で、二人の少年が手裏剣投げに励んでいた。「そりゃあ！」

金髪の少年　ナルトが手にした5枚の手裏剣を一息に投げきる。が、的の中心に命中したのはたった一枚で、後は他の的の脇に当たる程度だった。

「全く……。当たらないのにあえて派手にやったら尚更当たらないぞ」

「んなこと言ってもよう……。サスケのやるうはこれでちゃんと全部当たったってだよ」

もう一人の白髪の少年　シロウのぼやきにナルトは不満げに答える。

「実戦で必要なのは派手さではなく命中率だ。私ならさつきみたいな大振りをしている隙に手裏剣を当てるぞ」

そういつて右手に手裏剣を持ち、最小限のモーションでナルトが唯一的に当てた手裏剣にそれを寸分違わず命中させる。

「やっぱシロウは上手いつてだよ！」

「努力したからな」

ようはダークや黒鍵の投擲と同じだ。シロウの場合は『壊れた幻想』<sup>フアンタズム</sup>に応用出来るので、武器の投擲は剣技と同様実戦で鍛え上げたのだ。

「ナルトも確実に命中できる数からやったほうがいいぞ」

「でもよーブーブー」

文句を言っではいるが、ちゃんと実践するあたり努力家である。

この目立ちたがり忍者との掛け合いも慣れたモノだ。たいていはシロウのアドバイスを聞きはするが、いつも素直ではない。そのたびにシロウは苦笑するのだが。

シロウと白がアカデミーに入学してから2ヶ月、二人はだいぶ雰  
囲気に慣れてきていた。

シロウに関してはクラスの中でいい感じに溶け込めていた。白は  
まだおどおどしているようだが、ヒナタと山中いこのという少女のお  
かけでだいぶやわらかくなりつつあった。

ただ、シロウは精神年齢はすでに20後半だったりするため、ち  
よっと憂鬱な部分があったのだが。隣の席のナルトと、奈良シカマ  
ルという少年と秋道チョウジという少年の三人とは仲がよかった。

というのも、ナルトはヒナタのいうとおり失敗ばかりで、俗に言  
う落ちこぼれだった。シロウは座学はそれなりに実践や演習はトッ  
プの成績だったが、いかんせん忍術に関しては、ナルト並のためさ  
だった。本人は気にしていなかったが、周りの目は困惑したものだ  
った。忍術“だけ”異様に悪いのだから。

そのためシロウはナルトとよく一緒に忍術の修行をしていたのだ。  
たまにナルトの手裏剣術を指導することもあった。

シロウはナルトの事を高く買っていた。というのも、彼のチャク  
ラの量はアカデミー生の中でも群を抜いているからだ。それなのに  
術の成功率は低い。今は他人からバカにされているが、その大量の  
チャクラを余すことなく使えるようになったとき、彼の實力は跳ね  
上がる確信していた。なにより、かつての何も出来ない自分が重  
なって相手をしている、ということもある。

「む、そろそろ門限か。じゃあナルト、また明日」

「お、そっか。じゃあな！」

日向家の門限は早い。だが居候の身であるシロウと白は文句を言  
える身分では無いので従っている。帰宅後にはシロウは食事の用意  
を、白は洗濯などの家事をこなす。居候は辛いのだ。だが食い扶持  
が無いので甘んじるしかない。収入が出来たらいつまでも甘えるわ  
けにはいけないな、と密かに思っていたりする。だけど白もあの空



気に慣れているし、ハナビもシロウに完全に懐いているあたり、どうしたのかなーとか思ったりしているが、それはすべてシロウの心の中のお話。

「さて、今日の夕飯は何にするか……そういうえばメインになりそうな物が切れていたな。買い足しておかないと」

主夫モードに切り替わったシロウは、ほくほく顔でスーパーに足を運ぶのだった。そして大安売りの豚バラを買うことができたため、ハナビのテンションが俄然上がったとか何とか。

その日の夜、道場には変わった二人がいた。

「シロウ、話とは？」

そこにいたのはエミヤシロウと、日向一族頭首の日向ヒアシだった。

「少し聞きたいことがあります」

そこにいたシロウの顔はとてもまじめなものだった。

「分身の術のように幻影ではなく、実体を複製するような術はありませんか？」

そういうとヒアシの表情が曇った。要望に該当する忍術は、上忍にとってはメジャーなものがある。だがそれは高等忍術であり、下忍の、特にお世辞にも才能があるとは言えないシロウには、教えていいものかどうか非常に悩ましいのである。

「確かに実体を作り出す術は存在する。だが、それはかなり難易度の高いものだ。第一、分身の術も使えないお前では」

「分身の術ならもう習得した」

ヒアシの言葉を遮り、実際に分身の術をやってみせる。白い煙とともに、シロウとそっくりの分身がきれいに出来上がった。

ほう、という顔をされるが、シロウは気にしない。基本的なこの術でさえ、習得するのに軽く3週間かかった。平均的な生徒は1週

間あれば習得できるらしいし、ヒナタも白も例外ではなかった。純粹にセンスの問題だ。

「ここまでで3週間。まあ自分としては上々だと思ってる」

「分身の術で3週間か……。ほかの術は？」

「変化の術は微妙だな。まだそこまで取り組んでいないし。変わり身の術はすぐにできるようになったのだがなあ」

そうなのだ。変化の術ははっきり言って脈なしのくせに、それより少し高度な変わり身の術は、数回で成功させた。相性というものなのかわからないし、周りもかなりびっくりしていた。はっきり言つて『なんだこいつ!』という感じである。

「そうか……。なんとというか、複雑だな」

「全くだ。私自身もいまいち掴めない状態です。自分の身のことなのにな……」

二人そろつてため息をつく。はたから見ると大人と子供の組み合わせのはずなのに、違和感がほとんどないのはなぜだろう。

「よし、そういうことなら教えよう。ただし、条件がある」

ヒアシの変化に感づいたシロウは気を引き締める。今の彼は居候先のおっさんではなく、忍の道の師である。

「少々失礼なことを考えられた気がするが……。まあいい。シロウが所望する術は“影分身の術”という。これは自分の実体そのものを作り出すことができ、その分身がした経験を本体にフィードバックすることができる。ただし、」

ここで言葉を区切る。ここからが本題だ、と言わんばかりに。

「この術は術者のチャクラを分身の数だけ等分する。2人なら半分に、3人なら3分の1に、といった具合にだ。そこで、シロウにはこの術を教えるにあたって、誓約をしてもらいたい」

「……いいでしょう」

シロウには影分身の術を覚える理由があつた。いや、覚えなければならなかつた。あることをするために

「1つ目は日向宗家の敷地内でのみ使用すること。2つ目は作り出

「す分身は一回につき一体だけというのを守ること。この2つだ」  
「わかった。その2つは厳守するよう誓いましょう」

この2つの誓約に、シロウの目的を害するものは存在しなかった。1つ目に関しては、下手に外でやって失敗すれば命に係わるので、無理に術を行使する必要はない。2つ目に関しては、分身の数を増やすくらいなら、その分の魔力を投影に回すほうが有効なので問題なし。元々今の魔力量では心もとないのだ。それを克服するための影分身の術なのだが

「なら、教えよう。かく言う私も、あまりこの術は多用しないのだがね」

そういつて、実際に影分身の術を試みせる。出来上がった分身が確かに実体を持つことはシロウでも感じ取ることができた。

その後、特殊な印やらなんやらを伝授した後、先ほどの誓約に釘を刺してヒアシは道場を後にした。

「さて

道場に一人残ったシロウは、早速影分身の術の練習を始めた。

これが、のちに同居する人々に大きく影響を与えることになるかも知らずに

夜遅く、翌朝の朝食の下ごしらえをしていたヒナタは、まだシロウが風呂に入っていないことに気が付いた。

「ねえ、誰かシロウ君を知らない？」

偶然居住者が勢ぞろいしていた居間に顔を出す。ハナビはすでに船をこいでいるくせに、明日アカデミーが休みだからと白と始めた花札をやめようとしなない。

「シロウ君、ですか？……確かに夕食後は見てませんが」

白があいまいに答える。誰も答えを知らないのだ。

「まさか……！？」

ヒアシが何か思い出したのか、急に立ち上がり、駆け出す。あまりの勢いにほかの3人は呆けてしまった。

「じゃあ私、見てきます。白ちゃん、八ナビをお願い」

「わかりました」

半分寝ぼけている八ナビを寝かせつける役を白に任せ、ヒナタは父の後を追った。

「シロウ！ お前　！　大丈夫か!？」

急いで道場に駆け付けたヒアシが見たものは、床に突っ伏しているシロウだった。

急いで駆け寄ると、何とか息をしている様子だった。彼のチャクラがほとんど感じられない。つまり、影分身の術を失敗し、チャクラを枯渇させた状態になったということだろう。

ヒアシは自分の愚かさに舌打ちをした。影分身の術は、成功したとしても体内のチャクラを半減させる術なのだ。それが失敗したとすれば、少なくて半分、下手をすればもっと多くのチャクラを失いかねない。しかも、その術を行使しようとするのがシロウ（才能のないもの）なら尚更だ。それをわかっていながら、彼から目を離した自分は大馬鹿者だ。みすみす彼を殺すようなものではないか。

「ヒアシか。どうした、難しい顔をして」

気が付くと、シロウが顔だけ向けて話しかけてきていた。よほど弱っているのか、普段の彼からは想像できないくらい力のない声だ。「無理をするな。こんな状態になってまで、何を焦っている」

「焦る？　ああ、確かに私は焦っているのかもしれない」

独り言のように呟きつつも、シロウは立ち上がる。若干ふらつきつつも、確実に自分の脚だけで。

「今の私では……何もすることはできない。だから、少しでも、力を取り戻さなければ。出ないと、私は……また、誰も、守れない」

口から言葉がこぼれる。後半以降は、近くにいたヒアシでさえ聞き取ることではできなかった。

印を組む。限界以上の魔力チャクラを絞り出す。次こそは

「トレース・オン」

言い馴れた、エミヤシロウの存在に深く刻み込まれた呪文を唱える。体中に魔力チャクラがめぐるのがわかる。これが経絡系と呼ばれるものなのだろうか。

シロウは確信する。今度こそ成功する。

「影分身の術！」

そこには完璧なシロウの分身（実体）が存在した。

それを確認すると、本体のシロウは崩れ落ちた。満足そうな顔を  
して。

「シロウ君！」

彼と父とのやり取りを見ていたヒナタは、彼が倒れるのをみてすぐに駆け込んできた。

「ッ！ヒナタ」

「父上！ 早く、シロウ君を運ばないと」

ヒナタの叫びで我に返ったヒアシは、そっと少年を背負って道場を娘と後にした。

シロウはすぐに彼の使っている寝室の布団に押し込まれた。

「父上、教えて。シロウ君は、何をしていたの？」

いつもおどおどしているヒナタが、はつきりと父親の目を見て話した。話しかけられたヒアシと、それを見守る白も、彼女のその迫力に驚いていた。彼女がここまで人に凄んでいるところを、誰も見たことがなかったのだ。

「影分身の術だ。彼に頼まれて教えた後、ずっとあそこで練習していたのだろう」

そうとしかいうことができなかった。

「影分身……。実体を作り出す術ですよね。チャクラを等分する分、失敗すればかなりのチャクラを失うことになりかねない、というも

のでしたよね？」

「知っていたのか？」

白が影分身についての説明をした。元々書物庫にこもって本を読むのが好きだった子だ。影分身の関連するものでも読んだのだろう。

「そんな……！ お父さん、なんでそんな危ない術教えたの！ シロウ君、忍術は苦手だったの知ってるでしょ！？」

ヒナタの怒声で黙り込む。つい最近まで、ハナビにさえ遠慮をしていた弱気な彼女が、ここまで他人のために怒ることができる子だとは思っていなかった。

「……シロウが毎晩術の練習をしていることを知っていてね。それこそ彼の命を削る勢いでね」

アカデミーに通いだしてから、シロウのトレーニングは宝具投影と忍術練習の2つになっていた。宝具に関しては相変わらず人目につかない所ではいるが、忍術は道場でやっていた。強度は相変わらず、生と死の瀬戸際まで追い込むようなものだが。その様子を、ヒアシは以前から知っていたのだ。

「彼の努力する姿を見ていると、どうしても協力してやりたくなくなってしまっ、ね」

彼の努力する姿は、はつきり言ってすさまじいのだ。血のにじむといった表現では足りない、命を削るといっても過言ではないような姿を見せつけられるのだ（のぞき見であるが）。だから、つい彼の力になりたいと思うのだ。この気持ちがどこから来るものかはわからないが。

「……シロウにとって、自分の命はとても軽いものなのかもしれない」

そう、思ってしまう。それほどまでに、彼は、自分を追い込むのだ。

「だから、ヒナタ、白。シロウをよく見張っておけ。彼がいなくなったら悲しむ人間が大勢いるんだとわからせておけよ」

そういって、ヒアシは部屋を出た。否、そうするしか出来なかつ

た。

同年代の、しかも家族同然の子供たちに心配されては、彼も無理は出来ないだろう。

とにかく、今彼らに自分が出ることは何もない。ヒアシはかつて弟を失ったときの無力感と似たものを感じつつ、何も出来ない自分を悲しく思った。

部屋に残された2人は、布団で静かに寝息を立てるシロウを見つめたままだった。

「……シロウ君が、そんな風に思っているなんて思えないけど」

「でも、思い当たること、ある……」

白のつぶやきにヒナタが反応する。ヒナタは俯いたまま続ける。

「前にね、夜遅くに庭でシロウ君が何かしてたのを見たの。そのときもチャクラが枯れてて、すごく無茶してるんだと思ったんだけど

……」

そういって3人は黙り込む。自分たちがどれだけ彼の<sup>シロウ</sup>ことを知らないのかを痛感する。

元々謎の多い少年ではあった。考え方がとても大人だったり、妙に優しかったり、背中が無駄に広かったり、異様に家事スキルが高かったり、e t c . . .

「でも、それだけ自分を追い込めるのも、シロウ君が強いから、なんだよね」

「そう、ですね」

「うん。私決めた」

そういって、ヒナタは顔を上げた。

「私、強くなる。シロウ君がこんなに無理しなくてもいいように……。私も、みんなを守るくらいに、強くなりたい」

「そうすれば、彼の見ているものも見えるかもしれないね」

ヒナタと白は決心した。この少年を 自分たちの家族を遠くに行かせるものかと。そのために、自分たちも強くなるうと。

「いつまでも、ハナビに負けていられないもの。ハナビに、つらい思いをさせたくない。私も、誰かを守るくらい強くなりたい」

「僕も、シロウ君に恩返しがしたいです。僕のことを助けてくれたシロウ君を助けたいです」

2人で顔を見合わせて頷く。

「じゃあ2人がちゃんとシロウ君を見張ってて、あわよくば鍛錬に付き合ってもらってことでどうでしょう?」

「え、でもそれシロウ君の迷惑じゃ……」

「手綱を持っていた方がいいと思いますよ」

「でも……。うん、じゃあそれでいこうか」

シロウやヒアシが気がつかない間にヒートアップする娘っこ2人なのだった。

「で、この状況ということかね」

翌日、元気になったシロウは道場に呼び出された。そこでは娘3人が待ちかまえていた。

「シロウ君が無理をすると、僕たちは心配するんですよ。だから見張りも兼ねて稽古をつけてもらおうということになりました」

「シロウさん、ハナビは是非お願いしたいです!」

「シロウ君がいやなら、無理にっては言わないけど……。でも、私たちはみんなシロウ君が心配なんだよ?」

ド直球でもの申す白、追撃するハナビ、無意識な上目遣いで決定打を放つヒナタ。お人好しなシロウの人柄も重なって、完全に拒否出来ない状況になっていた。

(チツ、こやつらめ、計つたな)

そう思っても後の祭りである。シロウ自身、自分の身の上を心配されることがかなり昔のことのため、困惑しているのだ。



「しょうがない。どのみち君たちは譲歩する気はないのだろうか？なら承するしかあるまい」

降参を表現するのに、両手を上に上げてひらひら振る。それを見た3人は安心したようだった。

「なら早速稽古つけてくださいです！」

「あ、ハナビずるい！」

「早いもの勝ちです」

そういつて意気揚々とシロウの前でハナビが構える。今日も長い一日となりそうだと、シロウはこっそりため息をついた。

昼食時になって、普段食事をとる居間に誰もいないことを不審に思い、ヒアシは屋敷の中をうろついていた。

そして、道場にたどり着いたとき、中は死屍累々としていた……。

「……もう、動けない、です」

「……これ死んじゃう……からだ動かないもん」

「シロウ君……手加減、なさ過ぎます……」

床に転がる屍3体がこぼす。対してシロウは息が上がっているもののしつかりと2本足で立っていた。

「はあ、はあ、ぶっ続けで相手をする私の身にもなれ！」

だがその顔は清々しいものだった。

聞くところによると、シロウが無茶をしないようにと、見張り兼鍛錬ということで、ひたすらヒナタとハナビと白はシロウに挑んでいったらしい。ヒナタに至っては、普段と違ってきびきびと柔拳を突き出してきたらしい。それがシロウにとってはとてもうれしかったようだ。

「しょうがない。消化にいいものでいいだろう。2時からまた始めるぞ」

「……鬼だ……」

言い出した以上断ることは出来ない。彼の時間をわざわざ割いてもらっているのだから。

その日の午後は、ヒアシも交えてひたすら組み手三昧となった。

「さて、そろそろ影分身の術の復習をするか」

それに異を唱えることの出来る人間はいなかった。ヒアシは特に止めはしないし。3人娘は床に川の字に突っ伏していた。

「魔力チャクラを練って……影分身の術！」

術独特の印を結び、術を発動させる。が、

「……なんでさ？」

白煙は上がったものの、分身は出てこず、がっつり魔力チャクラを失って屍の仲間入りをする羽目となった。

エミヤシロウが忍術を身につけるにはまだまだ時間が掛かりそうであった。

## 第6章 強くなりたい(後書き)

アンケートは10日くらいに締め切ろうと思います。

豚バラのくんだりには作者が好きだからです、豚バラ。好物バナナとか飯ネタに困るわ！

アカデミー編もあと1、2話くらいかな

## 第7章 演習も楽じゃない(前書き)

総ユニーク数が1万hitを超えました！アクセス数ももう少しで10万いきそうです。

## 第7章 演習も楽じゃない

肉薄する刃と刃。白と黒の夫婦剣による、4枚の翼で織りなされる舞。

舞を踊るはふたりの少年、いや、全く同じ少年がふたり。同じ得物を構え、ひたすらに打ち合う。

「シロウ君も飽きずにやるよねえ……」

「ふつつ、思いつきませんよね。影分身と打ち合いするなんて」

それを見張るヒナタと白は、毎回の光景をぼんやりと眺める。

そう、すぐそこで双剣で斬り合っているのは二人のシロウなのだ。

もちろん片方は影分身である。数ヶ月前にヒアシに無理を言っただけで影分身を覚えたのはこの為だ。

お互いの刃がぶつかり合い、火花を散らす。だが決してその刃は肉体には届かない。自分自身の動きを理解しているが故の芸当である。

夫婦剣『干将・莫耶』による舞から始まり、ロングソードや槍、黒鍵による投擲攻撃にまで発展する（もちろん周りに被害が及ばないようにしているが）。どれも神秘性の低いものにして、数を多く投影出来るようにしている。見張り（ヒナタか白）がいるので。おかげで宝具投影は出来ず、ひたすら影分身との打ち合いに興じている。といっても本人にとつては命がけの修行であるが。

「「あ」「」

影分身が魔力切れで消え、その疲労が本体にフィードバックされ、シロウがぶっ倒れる。

「……こう毎日倒れられると困るんですけどねえ」

「そのせいで私たちはどんどん凶太くなってる気がする」

白が呆れかえり、ヒナタが苦笑混じりに同意する。おかげで夕食の準備はヒナタの仕事となった。しかも毎回ぶっ倒れるので2人の

神経は強くなる一方である。慣れとは恐ろしい。

「……………ん、んん。また私は」

「気がつきましたかシロウ」

「まったく、無理しないでよね」

2人に攻められぐうの音も出ない。

「さ、晩ご飯にして早く寝よう。明日は合同演習なんだから」

読書の秋、食欲の秋、鍛錬の秋……………？何はともかく、今日もシロウたちは平和である。

……………はずだった。

「エミヤシロウ、俺と戦え！」

なんでさ？

事は遡ること1時間前

「今日の演習は4人一組でやるサバイバル演習だ。森にある巻物をとってくるんだ！」

『うおー！』

「ちなみに、班員はちゃん決めてやったからな」

『ええー！…！』

やはり子供なんだなーっとシロウは苦笑する。同じくらいの頃は、ちょうど切嗣（爺さん）が亡くなった頃か。つまり、これくらいの時に俺は“正義の味方”にならなければならなくなっただっけか。

「シロウ、どうしんだってばよ？」

「む？」

「なんつうか……………寂しそうな顔してたってばよ」

「寂しい……………？私がか？」

つい尋ねると、ナルトに真顔で頷かれる。……………本当に自分らしくない。ここに来てから衛宮士郎（過去の自分）よりもエミヤシロウ

(未来の自分)よりも、感情が表に出ている気がする。

「何でもない。それより、イルカ先生の話の聞かないと班割りからないぞ」

「あ！ そーだった！ サクラちゃんと、サクラちゃんと一緒に」

「ったくよう、ナルトにシロウ。仲がいいのはいいけど程々にしとけよ」

「シカマル、ひでえってばよ……」

「そうだぞナルト」

「シロウ裏切るなつてばよ！」

シカマルの参戦でナルトの立場は一気に悪化する。シカマルとシロウ2人のコンビによってナルトはたびたび弄められる。その光景がほほえましいのは仲がいい証拠だからだろうか。

「おらそこうるさいぞー！ 4班はエミヤシロウ、うずまきナルト、日向ヒナタ、山中いの。リーダーはシロウだ」

「お、シロウと同じ班！ サクラちゃんとは違うけど、これなら楽勝だつてばよ！」

「あー、シロウ。ご愁傷様」

「どういう意味だつてばよ！」

男子は男子で盛り上がり、

「な、ナルト君と同じ……白ちゃんどうしょ！」

「落ち着いてヒナタさん。そんなこと言ったら、僕はシロウ君と違う班ですよ……」

「う、ごめん」

女子は女子で悶々としている。

「5班、うちはサスケ、奈良シカマル、春野サクラ、白。リーダーは白だ」

「サスケ君と一緒に！ しゃんなるー！」

「ふん……」

「めんどくせえ……こんな面子じゃあやってらんねえよ」

「サスケ君、ですか……シロウ君と一緒にじゃないならどうでもいいです」

「白ちゃん、今のなかなかの問題発言よ！」

「そうなのですか？ ……僕にはどこがいいかわからないです」

あ、今サスケがビクツと反応した。アカデミー始まって以来の美少女にぎっぱりと切り捨てられたのだ。女子は女子で白の発言に盛り上がっている。

シロウはサクラという名前に一瞬反応したが、その人物（春野サクラ）を見て……リアクションに困った。同じ名前でもこっちは桜の花のようなおしとやかさは皆無だな。うん。

「ヒナタ、あの巻物は？」

「ええと、“白眼”！ ……あ、違う」

巻物には番号があり、班と同じ番号の巻物を持ってこないといけないのだ。いきなり見付けたナルトがダッシュして違う番号のものを持って行って赤っ恥掻いた。

「ご、ごめんね。ナルト君……」

「ヒナタのせいじゃないってばよ。ほら、次行こうぜ！」

「……う、うん」

後ろでなにやら暖かい空気が……そうか知らない間に冬は過ぎて春が来たのだな？

「……ねえエミヤ君。何で私たちこんなに距離をとらないとなのです？」

「何も言うな」

うん。邪魔をするのはヒナタに申し訳ない。ここは空気になってやるのがチームワークだ。頑張れヒナタ！

「ふうん、ヒナタがねえ。じゃあエミヤ君、私たちもふ・た・り・でえ……ごめんなさいそんな眼で見ないで」

シロウはいのとは初対面だったが、印象は悪くなかった。白もお



世話になっているので無碍には出来ないが、いかんせん分かり易いので、からかいがあるのだ。いやぁ楽しい楽しい。

と、

「お、ナルトにシロウに……げ、いのかよ」

「シカマル！」

ここでシカマルのいる班にあった。ということは……

「げ、ナルトにいのぶた……」

「シロウ君、ヒナタさーん！」

「ふん……」

サクラに白にサスケもいた。白の手には巻物が、しかも4番と書いてある。

「あー！ その巻物は俺たちの班のやつだってばよ」

「これですか？ 今見つけたんですけど」

「……」

「ヒナタ、落ち込むなってばよ」

真っ先にナルトがフォローに入ってくれる。根は優しい子なのだ。

白班はぽかんとし、シロウ班は落ち込むヒナタを慰める。

「白、出来ればそれを譲ってくれないか？」

「あ、いいで」

「エミヤシロウ、俺と戦え！」

空気が、凍りついた。

「……白、巻物」

「あ、はいどうぞ」

「俺を無視するな！」

一番に復活したシロウが、何事もなかったかのように巻物を受け取る。サスケは癩癩を起こすがシカトされる。

「……怖いのか、エミヤシロウ？」

「よし、ナルト、ヒナタ、いの。早く戻って昼食にしよう。弁当多めに作ってきたんでね」

「よっしゃー！ シロウのご飯」

「え、エミヤ君って料理出きるの？」

「私の先生なんだよ」

「うそ！ じゃあヒナタの弁当が急においしくなったのはエミヤ君のおかげ！？」

「……」

完全無視。挑発にも全く乗らない。少し格好付けたのもありかなり恥ずかしいことになっている。ナルトとシカマルは必至に口と腹を抑えている。普段はサスケloveなサクラというのも、料理の話に持って行かれてサスケ空気。

「ほらサスケ、相手なら後でしてやるから。ここは抑えてくれ」

「誰が」

「よっしゃー早速演習場の入り口にもどるってばよー！」

完全に空気のサスケ君だった。

interlude in

アカデミーに厳戒態勢の知らせが届いたのは、子供たちが演習場に入ってから一時間経たない頃だった。

「なんだってこんな時に……！」

うみのイルカは焦っていた。アカデミーの教師総出で演習場となっている森で生徒を捜し回る。

『抜け忍が演習場に入ったらしい』

暗部からの情報だ。警備の甘さを指摘したら、潜入後まっすぐアカデミー生がいる森に向かったという。すでに暗部が動いて半分は始末したそうだが、3人ほど逃したという。

生徒の誰かを狙っている事は明白だ。九尾を封印されているナルトか、うちの末裔のサスケか、もしくは……

「おい、イルカ！」

「ミズキか！ 何人保護できた！？」

「ほとんどだ。後は4班と5班だ」

同僚のミズキが報告に来てくれるそれよりも4班と5班だと……。まずい！確実に狙われかねない面子ばかりが残っている。

「くそ！ ミズキも手伝ってくれ」

「おう！」

ミズキと分かれて森の奥に行く。くそ……間にあってくれ！

「ふん、5班はどうでもいいとして、4班が残ってくれなくちゃ困るんだよ。白眼には高い値がつくんだからよ」

interlude out

「シロウ、なにいそいでんだったよばよ？」

「食事になりたいんだよ」

シロウが急ぐものでほかの面子は若干駆け足ぎみだ。

おかげですぐに演習場の森の入り口にまでたどり着くことができた。

「おい、ナルト！」

「え、イルカ先生」

森の中からイルカがくる。シロウの顔が一瞬曇ったのを見たものはいなかった。

「どうしたんだってばよ、いったい？」

「いいから、今日の演習は中止だ。急いでアカデミーに」

刃が空を切る音と、金属同士がぶつかり合う音が響いた。

「え？」

そこには両手に黒と白の双剣を持つシロウと、彼の周りに落ちるクナイが在った。

「全く、だからこうして急いで戻ったつてのに」

小さく舌打ちをして、目を森に向ける。

「イルカ先生、お客が来ましたよ」

そう言い切ると、森から鋭い殺気が漏れ出す。シロウがさらに森を睨み、イルカが構え、他の者は怯える。

（なんだよこれ、目を動かしただけで殺されそうだ……）

（なんで、なんでシロウは平気な顔でたつてられるのよ）

サスケのように正直に怯えるもの、いのようにシロウの様子におののく者、それぞれとにかく怯えていた。

「……ふん、こんなガキに止められるとはな」

「ッ！」

森から2人が出てきてイルカに襲いかかる。それにイルカは対応しきるが、森からはまだ殺気が漏れている。

「目的は貴様ではない。いただくぞ！」

殺気がイルカの頭上を越えて、子供たちの方に一直線に飛んでいく。狙いはナルト（九尾）でもサスケ（うちはの末裔）でもなく、ヒナタ（白眼）

「やらせるとでも？」

構えた双剣　干将・莫耶で迎撃する。傷を与えることも受けることも無かった。が、

「ほう、これ以上出てくるとけがするぞ」

「こんな子供、一撃で仕留められないとはな」

軽口を言いつつも、今の自分は“マスターとして”聖杯戦争を戦った時ほどの実力だ。強化を施したところで、こちらではどれほど通用するのかが分からない。

「だが、俺の狙いは貴様じゃない。白眼以外に興味は無いのでね」

男の視線がヒナタに移る。それを受けてヒナタがビクツと怯える。

……当然だ。子供がこんな殺気を受ける事はない。

「なんだってばよ、なんだよ白眼って!?!」

「日向一族の持つ特殊な目だ」

ナルトの癩癩にシロウが答える。

「さてと……その少女、もらい受ける!」

男が一気に突進してくる。まだシロウの事を舐めている、ということだろうか。

逆手に持ったクナイを、双剣で受け止める。

「チツ」

お互いに飛び退いて舌打ちする。男は計画の狂いに、シロウは現状のまずさに。

不味いな、このままじゃ……。長引けば分が悪いのはこっち(シロウ)だ。双剣の利点は素早い手数で相手が攻める間もなく攻められることだ。切り返しを早くできるようにするフリーチは無い。以前なら体格が有利だったので問題なかったが、今は小さい……。しかも相手の得物は投擲出来るモノばかり

投擲? そうか。

「悪いが、攻め方を変えさせてもらうぞ。 トレース・オン 同調開始」

シロウが剣を手放し、両手にそれぞれ3本ずつ黒鍵を投影する。

使い方ならわかる。かつて『弓』にいやと言うほど思い知らされたのだ。全く、麻婆神父の戦い方を同調するのは吐き気がするからな。

「ほう、そんなもので ツ!」

男に向かって一気に投擲する。避けられたところにまた新たな黒鍵を投影して投げつける。

「 ツ!」

きつい。『強化』しているといっても、こちらの方が体格的な不利さは変わらない。だが、そんなことを気にしている訳にはいかない。

黒鍵ならまだ10本は投影出来る。どれだけ敵の周りに黒鍵を集められるかが鍵だ。

相手着地点の後ろに回り込んでまた両手の黒鍵を投擲する。

「さつきからちよろちよろと……」

男もいらついている。が、こちらの誘導通りに動いてくれている。気がついていのかどうかは別としてだが……。

最後の黒鍵を投擲する。これで敵の周りには黒鍵が溢れかえっている。

「ふん、いい加減にしたらどうだ。こんな武器振り回して」

こちらが動きを止めたのを見て、男が黒鍵を一本手に持ってこちらを向く。シロウにはもう動ける魔力チャクラは無い。が、

「終わりだ。『壊れた幻想』ブロークンファンタズム!!!」

一息に呪文を唱える。

瞬間　すべての黒鍵が起爆した。

2人を足止めしていたイルカも、敵2人も、爆発音で後ろを振り向いた。そこにはクレーターが一つ、その中に黒こげの人型が有るだけ。

「まさか……シロウが？」

シロウ以外の人間は、この異常さに何も考えられなかった。いや、驚愕の一言に飲み込まれて何も考えることが出来なかったのだ。

「どうやって……グアッ！」

敵の一人が頭から突っ伏す。その後ろには忍装束に仮面をつけた男。ようやく暗部のお出ました。

「チッ！　気がつかれたか」

もう一人が森の中に逃げ込んで行くが、ここに暗部が到着した時点で、彼の命は無い。ここで俺イルカのすべき事は

「お前たち、大丈夫か!？」

急いで生徒達のもとへ。

「シロウ、おいシロウ！」

「……耳元で騒がないでくれ。頭に響く」

気がついたらイルカが駆け寄ってきていた。それよりも、

「あいつらは……？ ヒナタは無事か？」

「ああ。問題ない。お前のおかげでみんな無事だ」

そうか、よかった……。ほっとしたら一気に眠気に襲われた。ヒナタを始め他の生徒全員が駆け寄ってくるが、その顔を見ることが出来ないし何を言っているかも聞き取れない。顔を上げる力も残っていない、焦点も合わないのだ。完全燃焼と言っているいい状態だ。いや、この状態で終わらせることが出来ただけよかったのか？とにかく後が怖いのだが……。

「すまないが少し寝る。魔力を使い切ってしまった……」

笑みが溢れる。自分はまだ、誰かを救うことが出来たのだ。なるべく心配をかけないように、その表情を崩さずに意識を手放した。

翌日

「シロウー！ お見舞いにきたってばよー！！」

『おじやましませーす』

アカデミーの帰りによったのか、ヒナタと白の後ろには、ナルト、シカマル、サクラ、いのの4人が来た。さすがにサスケは来なかったようだが、2人の話から一応気にしてはいるようだ。

で、当のシロウはと言うと……

「すまない。こんな形での再会だ」

布団の中でおとなしくしていた。

魔力を使い切ったため気分は未だにあまり優れないが、体調は問題ない。のだが、家主の娘っこ約2名の拘束により、布団で大人し

くしていた次第である。

「しかしシロウ、お前よくあいつと対峙出来たな」

「そうよ、私たち怖くて何も出来なかつたんだから」

シカマルとサクラに尋ねられる。

「ふつうはそうだ。私の場合は……まあ、いろいろあつたんだ」

「その色々を是非お教え願いたいな」

「勘弁してくれ」

いのに追撃される。こいつ、日頃の恨みか……？

「なあなあシロウ、あの術なんて術なんだ？ おしえてくれれば

よ！」

ナルトがシロウに絡む。まさかそう来るとは……。

「術とは……？」

「とぼけるなつてば。あの剣出すの、あれなんだつてばよ？」

他の面子も興味津々つて顔で見ってくる。さてどう誤魔化そうか…

…。

「あれはだな、そう。エミヤ一族に代々伝わる秘術なのだよ」

説明口調で誤魔化す。衛宮が使えるのは本当は時空間魔術だが、

残念なことに自分は養子なのだ。まあ、誤魔化すにはそれが一番かな。

「つーことは、シロウにしかそれ出来ないって事か？」

「そういうことだ」

「えー！ ずるいつてばよ！ あんなに格好いいのに」

ナルトがむくれる。そういつてくれるなよ。私がどれだけの時間

をかけてこの力を安定させたと思っているんだ。少し怒るぞ。

穏やかに時間が過ぎ、昼を回ったあたりで解散となった。

「じゃあそろそろ行くわよ。またね、エミヤ君」

「早く良くなれよ」

「じゃなーシロウ！」

「じゃあね。ヒナタに白も」



上から順にシカマル、いの、ナルト、サクラだ。  
しかし。全く、良くヒアシが許可を出したものだ。

「シロウ君、体の方は？」

「私は大丈夫だとずつと言っているのだが」

そうぼやきつつ、軽くストレッチをする。来週にはまた試験だ。

ああ、変化の術じゃないといいんだがなあ。さて、

「……ヒナタ、そう落ち込むな。あれは私がしたくてしたことだ」

先手を打っておく。目が覚めてからヒナタに泣き疲れて謝り続けられた。何度も気にするなと言っても、どうしても聞いてくれなかったのだ。

「でも……」

「……そうだな。もし迷惑をかけたと思ったのなら」

攻め方を変えようしよう。

「私より強くなるか、守ってくれるような人をとっつかまえるか…

…あと、旨い夕食を頼む」

「え……～～～～！！」

意味ありげに笑ってみせる。言葉の真意に気がついたヒナタは真っ赤になる。それに、何か物を口にしたほうが、魔力チャクラの回復も早い。さてと、ヒナタとナルトをくつつけるにあたり……ナルトもしいておかないとなあ。

気がつかないうちに、シロウは“あかいあくま”の一面が移っていた模様。

後日、復帰したシロウに“修行”という名目で、しばらくシロウにいじめられ、その傷をヒナタに介抱してもらっている(させられている?)ナルトの姿があったとか。

## 第7章 演習も楽しめない(後書き)

つめが甘い内容になってしまいました……  
最近“キャラが立つ”というものを感じてきました。書いていて楽しいです。

アンケート締め切ります。ご協力ありがとうございました！  
結果は……次話で！

## 第8章 第9班(仮)集合

interlude in

「ちよつと待つて下さい。何で私が担当上忍をやらなければならぬんですか？」

火影邸に呼ばれたみたらしアニコは、まさかの命令について口論した。自分はまだ特別上忍で、とある理由から力をあまり使うことが出来ない。そんな自分が担当上忍など出きるはずがないのだ。

「すまんが、決定事項じゃ。それに、この面子なら、どういうことか分かると思うがの」

「えー……。ちよつとこれ」

自分が担当することになる下忍は、一人は生粋の木ノ葉の少年だが、あとの2人は……

「白のほうは問題ないんじゃないの？」

「彼が噂の少年ですか」

そこにある写真は、赤っぽい着物に白髪少年。数ヶ月前に侵入してきた抜け忍を1人殺したという。

仮にもアカデミー生が、これほどの強さを持つことは普通じゃないのだ。

「暗部側の条件ということ、か」

その一件で、この少年は暗部に目を付けられたのだ。そして、特別上忍の自分が選ばれたということは……

「貴重な上忍を使わないで、爆弾になるかもしれない私で見張らせる。下手に動けばまとめて始末できるように、といった所ですね」

「……すまんの。儂でもどうすることも出来なんだ」

予想的中。火影様の表情が曇る。仮にもアニコは火影様の弟子の弟子。捨て駒にならないよう手を回してくれたのかもしれない。……

……いや、自意識過剰か。

「気にしないで下さい。そういうことならやります。でも、暗部の好きにはさせませんよ!」

そう言っつて、アンコは力強く笑つてみせた。

interlude out

厨房から食欲をそそる匂いが立ち込める午前6時。そこに立つのはご存じ日向家の主夫、我らがエミヤシロウ。動作一つ一つに無駄が無く、朝食に並ぶ品を手際よく盛りつけしながら、弁当箱にこれまた保存が利いておいしさが逃げないように工夫した品が詰まっつていく。

「おはよう……シロウ君」

「む、ヒナタか。おはよう。早く顔を洗つてこい」

眠そうな目をこすりながらヒナタが入つてくる。目は半開きで寝癖がついていて、なんとまあ霰もない姿だ。しかも彼女の声が扇情的なので、こういうハプニング経験の無い男子なら一撃だつただろう。残念ながらシロウは例外だつた。過去に何人もの同年代の女性と同居していたためか、耐性ができていた自分にホツとする。

「ふう……。あ、もう出来ちゃつてたんだ」

「後は運ぶだけだ。寝てないんだろ。今日は私がやるつ」

「ごめんね。片づけは私がやるから」

申し訳なさそうにするヒナタに微笑みかけ、料理の乗つた盆を持つ。

彼女が寝られなかつただろうと思つたのは、今日が下忍の班分けの発表だからだ。シロウとヒナタと白は無事にアカデミーを卒業、下忍に昇格したのだ。

緊張に弱いヒナタのことだから、昨晚から緊張して寝られないか

もと思っていたら、薄いくまを作っていらっしゃった。

……いや、彼女のことだ。卒業試験に落ちたナルトのこともあるだろう。試験課題がナルトの苦手な分身の術だったため、失敗したらしい。

ただ、あいつのことだから、班分けが発表される教室にいるような気がする。ちゃんと額当てをして。

余談だが、シロウは左腕に、白はちゃんと額に、それぞれ木ノ葉の額当てをしている。シロウは外套を着ていない時のような黒い服を着ている。サイズはあうように投影した。白は“原作”と同じということらしい。はて、原作とはいったい何なのだろうか？

それより、早く朝食にしてアカデミーの教室に向かうとしよう。

アカデミーの教室には、すでに多くの合格者がいた。そこに、

「お、シロー！」

やっぱりいた。額当てをちゃんと付けて。

「ナルト、落ちたんじゃなかったのか？」

「ところがどっこい、俺も今日から木ノ葉の下忍だつてばよー！」

誇らしげに額当てを見せてくる。偽物ではないな。第一ナルトは偽物をつけて喜ぶような性格をしていない。彼が里の人間に、自分のことを認めさせようと奮起していることは知っている。

「嘘だと思っなら、イルカ先生に確認してみろつてばよー！」

「よし早速職員室へ」

「ひどっ！」

いつも通りの冗談の掛け合い。まあ、ナルトと一緒に下忍になることが出来て良かったと心から思う。ヒナタも白も喜びの笑みを浮かべる。

談笑を済ませ、シカマル達のいるところに4人で行く。

教室の様子といえば……

「ねえねえサスケ君。一緒の班になれたらいいね」

「何言ってるのよ。サスケ君は私と一緒にの班になるの」

「馬鹿言わないで。サスケ君が迷惑してるでしょ！」

「……」

みんなのアイドル、うちはサスケが半分以上の女子に囲まれている。見知った顔2名も例に漏れない。見ていて痛々しいのであえて何も見ていないふりをする。あれ、絶対やられる方はたまったもんじゃない。

「ねえねえ、白とヒナタはあそこに参戦しないの？」

本日3袋目のポテチを手にとったチヨウジが何気なく尋ねる。

「わ、私は……別に、いいかな」

ちらちらとナルトの方を見ながらヒナタ言う。その視線に気がついたナルトがほんの僅かに方を赤らめた、気がする。その程度の変化。その程度のやりとり。おかげで誰も気がつかない。シロウ以外。そつえば会った当初は『サクラちゃんサクラちゃん』と五月蠅かったのに、例の事件以来そついつた動きが徐々に収まりつつあった。……作戦成功か？

「僕も興味ないです。僕にとってサスケ君はどうでもいいですし」

教室の空気が、凍り付いた。

「白ちゃん、言い過ぎだよ」

「だってあの時サスケ君、怯えて動けなかったじゃないですか。エリートとちやほやされる割にはたいしたこと無いですよ」

満面の笑みで切り裂く。女子の輪の中から吐血したような声と、数名の女子の悲鳴が聞こえてきたが……、うん、気にしたら負けだ。この状況で「？」と顔に浮かべているあたり、白は実は大物なのだろうか。

それに、白がここまで強く物事を言えるほどに成長してくれたことが、シロウにとっては嬉しかったりする。

「シロウ、何でハンカチで目元をおさえてるんだってばよ？」  
「いや……。何だろう、成長する子を見守る親の気持ち？」  
シロウ以外のここにいる面子はみなポカンとしている。そこに、  
「お、集まってるなー。今から班の発表を……。どうした、お前達？」  
粉々に砕け散った空気の教室に入ってきた犠牲者は、我らが教師  
うみのイルカだった。

落ち着きを取り戻した教室で、イルカからの説明が続いた。

「班はこつちで決めてあるからなー。今から班のメンバーと担当上  
忍の名前を読み上げる。心して聞くように！」

少しざわざわした教室で、イルカが班のメンバーを読み上げてい  
く。

「第七班。うずまきナルト、うちはサスケ、春野サクラ。担当上忍  
ははたけカカシ先生だ」

（サスケとサクラちゃんかー。どうせならシロウとかと一緒にが良か  
ったってばよー。）

（よっしゃーサスケ君と一緒に！余計なの一匹いるけどいっか。しゃ  
んなろー！）

（フン、足手まといが2人も……）

三者三様の感想が顔にばっちり書いてある。

「せんせー質問。何で俺ってばサスケなんかと一緒になんだってばよ  
？」

「あ？ 当然だろ。お前はドベ。サスケは主席。バランスとるには  
最高の組み合わせだ！」

「ちえー。どうせならシロウと一緒に良かったってばよ」

イルカの返答は尤もで、「ナルト馬鹿じゃねえの？」という視線  
があちこちから集まったが、最後のナルトの一言で視線はシロウに  
集まった。

「……いや、何故私を見る？ そしてサスケ、私は男に見つめられ  
て喜ぶ趣味は無いぞ」

「てめえ……殺す！」

「ヤンデレか、ヤンデレなのか貴様は！」

サスケがにらみつけてくるので、オーバーなりアクションを混ぜて全力で馬鹿にする。おかげで最近サスケのキャラがだんだんと弄られポジションに移りつつあったりする。専ら加害者はシロウだがあの件以来、彼は被害者二号なのだ。

「サスケ君……まさかそんな趣味があるなんて……」

「やべえよシカマル！ 俺あいつに貞操奪われるってばよ!？」

「そのこのデコにドベうるせえ！」

あーあーいつに無くサスケが喚くなあ。というわけで手頃な所にあつた辞書（何故こんな所に？）を全力で投げつける。アカデミー生が避けられるような速度で投げてはいないので、顔面に直撃、机に突っ伏した。

「……なあシロウ、そんなにサスケをいじめて楽しいか？」

「ああ。才能が有るやつは私の敵だ」

シカマルの問いに断言してやる。もう一度言う。才能が有るやつは私の敵だ。

余談だが、こういう風に子供をからかって遊んだ後、シロウは一人きりになってから、自分の精神の幼稚化に頭を抱えるのだった。精神が肉体に引っ張られてでもいるとでも言うのか……。

「……えー、次は第八班。油目シノ、犬塚キバ、日向ヒナタ。担当上忍は夕日紅先生だ」

「ヒヤッホー！ 来たぜ赤丸、俺たちの時代が！」

「アン！」

後ろでファアのついたパーカーを着ている少年がガッツポーズをする。後ろにいるグラサンをかけているのがシノか……。何というか、一番忍らしい気がするぞ。

「あ、シロウ君とも離れちゃったね」

「心配いらないだろう。今のヒナタの実力なら遅れは取らんよ」



「そうだってばよヒナタ。キバヤシノなんかに負けるはずねえってばよー!」

ヒナタが不安そうにこぼすのを、シロウとナルトがフォローする。ヒナタの実力ははつきり言ってかなり上がっている。休日にシロウが相手をしているので(させられているので)、その部分は大いに保証できる。自信も少しずつついてきた。ただ、甘さはまだ抜けない。そこは、実戦を経験していかないとどうしようも無いのかもしれないが。

「第九班、エミヤシロウ、佐々木小次郎、白。担当は……みたらしアニコ先生だ」

「あ、僕たちは一緒の班みたいですね」

「そのようだな」

誰もが見とれる笑顔で喜ぶので、ついシロウの表情も緩む。さて、さつき担当を言うときにイルカが困惑の表情を浮かべたのが気になる。それに、佐々木小次郎だと……？まさかアサシンか

いたー!後ろで目を瞑っている。寝ては……いないようだが。しかし、あれは本当にアサシンのサーヴァント佐々木小次郎の幼少時代と言ったところだろう。将来像がはつきりと想像できる。動きやすく改造してある藍色重視の袴に長髪。そして二枚目フェイス。まさか彼も？

「はあ。ナルトともシロウとも別か、めんどくせえ……」

「シカマル、希望を捨ててはいけないぞ」

「第十班。秋道チョウジ、奈良シカマル、山中いの。担当は猿飛アスマ先生だ」

「……すまない。希望的観測を口にした」

残念ながらシカマルの望みは叶わなかったようだ。幼なじみトリオはここでもくつついたようだ。

一通り班の発表が終わり、後から担当上忍が迎えに来ると言うことで、教室でいつものメンバーは弁当を開けようとしていた。

そのとき、

“バリーイイイイーン！”

教室の尤も黒板に近い窓に、黒い何かがぶつかりガラスをぶち破る。そこからクナイが黒板に突き刺さり、布がピンと貼り付けられる。そこには、

『みたらしアニコ参上！』

と、でかでかと書かれていた。

「第九班集体！ このみたらしアニコ先生が直々にお迎えに上がってやったんだ。感謝しろ！」

黒い物体は布だった。そこから女性が仁王立ちして出てきた。

…なんだろう、このやるせない気持ちは。

「シロウ……」

「頼む、何も言うな」

もうやめてくれ。みんな俺たちを見ないでくれ。こっちだって現状を受け入れられないんだ！

「ほら、エミヤシロウ、佐々木小次郎、白！ さつさと行くよ！」

そういつてアニコはずかすかと教室のドアの前に立つ。

「すまんみんな。先に逝つてくる」

「またどこかでお会いしましょう……」

弁当を持ってアニコについて行く。小次郎も観念したのか、気むずかしい顔をしながら来た。

もういやだ。誰か嘘だと言ってくれ……。

里のとある建物の屋上に、3人は連れてこられた。

「さてと、これからこの第九班で活動していくわけだけど、とりあえず自己紹介から始めましょうか」

ベンチに座る3人に向かって笑いかけてくる。

「先に自分で名乗るのが礼儀というものでは？」

文句を言ったのは小次郎だった。白とシロウは未だに現実逃避しなくて、受け入れたく無い感じた。

「私？ 私の名前はみたらしアンコ。好きな物は甘い物で、嫌いな物は辛い物。将来は……まあ私が言ってもね。こんな感じで話していつて。何で忍になろうと思ったとか、どんな忍になりたいのかとかもOKよ。じゃあ右端の白髪君から」

いきなりご指名来た。腹をくくるしか無いと言うことか。まあここで見本を見せてくれるあたり、面倒見がいいのかもしれないが。

「エミヤシロウ。好きというか趣味は料理。嫌いな物は……強いて言えば梅昆布茶。将来はわからん。目的は……どうして自分が“ここ”にいるのかを知りたいからかな」

嫌いな物で正義の味方と出てこなかったのに少し驚いた。自分の行動で救われた人がいることに気がつくことが出来たからなのかもしれない。麻婆神父は……二度と会わないだろうし割愛。

それに目的だって強ち適当な事を言った訳ではない。仮に守護者として呼ばれたのなら、こんな弱体化はあり得ないし、守護者が呼び出されるような闘争も起きていない。なら、何故自分がこの世界に存在するのか……私は知らなければならぬ。

……全員の顔がぼかんとしているが、まあいいだろう。それに小次郎も同じ顔をしていると言うことは、彼は自分の知る佐々木小次郎アサシではないだろう。

「僕は白といます。好きというか……大切な物は家族と友達。嫌いな物は家族や友達を傷つける人。将来は、僕みたいに特異な力で苦しんでいる人たちの力になりたい。後は僕を支えてくれたシロウ君や日向宗家のみんなに恩返しがしたいです」

何というか……白が天人に見えた。これだけ心の優しい少女を、肉親である父親が手にかけようとしたことに憤りを感じるも、この少女を救うことが出来た事が、何より嬉しかった。

「私が最後か。私が佐々木小次郎という。好き嫌いは特に無いな。」

趣味は剣術。まだ見ぬ強い者と手合わせすることが目的といつてい  
いだらう」

「やっぱりこいつは戦闘狂<sup>バトルマニア</sup>だった。剣術が趣味といい、完全にこい  
つはやっぱり佐々木小次郎だ。」

「へえ、難癖有りそうな面子じゃない。とりあえず今日は顔合わせ。  
明日は9時に集合。そこで本当の卒業試験をするから」

「アンコが意地の悪い笑顔で言い切る。白と小次郎は絶句している。  
最初に馬鹿にされた気がしたが、まあいい。それよりも、ちゃん  
とした試験がある気はしていた。下忍といえども、忍は他人の命を  
奪う仕事もする。それになるための試験が分身の術とは、(前の世  
界の)常識に乗っ取って考えれば怪しいと誰もが思うはずだ。」

「内容はサバイバル演習。あんた達3人对私でやるから。卒業生3  
0人中下忍と認められるのはたったの9人よ。後はアカデミーに戻  
ってちょうだいね。つまり、これは脱落率70%の超難関試験よ」  
完全に白と小次郎は固まっている。

「あら、シロウはそんなに驚いて無いみたいね」

「当然でしょう。第一、分身の術が出来て下忍になれるなんて虫が  
良すぎます。それに、30%は受かるということですよ。悪いで  
すけど落ちる気はさらさらありませんよ」

不適に笑ってみせる。そう、こんなところで躓いていられないの  
だ。

「あらー、威勢いいじゃない。そういう子は好きよ。じゃあこの紙  
に要項が書いてあるからね。あと朝食は抜いてきなさい。吐くか  
ら じゃね」

満面の笑みで言い切るな。2人が完全に引いているぞ。

あつという間に瞬身の術でアンコは帰っていて、そこには3人が  
残されていた。まるで台風が過ぎ去った後のような心境だ。

「さて、じゃあ帰ってゆつくり休むとしよう」

シロウがそういうと、ようやく2人が帰ってきた。うん。小次郎

は年相応の少年だ。間違いない。

「でもシロウ君、難関だつて」

「落ちる気なのか？ 悪いが私はやることがあるのでね。それに舐められっぱなしでは落ち着かんたる？」

「それには同意しよう。あの蛇女めに一泡吹かせてやりたい」

あれ、士気をあげようと思つたら、がっちり小次郎が乗つてきやがった。やはり戦闘狂なんだと痛感した。三つ子の魂百までというが、小次郎の性格は完全に生まれついでのも物だつたらしい。

そのやりとりを見て、不安になつたのが馬鹿らしいのか、白が笑つていた。

「そうですね。とにかくあの女に一泡吹かせてやりましょう。シロウ君に色目を使うなんて許せません」

……あれ？方向性がおかしいぞ？試験だつたよね？

シロウが不安に思っている側で、白と小次郎は打倒アンコに燃えていた。今後の事が心配になり、シロウは天を仰ぐのだった。

## 第8章 第9班（仮）集合（後書き）

電気が復旧したので投稿。この小説が少しでも多くの人の気晴らし  
となりますように。

みんなでこの危機を乗り越えましょう！

班分けですが、第9班にしました。原作で9班ってないよね……？

## 第9章 本当の下忍採用試験（前書き）

合計PV10万を突破しました。ありがとうございます！

## 第9章 本当の下忍採用試験

翌日、シロウはいつも通り厨房に立っていた。朝食を抜いてこいと言われても、それに該当するのはシロウと白だけであり、他は普段通りに食べるのだから当然だ。

「白、そっちは茹で上がったか？」

「大丈夫です。でも、本当に良かったのですか？」

と言うのも、白にうどんを茹でる指示をシロウが出したのだ。

「朝食を抜けば動けるものも動けん。それに3時間空ければ大丈夫だろう」

ただいま、早朝5時半。仕込みをするには早すぎるが、9時の演習までに食べ物を消化させるなら、3時間はある。消化のいいうどんなら、6時に食べたとして3時間のインターバル。問題ないだろうと踏んだのだ。これは小次郎にも指示済みだ。

腹が減っては何とやら。早速指示を無視する第9班だった。

「あれ、何で白ちゃんがいるの？」

そうこうしているうちに、ヒナタが厨房に入ってきた。まだ起きている時間には早い。仕込みをするにも普段は6時くらいからだ。やはり本当の昇格試験で眠れなかったのか？

「……白ちゃんも、私のお仕事を盗るんだね？」

残念ながら予想が外れた。ヒナタらしからぬどす黒いオーラを出し始めた。

説得するのに時間を食ってしまい、結局大急ぎでうどんをすすることとなった。消化に悪いことこの上ない……。

気のせいでは無いと思うが、最近ヒナタがめきめきと逞しくなっているのは何故だろう？



時間は9時。集合に指定された時刻に、演習場に2人はたどり着いた。

「おっそーいー!」

……時間ピッタリのはずなのに怒られた。小次郎はすでに待機していた。

「あんたら今日が初任務なのよ。もつと気合いを入れなさいよ!」

「ちなみに……アンコ先生は何時からいたんですか?」

「8時」

さも当然と言った顔で答えられた。間違いない。この先生は遠足の前日とかワクワクしすぎて寝られないタイプの人間だ。しかも結構理不尽。……なんか、こんな虎いなかったっけか?小次郎もうんうんと頷いている。特に間違っているわけでは無いのに、何故か理不尽な思いをする2人だった。

「じゃあ任務内容を説明するわよ」

そういつてアンコがポーチから鈴を二つ取り出す。

「任務はあたしからこの鈴を奪うこと。一人一つね。とれた人はそこで合格、とれなかった人は即不合格、アカデミーに戻ってもらうわよ。制限時間は正午まで」

そういつて手にした二つの鈴を鳴らして見せる。アンコは満面の笑み、白と小次郎は驚愕の表情。シロウは無表情。この試験の裏を考えていた。

出来立てほやほやのチームで、仲間割れを誘うこの状況。確かに上忍から鈴を奪う實力を持っているなら即採用だろうが、アカデミーを出たばかりの子供にそれを期待するか?試験といったのだから合格条件がどこかにあるはずだ。

「じゃあ始めるわよー!よい、ドン!」

いつの間にかアラムをセットしたアンコの合図でシロウは思考を一時的に閉じ、3人は一気に距離を取り、森に隠れる。

(フッフ、ちゃんとわかってるわね)

忍たるもの、気配の消し方をわかっていなければどうしようもない。ただ白と小次郎の消し方はまだまだ甘い。まあ、ここまでやれるのなら下忍成り立てなら及第点だ。ただ、

(本当に可愛げが無くていやね)

シロウは完璧だった。3人の資料は一通り目は通したが、一番わけがわからないのが彼<sup>シロウ</sup>だった。白はトータル的には優等生、上の中あたり。小次郎はぼちぼち。彼の一族が代々刀使いなのは知っていたから、これから期待といった所だ。直に見て、彼はまだ眠れる獅子なのだとわかった。育てがいあるわー、と影で興奮したのは秘密。

そして問題の奴<sup>シロウ</sup>だが、忍術以外はいい。本当にいい。実技なんてほとんど上位だ。忍術がまして座学をもっとがんばれば、主席はとれただろう。その実力のギャップが、なかなかおもしろいと思ったのだが、今日のこれでちょっとげんなりした。優秀すぎるだろ、いい部分だ。

と、後ろから殺気が漏れた。その瞬間、その方向から手裏剣のような物が飛んできた。

「よつと」

音でわかる。まだまだスピードが遅い。飛んできた得物だが、手裏剣と同じサイズくらいだが形が違う。投擲用の短剣と言ったところか。殺傷力は手裏剣より低そうだ、投げやすさ重視の形と言える。後にこの短剣がダークと呼ばれる物だと説明を受けた。

着地する直前、タイミングを見計らっていたのか、シロウが一気に近づいてきた。その両手には剣のような物を片手に3本ずつ。これがイルカや子供達の言っていた“黒鍵”という得物なのだろうか？……それにしても、これらの武装をどこに隠し持っているんだ？あの露出の多い服にそこまで物を隠しもてるとは思えない。

片手を突き出して突進してくるのを避ける。と、すかさず突き出した腕を回して、遠心力を利用して投擲してくる。

「うお！ いい投擲するねえ」

「お褒めにあずかり光荣……！」

間髪入れずに逆の手の黒鍵も投擲してくる。下忍レベルの投擲ではない。横っ飛びで避ける。これで得物は

「ちよっと、それどんな手品よ？」

彼の腕にはすでに先ほどと同じように得物が下げられていた。

「さあな。魔法と言っておこうか」

「魔法ね……ほんつとくに可愛げのない！」

また両手の得物を投擲する。得物が尽きるのを待っているのかもしれないけど、上官としてそろそろ引導を渡してやらねばなるまい。

「甘いよ！ “潜影蛇手”」

袖口から複数の蛇がシロウめがけて襲いかかる。

「ッ！」

死角からの攻撃に対応できず、シロウは蛇によって動きを封じられる。両手を締め上げ、得物を離させる。

「つつかまーえた」

「……フン、まだわからんぞ」

「強がり言って　ッ！」

シロウの後ろから強い殺気を感じ、すかさず横に飛び去る。

その瞬間、シロウの後ろから何かが投擲　いや、発射された。

得物事態は先ほどと同じ黒鍵。だがそのスピードと威力は段違いだ。刃に貫かれたシロウは煙となって消えたが、黒鍵はシロウを貫通し、その後ろの木に穴を開けながら飛んでいった。

「　影分身が使えるなんて聞いてないわよ」

さすがのアンコもかなり焦った。こんなすでに下忍のレベルじゃない。問題は、今の黒鍵を撃つたのが、本体のシロウか、他の2人が……。

「本当に、ある意味やっかいの固まりじゃない。第9班」

アンコのつぶやきを聞いている者はいなかった。

「さすがに、今のは危なかつたか？」

森の中で、シロウは投影した洋弓を消して気配を殺す。

彼女の黒鍵が異様な威力を誇っていたのは、記憶を探ったところ  
投擲方法が原因だった。だが投擲より射撃にしたが……あれほどの  
強化をかけると、腕が明日は痛みそうだなあ。威力は申し分ないし。  
力加減は慣れたな。

影分身で魔力は半減。さてどうするか。

「……シロウ君、あれはやり過ぎでは？ それに影分身も」

「影分身は極めてからちゃんとヒアシに許可をとったよ」

脇から白が近づいてきた。黒鍵を射った場所から移動していなか  
ったのだから、場所はばれているだろう。ある意味、2人に場所を  
知らせると言うことも込みで、殺気をあえて出した、というのもあ  
る。

「さすがに上忍でも、あれを避けるとはな。というより、あの威力  
で弓を引くお前もあなどれんな」

逆サイドから小次郎も到着。

「それより、忍が弓を射るってどうなの（なのだ）??」

「……一番当てられたくない疑問を真っ先に当てられてしまった。

あとで実はそれなりに多用されると聞いて勉強になった。

「気にするな。それより今後のことだが、この試験、鈴を盗るだけ  
が合格条件ではないと思うのだが」

そついうと、白は驚いていたが、小次郎は表情を変えていなかっ  
た。

「む、小次郎は気がついていたらか」

「予感がただけだ。即興と言ってもいいチームで、あえてバラバ  
ラになるようにし向けた状況。裏があると見てもいいと思ったが、  
そこからはわからん」

白は呆然と会話を聞いている。気がついていなかったのだろう。

だが、どちらかを陥れるという選択が出来なかったというところか。  
「……なんだ。小次郎君を蹴落とす必要は無いみたいですね」

「おい……」

白、恐ろしい娘。

「でだ、この試験の真意だが、チームワークを見る物だという風には考えられないか？」

脱線しかけていた話をシロウが軌道修正する。

「チームワーク、ですか？」

「そうだ。個人の利益よりもチームワークを優先できるか、ということだ。今後任務に就いた時に、自分勝手な行動をして場を混乱させるような輩を合格させるわけにはいくまい」

ここまでが、シロウの考えだった。この演習場にいる“4人”の中では一番人生経験が豊富だ。他人を救うために常に最前線と呼ばれる所に身を置いた結果、様々な見解を出来る能力を有していてもおかしくはないだろう。

「なら話が早い。3人であやつを叩きのめしてから、ゆっくりと鈴を誰が持つかを決めればいい」

……あれ？

「そうですね。昨日もアンコ先生をボコろうと一致団結しましたがんね」

……なんかベクトルがおかしな事になっているぞ？

「作戦はシロウに任せます（任せるぞ）」

もうシロウでは彼らを止めることは出来なかった。2人の血の気の多さに不安を抱えることとなったシロウだった。

正午まで残り1時間となったとき、子供達3人が動き出した。

「へえ、正面突破かい？」

刀を刀身を隠すように構えて一気に小次郎が近づいてきた。速度は……先ほどのシロウと張る。はっきり言って下忍が出せるスピードを超えている。ただ、小次郎の場合は、これが演習で正面突破だ

からであるうが。

「それじゃあこんなのはどう？」

彼に向かつて手裏剣を3枚同時に投げる。が、

「舐められたものだ……フン！」

「ッ！ やるわね」

目の前のガキ、たった一太刀で弾きやがった。得物は彼の身長の割には長い。というか、身長150センチだろこいつ！なんで3尺ちよいありそうな太刀を振り回せるの！

「ふむ、エミヤ殿が言ったとおり、これくらいの長刀のほうがしつくり来る」

「あの子の差し金ね。もういやんなってきた」

顔ではげんなりして見せるも、警戒は怠らない。

先ほどの口ぶりから、小次郎があのと刀を持ったのは少し前の事だ。なのに、全く隙がない。何なの、シロウといい小次郎といい、うちの班って実はすごいんじゃないの？

「来ないなら、こちらから行くぞ！」

小次郎がリーチを生かしながら太刀を振るってくる。なるほどじつと立っている時よりは隙がある。が、下手に懐に入られないように、3尺の幅を十分に生かして戦っている。なんか、この子すごくね？才能は一番じゃないの！？

「でも、惜しい！」

両手で一本ずつ持ったクナイで受け止め、そのまま刃を滑らせながら接近する。一気に間合いを詰め、空いている腹に蹴りを当てる。

「グハッ！ だが……」

「ばれてるよ」

小次郎はあえて太刀で応戦せず、アッコが体制を崩すように攻撃を受けたのだ。そして背後から上空に人が飛び出した気配

「水遁・水乱波」

頭上に飛んだ白が口から一気に水を放出してきた。

「ちよ、待ったそう来る訳！」

予想外の水遁による奇襲。あまりのできの良さに、ここまで来ると楽しくなってくる。カウンターを入れるために、瞬身の術で本気で逃げようとした瞬間、

“ズキン”

「ッ」

油断した。首筋にある呪印が痛み出した。そのせいで水遁・水乱波で生み出された水の勢いに負け、押し流される。

「ったくもう！」

「悪いが王手だ」

起き上がるうとしたアノコの首筋に黒い刃が突きつけられる。シロウが両手に干将・莫耶を投影し、少しでも動こう物なら切るうと突きつけているのだ。

そして逆側には太刀が地面に突き刺さっている。

「全く……。まさかこの私が噛ませ犬役とはな。まあこういった長刀がいいとわかったただけ良しとするか」

「そういつてもらえると助かる」

自分の頭上で男子の会話が飛ぶ。というか、この状況、結構ガチで動けなかつたりする。呪印のせいだ。

「あんた達は全く……。合格よ。下忍昇格おめでとう。だから刀を引いて頂戴」

そういつてようやく2人は剣を引いた。シロウの両手には何も無かつたかのように何も存在しない。小次郎は太刀を下げている。

「やっぱり、鈴を取らなくても合格出来たんですね」

「あ、白は気がつかなかったんだ。真っ先に気がついてそうな感じなんだけどね」

そうぼやくと、顔を埋めてしまった。赤くなっていたのはご愛敬か。残念ながらこの場のみんなにそれはばれている。

「真っ先に気がついたのはエミヤ殿だ。私は抜け穴がありそうだと言うところまで。詰めはすべて彼がやったことだ」

小次郎から補足が入った。やっぱりシロウ、可愛げねえなあ優秀

すぎて。

「じゃあ私から説明するわ。もう気がついていると思うけど、この試験は個人の利益よりチームワークを優先できるかを見る試験。まあ上忍から鈴を奪える実力があれば文句なしで昇格だけどね」

さらさらつと説明される。先ほどの嬉々とした感情は何えず、しようがなくめんどくさいという感情がじんわりとにじみ出ている気がする。まあ、シロウに良いようにされたのがおもしろく無いのが理由なのだろうが。

「だからあんた達は合格。今日中に手続きしておくから、明日から正式に第9班として任務ガンガン入れてあげるから覚悟しなさい！」  
今の台詞を言うアンコは、感情を切り替えたのか、喜びの溢れた顔を浮かべた。シロウたち3人もそれぞれ喜びを表している。……

ここでガッツポーズをするような元気印の人員がいなかったのはシロウとしてもアンコとしても少し残念だったりした。

「じゃあ今日は後やることもないし解散で良いかしら。私は悪いけどこれから書類仕事があるから抜けるわね」

「あ、ちよつといいか？」

「ん、何？」

白が少し残念そうな顔をしているあたり、アンコを巻き込んで宴会でもしたいと思っただろう。何気に白は普段おしとやかというか静かな印象があるが、大勢で楽しめるようなイベントはかなり好きだったりする。あつたばかりの頃は他人が苦手だったりしたのに……。その反動か？みんなで盛り上がる光景を見ている白は、幸福を体全体で、存在すべてで受け止めている感じがある。みんなでわいわい仲良く騒ぐことの出来る幸せを知っているのだ。

#### 閑話休題

「白が水遁を使ったとき、先生ほどの実力なら逃げ切れただろうにまともに食らったでしょう。……首筋に何かあるのか？」

あれは演技では無いことぐらい、シロウは気がついてた。しっ



かりと見ていたのだ、最後の詰めをする役目なのだから。

アンコの表情が一瞬引きつる。硬くなったといっても良いかもしれない。

「何のことかしら？」

「隠す必要もあるまい。最後の詰めだつて本当は影で待機していた影分身も使う予定だったんだ。先生ほどの実力者が力を使えないとなると、なかなか不味いだろう。……それは呪いの類か？」

外野2名はポカンとしているが、シロウはあえて問い詰めた。彼女の実力は影分身のフィードバックから知ることが出来た。その彼女が、たかが自分たち3人の連携でしてやられるなんてまず無い。あえてやられたようにも見えなかった。となるなら、何かしら理由があるはずだ。サーヴァントが令呪で縛られるように。

「……そう。私は師事した人に呪印をつけられた。今は3代目のおかげで封印できているけど、そのせいで力はほとんど使えないし、生殺しよ全く」

観念したのか、アンコは自嘲気味にこぼした。その顔は苦悶の表情に満ちていた。端から見ても悔しさが感じられる。

「しかもこいつ、たぶんこれをつけた奴を殺さないと消えないのよ」

「……もしかしたら、消せるかもしれない」

悔しさで満ちたアンコの顔が、シロウの一言で驚愕の物に変わる。

「……ちよつと聞いてなかったの？これは」

「その呪いやら契約やらを無条件で初期化出来る代物に心当たりがある」

自分で言ってみて、なんと都合の良い話だと思う。だけどあるのだからしょうがない。ここはあの魔女キャスターに感謝しよう。

「……本当に出来そう？」

「可能性はあるが、術によるモノなら何とかかなると思う。ただ、かなりの魔力チャクラが必要だから、それが何とか出来ればだが」

「それなら私のチャクラを使えばいいわ」

アンコの表情に期待の色が伺える。これで失敗したら……うん、

考えるのはよそう。きつと血祭りに上げられたり隠し持っている蛇のえさになったり、なんて事にはならないはずだ。

「じゃあ白と小次郎は解散。シロウは付き合ってもらう形で良いかしら？」

小次郎は別にかまわないと言い、白は少し渋っていたが、自分の担当と言うこともあり了承した。ここで色目がどうこうと言い出さなくて良かった。

所変わってアンコの自室。

「……殺風景で悪かったわね」

「いや、私の部屋よりましだ」

おもしろみは無いが、年相応の女性の部屋だ。かつての自分の個室は本当に必要最小限なモノしか無かったなあとか思ったり。……：……：……：そういえば慎二が何か良からぬモノを持ち込んでいた事も、今となつては懐かしい。

ちなみに、室内にいるのはシロウからの要望だったりする。これから投影するのは、こちらの世界には無いであろう宝具なのだ。はつきり言つてこれ以上必要の無い警戒をしかれるのはごめん被りた

い。

「じゃあシロウ、その方法つてのを教えて」

「そうせかささないください」

アンコに急かされる。シロウの出で立ちから、自信がうかがえるのだろう。時間とともに期待感が募っているのは気のせいではあるまい。

あまりじらすと失敗したときが怖いので、黒鍵を投影しながら説明に入る。

「これが私の能力だ。何か物を魔力チャクラのみで作り出す能力だ。一応“投影”と呼んでいるが、剣の投影がメインで、他のモノは剣の倍の

魔力を使えば投影できる。で、これから行つのは、術による契約やら呪いやらを初期化する能力を持っている剣を投影する、ということですよ」

ざっと一息で説明する。さすがに事の真相に至ったアンコは、複雑そうな表情を浮かべている。『暗部が目をつける訳だ……』とつぶやいているあたり、なかなか危なっかしい事をしようとしているのだと改めて実感する。

「説明は以上だ。私の魔力では量が足りないから、それを何とかしたいという訳なのだが」

「なるほどね。じゃあ細かい所は任せるわ。私の手の上に手を添えてくれれば、私のチャクラを使えるわ」

よし、早速取りかかるとしよう。

他人の魔力を使って魔術を行使することは可能だ。現に衛宮士郎は凜の魔力を使って固有結界を発動させやがったし。だが、魔力の代わりにチャクラを使う、ということが可能かどうかはわからない。だが、自分の魔力だけではとてもじゃないは足りないのは事実だ。

「じゃあやるぞ」

手を乗せると、確かに自分以外のチャクラが手に集まっているのを感じる。

意識を集中させる。

「投影開始」

いつもの呪文を唱える。が、

「ふむ、これではな。出来れば手を首筋に当ててくれないか？」

「え、こう？」

「そうだ。それで私にチャクラを送りつけるイメージで頼む」

魔術回路にチャクラを通さなければならぬのだ。本来ならラインを結べば良いのだが、そんな器用なことはシロウには出来るはずが無く、仮に出来たとしてもやることは無いだろう。ならば、魔術回路がある脊椎に近いところでチャクラを放出してもらった方がいい。

「ふむ、これなら……。だが量が足りない。もっとチャクラをたつきつけてくれ」

「ええい、もう頼むわよほんとに！」

我ながら情けないが、こうなったら頼むしかない。と思つたら、一気に大量のチャクラを叩き込まれた。荒療治で効率が悪いが、これなら……。

後ろから荒い声が聞こえてくる。さすがに成功できなかったら不味いが、これなら何とかなる。

トレース・オン  
「投影開始」

再び呪文を唱える。27の魔術回路に魔力とチャクラを流し込む。イメージするのは、裏切りの魔女の代名詞。魔術による産物をすべて消去する、裏切りの魔剣

トレース・オフ  
「行程終了」

シロウの右手には、禍々しいオーラを纏った短剣が一本投影されていた。解析するまでもない。投影は問題なく成功した。これを作ったシロウでなくても見てわかる、完璧な宝具の投影だ。

「なんて言うか……ハンパ無いねこれ」

短剣を見たアンコもさすがに引いている。うん、これが正しいリアクションだ。

「で、これをどうするの？」

「突き刺す」

単刀直入に言い放つ。アンコがストレートすぎる物言いに硬直している隙に、彼女の左肩の呪印に狙いを定める。

「破戒すべき全ての符」ルルブレイカー！

真名解放とともに一気に突き刺す。その直後に呪印は消え去り、  
「ッ~~~~~」

アンコの声にならない叫びが響き渡った。というか、シロウは人間がこんな声を出せることに心底驚いていた。そういえばこの短剣、殺傷力は短剣並にあるのだったっけ。

「いきなり何するのよー！」

「これで消えたはずだが？」

「え、嘘!？」

急いで鏡で確認する。そこにはほんの僅かな切り傷がある程度で、そこにあるはずの呪印は消え去っていた。

「ホントに、本当に消えてる……。」  
いよっしやあああああ  
あああ!！」

何というか、あれは見なかったことにしようと思心に決めた。それなりの年の女性が雄叫びを上げるなんて……どこかの虎とかぶるなあ。

まあ、これで彼女を縛るモノが消えたのだ。それには良しとしよ  
うとシロウは思った。

「あ、シロウ、呪印についてはあとで火影様に伝えに行くから、ち  
ゃんと同行しなさいね!」

残念ながら、良しと思ったのは杞憂だったらしい。一難去ってま  
た一難、といった心境だったとか。

## 第9章 本当の下忍採用試験（後書き）

呪印のときのチャクラの受け渡しについては突っ込まないで下さい。編集していたら公開になったので、ストック解放しますわもう。気晴らしになってくれれば幸いです。

## 第10章 白羽の矢 〱波の国入り

下忍になってから暫く経った。シロウたち第9班も、下忍が受けられる任務を次々とこなしていた。

「それじゃ今日の任務はこれでおしまい。明日から3日間が私仕事あるから」

こなしていた……

「それと、来週はまるまる無理ね。適当に訓練してて」

こなして……

「後の事は追って連絡入れるから。じゃね」

……

残念ながら、第9班は担当のみたらしアンコの業務やら何やらに振り回され、他の班と比べてもこなす任務の数が少なかった。ただアンコがしっかりと任務内容を吟味しているのも、他の班に比べて回数が少なくせに、収入は変わらなかつたりする。そのため金銭には困っていない。収入が入ってから、シロウと白は適当なアパートでも考えたら、ハナビに全力で止められてしまい、現在は生活費を入れながら生活している。

余談だがそのときに、

『ハナビ、シロウさんのこと、お兄ちゃんって呼んで良いですか？』  
事件が勃発した。

別にシロウがこの発言で萌えて悶え苦しんだ訳ではない。

“シロウお兄ちゃん”

ハナビの一言で、シロウの中の悪しき記憶の一つがフラッシュバックしたのだ。

義父（切嗣）の実子で自分の姉、それでいて自分のことを兄と呼んでくれた少女、イリヤスフィール      ホムンクルスが故の短

命故に、死に近づいていく彼女に対して、何もすることが出来なかった時の記憶が、彼女の握った手の体温が失われていく様子が、その瞼が永遠に閉じられる瞬間が、一気に脳裏によみがえったのだ。

「シロウ、どうした！」

ヒアシに大声で呼ばれて、ようやく我に返ったとき、シロウは普段の彼からは考えられないような姿だった。顔面は文字通り蒼白で、体中に脂汗を流し、瞳と体がかすかに震えていた。

それ以来、日向家ではシロウを“兄”と呼ぶことは禁忌の<sup>タブー</sup>一つとなった。この一件でシロウと白がアパートを真剣に考え出したのだ。そのときにハナビが泣いて離さなかったのが事の真相だったりする。

「……また暇になっちゃいましたね」

「仕方ないさ。おかげで鍛錬に時間を割くことができるのは事実だしな」

というわけで、この日も3人は各々の鍛錬に勤しむのだった。普段なら、シロウは影分身による打ち合い、白は水遁の練習、小次郎は実家の道場で剣術。現状では白くらいしか耐らしい鍛錬をしていないが、このアンの傍若無人さで、3人の実力はめきめきと上がっていたりする。任務回数は最低なのに、実力は今期1と言っても差し支えないような状況にいるのは、本人達は知らない。今期の担当上忍の中で密かに言われているのである。

と、

「嘘でしょー……こんなあり得ないって」

ぼやきながらアノコが瞬身の術で現れた。

「先生、どうかしたんですか？」

「任務が入ったのよ。第7班の受けたCランクの護衛任務が、実はBランク級でしたってことらしい。それで白羽の矢が当たったの。」

実際には私が、なんだけど、あんた達も連れて行くからね」

ものすごくいやそうな顔をしながら説明をする。第7班ということとは、確かナルトのいる班のはずだ。



余談だが、呪印が消えてから、本格的な術を行使できるようになったアンコは、こういった危険任務に赴いている事もあった。というか、彼女の実力は本物で、呪印のせいで特別上忍だったらしい。おかげで正式に上忍へ昇格するのも時間の問題とか（本人談）。呪印に関しては、実際に能力を火影に見せた。暗部を取っ払った上で「いやだなあ……私力カシ苦手だからなあ……」

ぼやきの理由はとつても自己中心的なものでした。

「カカシとな……。確か、“コピー忍者カカシ”の異名を持つ猛者のはず。何故に苦手とする？」

シロウや白と違い、生まれも育ちも木ノ葉である小次郎が質問した。シロウは自分の友人の担当が名の通っている人間だと知って驚いた。そしてそんな情報を知っている小次郎にも驚いた。

「……エミヤ殿、今何か失礼な事を考えなかつたか？」

「気のせいだ」

知らん顔で通す。というか、小次郎の気配察知能力の高さは、人の心理まで見透かすというのか……？

「いや、ただ単に馬が合わないだけ。んで、カカシの忍犬が援軍の要請を伝えてくれたのがさっきらしいのよ。だから、私たちは明朝7時に里の門に集合。忍具ちゃんと持つてきなさいよ」

そういつて、プリントをそれぞれに渡してきた。いつの間に着意したのか聞いてみたかったが、その前にアンコはいなくなっていた。見ればこのプリントはアンコでなく、すでに用意されていたモノらしい。今更ながらこの世界での印刷技術に興味を持ったシロウだったが、それが解明されることは無かつたとか。

「なら私は行くでしょう。新調した太刀を研いでおかなければ」

「僕も千本と兵糧丸を調達してきます」

各々が散る。小次郎は例の一件以来、長刀レベルの太刀にご執心で、先日新しい長刀を買ったらしい。任務が任務だったので活躍の出番は今まで無かつたが、実家では振っていたそうだ。あの時シロウが投影したときのモノより良い得物らしい。

白は白で、千本を愛用している。千本は針治療に使ったり出来る代物で、忍具としては殺傷力は最低ランクのほうだが、本人曰く、『氷遁忍術と相性がいい』らしい。それに彼女の氷遁は水を使うので、水辺でない場合彼女は水遁で水を生み出さなければならぬ。そのため戦闘中のチャクラ補給があると便利なため、兵糧丸に最近こだわり出した。

ただ白曰く、興味本位でシロウが作ったそれが、一番味が良く、下忍が手の届く市販のモノよりも効果が高いらしかった。今度チヨウジに頼んで、秋道一族秘伝の兵糧丸を試食してみたいと、シロウも兵糧丸作りに少し興味がわいてきていたりする。

2人に対して、シロウがすることと言えば……特に何も無い。

クナイや手裏剣はわざわざ買わなくても投影で日々少しずつ（鍛錬に支障が出ない程度に）ストックを作っているし、いざと言うときは黒鍵やダークといった、手になじんでいるモノの方がいい。巻物は今のところ使ったことが無いが、一応腰にホルスターをつけて入れられるようにしてはいる。

さて……やることはないな。

「……買い出しに行くか」

しょうがないのでスーパーへ足を伸ばすシロウだった。そういえば今日はタイムセールが4時からあったか、などと思いつながら。

翌朝、

「お、今日はちゃんと早く来ているじゃない。感心感心」

時計の針は6時半を回ったところ。だいたいアッコが指定した時間の30分前に行けば文句は言われない。まだ長いつきあいといえるほど時間は経っていないが、彼女の性格を掴むのには一週間あれば事足りるとは第9班員の心の声。

「ちゃんとプリントには目を通したでしょうね？ 目的地は波の国

よ

波の国

木ノ葉隠れの里のある火の国の隣国。

「先生、波の国には隠れ里はあるのですか？」

「ん、無いはずよ。基本的に隠れ里があるのは5大国だけだから。でも報告だと、霧の抜け忍がうるついでるらしいから、気を引き締めなさい」

白の質問に、先生らしくアンコが答える。そう、これはBランク級の任務。本当は下忍である3人はやるのが出来ないモノだ。忍同士の戦闘があり得る、危険度が高い任務なのだ。

アンコの発言に小次郎は気を引き締める。だが、白は“霧の抜け忍”という言葉に反応していた。

彼女の生い立ちを知っているのはシロウだけだ。小次郎とアンコは白がただ気を引き締めたかのように思えたかもしれないが、シロウはそれだけでは無いと悟った。

敵は、仮にも元々自分がいた国の忍なのだ。抜け忍とは言っても自分を追いかけて来たというような気がするのかもしれない。自分とは無関係では無いかもしいないと、杞憂を感じているのだろう。

ただ、霧隠れの里のある水の国は島国だ。抜けるのなら、自分たちのように密航するか、正々堂々抜けるか……まあ抜け方はこの際どうでも良いとして。問題は彼らの実力だ。もし抜けたばかりのペーペーなら大丈夫かもしれないが、そうでない場合はそれなりの実力者と考えても良いだろう。忍の世界は甘くない。下手に抜けようとすれば始末されるのが落ちだ。そう、問題はここだ。敵は始末される前の忍か、それとも追っ手をかいくぐってきた実力者か……。多少例外があるかもしれないが、最悪の状況を考えると、先ほどの後者か。

「まあ、あんた達は第7班の任務である護衛に回って、敵との戦闘は私とカカシでやると思うから。後は、せいぜい後衛にシロウがいれば何とかなるかな」

「買いかぶるのはやめてくれ」

「いや、あの弓捌きは、はっきり言ってかなりの物だろう。後衛なら完璧だ」

「……」

小次郎は弓の心得もあるようだ。はっきり言おう。小次郎、お前は侍に転職するべきだ！

和やかな空気で第9班は目的地へと向かうのだった。敵とも遭遇せずに。

「で、あんたは何してんのよ？」

「いやあ……写輪眼使っちゃったからね、チャクラがないの」

第9班は移動スピードが速かったのか、第7班がいる民家に一日遅れでたどり着くことが出来た。というかアンコがぶっ飛ばすから3人はヒーコラ言いながらついてきたのだが。こらえ性のないアンコの性格のせいで、だ。ちなみにこの日の夜アンコは3人からO・H A・N A・S H Iがあつたとか。

ちなみに空気は何気に重かったりする。アンコとカカシが険悪なのだ。というか、アンコが一方的に険悪になり、カカシがスルーしている感じだ。……なんだろう、最近アンコが虎にしか見えない。まあ虎の方がたちが悪かった気がするが。

「で、あんたのその写輪眼を使わせるような輩ってどなたよ？」

「ん、気になる？」

カカシの顔ははっきり言って右目周辺しか露わになっていないが、隠れている口元とかはピッタリ布に覆われているので、表情は読み取りやすい。今、彼はすんごくニヤニヤしてもったいつけている。

“すごく”ではなく“すんごく”なのだ。ここ重要。

「……もったいつけないで教えなさいよ！」

「えー……。桃地再不斬」

「　　！　　ちょっと嘘でしょ！」

アンコがもつたいつけられたことに苛ついていたが、相手の名を聞いたとたんに逆上する。

「ふざけないでよ、そんなのAランクに持ってける相手よ」

「でも事実だから」

完全にアンコは動揺している。相手をする力カシも、口調はそんなざいだが表情は真剣そのものだ。

「そんで、あいつ3人のガキを連れてる。4人フォーマンセル一組で動いてると見て良いと思う」

そういつて事の経緯を説明された。

桃地再不斬一人に襲撃された第7班は、再不斬相手に良い勝負をするも、途中で暗部のような格好をした小柄な3人が邪魔をして、逃がしてしまった。再不斬の負傷は目安で全治一ヶ月ほど。常人で計ればの話だが、奴のことだから一週間かそこらでまた襲撃してくる可能性がある、力カシは見ていた。

「で、うちのガキどもには木登りの業をやらせてる。アンコの所のもやらせたらどう？」

「そうね……。備えていても良いかもしれないわね」

3人をほつといてトントンと話を進められる。シロウはちゃんとついていけているが、他の2人は両耳から蒸気を発している。話の折り返しあたりからオーバーヒートし始めて、今ではもう完全に出来上がっている。

「わかったわ。修行は私が見てるから、あんたは早く体動くようにしなさい」

「……あんまり虐めてやるなよ」

「　　ツチ！」

虐める（いぢめる）気だったんだ。いぢめるではないいぢめるだ。ここも重要。アンコを理解する上で。

彼女の性格をいやと言うほど知ることになった3人は、これから起きそうな事にため息を付くのだった。それを見た力カシはさらに

心配になったとか。

で、森の中で、うずまきナルトとつちはサスケが必死の形相で木を登ろうとしていた。腕を使わないで。春野サクラは木の枝で両足の裏だけでぶら下がっている。あれ、どうやってるの？

「お、やってるわね」

アッコは感心してその光景を見ている。つまり、あの2人がやっているような木登りというか、垂直走行をするのが今回の修行と云うことか。

「さ、説明するわよ。あれはチャクラコントロールを鍛えるための鍛錬で、“木登りの業”って言うの。足の裏にチャクラを集中させて、木にくっつくの。チャクラ吸着っていうんだけど、足裏のチャクラが少なすぎればくっつかないし、多すぎれば弾かれる。コントロールは体で覚えなさい」

すごくドSな笑みを浮かべながら説明してくる。

「お、シロウに白じゃん！ 久しぶりだってばよ！」

ナルトがこっちに気がついて駆け寄ってくる。体中には傷が付いている。相当繰り返し返してやっているのだろう。

「やほ。あれ、そっちが小次郎君？」

「そうだ。佐々木小次郎という。よろしく頼む」

シロウはサクラとは少し面識があったし、白はいの関係でそれなりの仲だったりする。で、問題のうちにはサスケ君は  
仏頂面  
でいたりする。

「じゃあ後はがんばりなさい。私はあの木偶と話してるから」

そういつてアッコはそそくさと戻ってしまった。というか、カカシを木偶扱い出来るのはあなただけです、アッコ先生。

「さて、じゃあ私たちもやるとするか」

「うむ、エミヤ殿には負けたくないからな」

「フフ、実はこれ、僕はすでに習得済みだったりするんですよ」

「！！！！」

まさかのびつくり発言。だが納得出来るところはある。白のよく使う水遁・水乱波の術だが、アノコ曰く下忍レベルの水量ではないそうだ。かといって彼女はチャクラがとても多いというわけではない。ということとは、チャクラ効率がとても良いということだ、と今更ながらシロウは思った。

「なら、私と小次郎の勝負だな」

「フン、遠慮はいらんぞ」

そういつて2人は臨戦態勢になる。なんだかんだ言っつて仲が良いのだ。

「「よい、ドン！」

「!!」

助走をつけて、足裏に魔力を集中させる。強化の要領で集中させれば良いのだ。が、1メートルほど登った所で、2人仲良く盛大に弾かれた。

「……2人とも気負いすぎです」

「さすがに俺でもここまで弾かれなかったっつてばよ……」

白とナルトがようやくコメントする。2人は思い切り弾かれて後ろの木に後頭部をぶつけ、身悶えている。

「フ、フフフ……そうか、一筋縄ではいかないと言っことか」

「おもしろい。たまにはこういった行いも興の一つということか」  
弾かれた2人から不吉な笑い声が聞こえてくる。他の4人はその声にびびって半歩退いている。

「「貴様より絶対先に登つてやろう!!」

同じ事を盛大に宣言して、再び木に向かって全力疾走する。その光景はまさに竜と虎の一騎打ちのごとき気迫だったとか。木登りの業なのに。

## 第10章 白羽の矢 く波の国入り（後書き）

ようやく波の国入りしました。さあてここからが大変だ……。  
なんか、気がついたらランキングで良い位置にいるという。ホント、  
恐縮です！



## 第11章 才能（小次郎）と努力（シロウ）

第9班が合流してから、子供達というか、野郎4人は必死になって木登りの業に挑戦している。順位としてはサスケ、小次郎、シロウ、ナルトだ。ただ僅差になっている。小次郎とシロウは『こいつらドMじゃないの!』とサクラに叫ばせるほどの努力をさも当然のようにしているし、それに触発されてナルトは持ち前のスタミナを生かして必死になって付いていつている。サスケは実はこの面子の中では一番スタミナが無く、他の3人のようなスパルタ並の時間、鍛錬を続けることが出来なかった。才能が一番あったがために伸び率が一番良かったがための結果なのだ。

おかげで護衛は基本、白とサクラとローテーションでもう1人がつき、鍛錬組は夕食の頃に戻ってくるのだが、それこそぼろぞうきんという形容がピッタリの出で立ちで帰ってくる。カカシはともかく、アニコでさえ自分の班員2人の精進ぶりには引いていた。しかもこいつら早朝に打ち合いという名の殺し合いやっているのだからびっくりだ。これはまだアニコしか知らないが。

「じゃあ行つてくるから、サクラちゃんに白、護衛任せるつてばよ」  
「あんたに言われなくてもわかってるわよ。さっさとその2人を抜かしてきなさい!」

発足当時は一番ぎすぎすしていた第7班も、今は和やかな空気を醸し出していた。尤もサスケとサクラがナルトの事を舐めきっていたからなのだが。最近のナルトのがんばりは目を見張るモノがある。それ故なのだろう。

「簡単に言うけどよう、はっきり言ってサスケよりこいつら2人の方が強いつてばよ絶対」

「そんなわけ無いでしょ! サスケ君は主席でエリートなのよ! あんたみたいなドベと違うの!」

どうやら、サクラのサスケ至上主義は変わっていないらしい。ま

あ、距離を置いて見ればなかなか面白い時もある。気分が良いとき限定で。期限が悪いときはむしろイラツと来るあたり、人間の心理は面白いものだ。

その日は第7班が修行、第9班が護衛ということになった。だが、「すまないけどもう手伝えねえよ。後は一人でやってくれ」

橋の建設作業をする人々は日に日に減っていつていつてらしい。この任務の裏側にいるガトーという人間が絡んでいるらしい。今この建設されている橋が、ガトーに取っては商売の邪魔で、妨害をしているとか何とか。

「……すまんの。今日はここまでで良いわい。超すまんことをしたのう」

「気にしないでください。それにあなたはこの橋をなんとしても完成させたいのでしょうか？」

シロウはこの橋職人、タズナの情熱は本物だと高く買っていた。彼はこの橋を完成させることで、ここの住人に希望を与えられると信じているのだ。そして、シロウも橋が完成すればきっとそうなると思っている。

「私で良ければいつでも力を貸しましょう」

「……どうして、超部外者のあんたがそんなこと言えるんじゃ？」

と、聞かれてしまった。確かに、自分はいくまで火の国の木ノ葉の里の忍であって、波の国とは何の関係もない人間かもしれない。だが、これだけは言える。

「きっとこの橋が完成すれば、ここの人たちに笑顔が戻ってくると確信しているからですよ」

そういって、作りかけの手すりをなでながらつぶやく。もしかしたら、自分も人殺し以外の方法で他人を救うことも出来たのでは、と、ふと思ってしまった。……悲しいかな。人殺しでしか人を救えない自分だからこそ、願ってしまうのかもしれない。何かを切り捨てるのではなく、生み出すことによって人を救う奇跡を見たい

のかもしれない。

「だから護衛は止めん。もし手がいるなら手伝いだつてする」

「……そうか」

タズナは何も言わなかった。普段なら空気を読まずに、いや、ぶちこわして何かを言っているのに。シロウの背中を見たたん、何も言うことができなくなつてしまった。

「じゃが、今日はここまでじゃ。明日からは僕一人だけかもしれないが、護衛の方は超頼んだぞ」

「心得た」

護衛に來た第9班全員で苦笑する。

「エミヤ殿、時間もあるし、戻つたらすぐ相手をしてくれんか？」

「む、かまいはしないが……。いいのか？ 他人に見られたくないと希望したのは小次郎だつたらう？」

「構わない。今日は一日暇だつたからな。木登りではとてもじゃないが物足りん」

「了解した」

いつになくやる気な小次郎に苦笑する。だが、同じ班の仲間が強くなることは良いことだ。ということでは承してしまった。

今の小次郎の実力は、下忍としては上々だつたりするのだが、普段の鬼畜の如き鍛錬の成果が徐々に出てきたシロウには及ばなかった。全体で見れば。劍の腕に関しては、小次郎の才能のせいかメキメキと頭角を現して、シロウも下手にいじってはいない。そのため二人がするのは真剣による打ち合いなのだ。経験値を差を埋めるには、これが一番手っ取り早いとの思惑だ。

結果、エミヤシロウという存在の異常さの一部をさらしてしまうのだつた。

本日は修行日の第7班は、無事にナルトが木の枝にチャクラ吸着でぶら下がるようになることで終了した。ナルトはチャクラの使いすぎで体が動かせなくなり、今は同じくらいぼろぼろのサスケに肩を借りて歩いている。

……かつての第7班では考えられない光景だ。サスケもサクラも、段々とナルトを落ちこぼれとは見ずに、一人の仲間として見始めていた。良い傾向だと担当上忍はたけカカシは内心穏やかだったりする。顔合わせから鈴取り合戦まで、実際この班の不安要素は多すぎた。だが、こうして徐々にだが、確実に、良い方向へと進んでいるのだ。

「よし、さつさと戻って飯食って寝るぞー」

「先生、そんな気の抜けた感じじゃ盛り上がりませんよー」

サクラにぼやかれるが気にしない。こいつらが素直に育っていつてくれるのを、カカシは純粹に望んでいた。

で、戻ってみると、そこには予想外の光景が広がっていた。

太刀と双剣、金属同士がぶつかりあう特有の音と火花が、夕暮れをバツクに繰り広げられていた。

太刀を操るのは小次郎、双剣を操るのはシロウ。これは修行なんて生やさしいモノではない。2人から遠慮無く放たれる殺気がぶつかり合い、そこだけが別の空間のような錯覚を与えるのだ。

その太刀の舞は、縦横無尽に飛び回り、型が全くないように見える。天賦の才というものか。彼の太刀筋は見事と言うほか無い。第三者の視点から見れば、誰もが見とれる美しさを誇っている。しかもそれがこの限界ぎりぎりの殺し合いだからこそ、その美しさがさらに色濃く存在している。

一方シロウの剣線は……はつきり言って恐ろしい。小次郎のそれとは正反対の、それこそ対極の位置にあるモノだった。

「ほう……。お前達、あいつらの攻防を見てどう思う？」

「……俺にはどっちもすげえってことしかわからねえってばよ」

「……」

どうやらサスケとサクラも、ナルトと同じらしい。質問した力カシも、これの真相がわかっていたらそれこそ中忍に推薦しても良いかもしれないと思ったりしたのは秘密。

「まず、小次郎の方ははつきり言っただけで才能溢れる剣だ。決まった型が無いからどこから飛んでくるかわからない。しかもあの身長での長さの得物を扱えるんだ。彼の剣の筋は本物だよ」

3人とも感心したように小次郎の方を見る。だが力カシにとつては、小次郎よりもシロウの方が重要なのだ。

「つてことは、シロウの奴は小次郎並に才能があるって事か……」

「いんや、シロウのほうね。彼、才能のかけらもないよ」

サスケの発言とは逆の事を断言する。力カシの一言で全員が目を丸くして自分を見てくる。

「だつて、小次郎君の剣の才能は本物だつて、たつた今先生言っただけじゃない」

「ああ。だから異常なんだよ。あれはそれなりに実力がある奴なら、誰が見ても才能0だつて断言するから」

そこまで言っただけで、3人の視線はシロウに向く。現状はシロウの方が優勢だ。小次郎の剣線を双剣で受け、流し、素早く攻め込む。

「おそらくずっと努力してきたんだ。自分の才能の無さに決してめげずに、ひたすら愚直に……。実戦で磨き上げられた強さだよ。あれは」

そう、だからこそ異常なのだ。彼の強さは。あれは下忍になり立ての少年がもてるような強さではない。今は小次郎の方にあわせているのか、まだ余裕があるのか……いや、ぎりぎりのような気もする。だが、もし彼が自分と同じくらいの実力者になったら、まず勝てる気はしない。忍界大戦を経験している自分よりも、遙かに経験値がありそうだ。それ故に、恐ろしいのだ。

ふと子供達を見ると、三者三様の表情をしている。ナルトはシロウへの尊敬の念を、サクラは信じられないと言った顔を、サスケは

シロウと小次郎に対して対抗意識を燃やしているようだ。

「サスケ、一応釘を刺しておくけど、今のお前じゃ勝てないからね」  
「……ッチ」

お、自覚があるようで驚いた。

そうこうしているうちに、小次郎のスタミナ切れで目の前の殺し合いは終了した。お互いに衣服に若干切ったような後があるくらいで、どちらも切り傷は無い。第9班は本当に最強かもしれないと内思ってしまった。アンコ、お前大変な奴らを抱え込んで……。

第11章 才能（小次郎）と努力（シロウ）（後書き）

短くてすいません。2人の修行というか、この殺し合いを書きたか  
つたがための調整です。

桃ちゃんは次話です。待ってた人スンマセン（汗

## 第12章 橋上の戦闘

シロウと小次郎の殺し合いもとい鍛錬の後、外にいた全員はお世話になってるタズナの家にはひっこんだ。元々第7班が来て狭かったのに、第9班が来てからさらに手狭になった。そこは主婦もとい主夫とその同居人、ついでに侍もどきがタズナの娘であるツナミのこなす家事全般を手伝ったりしている。まあ、料理はシロウ、洗濯が白、薪割り他雑用を小次郎がこなしたのだが。実は第9班、担当以外は家事スキルが高かったりする。シロウと白はさることながら、小次郎が家事をこなせることに皆大いに驚いた。特に担当上忍は「裏切られた……」といって部屋の隅に小さくなったとか。シロウも気になって本人に確認したところ、

「自分の世話も出来んようでは忍など務まるまい」

と言つてのけて、他のメンバーの心を真つ二つに両断したとか。こちらの世界では“男子厨房に入らず”といった余裕が無いと言うことだ。

で、タズナ宅でこれまた一悶着起きそうな空気になっていたりする。

「……なんで、そんなにあの橋を守ろうとするんだよ？」

「イナリ？」

ぼろぼろになってまで強くなるうとする面子に、タズナの孫であるイナリが食って掛かったのだ。

「何でって、あの橋が出来ればこの村だって元気になるって

」

「無理だよ。ガトーがいる限りそんなことにはならない」

「ッ！ おいガキ、表にでろつてばよ！」

イナリの諦めきつた発言が、ナルトの逆鱗に触れたようだ。だがイナリはそんなことお構いなしとばかりにナルトを無視し、2階に



ある自室に引きこもってしまった。

「……ごめんなさい」

「ツナミさんが謝ることじゃありませんよ。それより、何であんなに投げやりなんだろう」

「あいつがああ的事件から超立ち直っていないからじゃ」

ツナミとサクラの会話を遮ったのはタズナだった。その一言でツナミはこれから話されるだろうことを止めようとしているが、そんなことお構いなく、タズナの話が始まった。

「あいつはガキの頃から超いじめられていたのう……。ずっと独りぼっちだったんじゃ。それを救った男がいた。      カイザとい

う若者じゃ」

海でおぼれたイナリを助けたことがきっかけで、カイザはイナリに懐かれ、彼の義父となった。彼は仲間やイナリの為に危険を顧みずに行動する姿から「英雄」と呼ばれたが、波の国を牛耳りに来たガトーに目を付けられ処刑された。

そのときのショックで、イナリは正義や英雄といったモノに冷めてしまい、今のような投げやりな性格になってしまったのだ。

……タズナの話で、独りぼっちという言葉にナルトが、英雄という単語にシロウが反応したのは語るまでもない。

「気にくわねえ。あいつのねじ曲がった根性、たたき直してやる」

そういつて立ち上がったナルトを止められる者はいなかった。

「聞いてもいいか？」

次に口を開けたのはシロウだった。

「そのカイザという男、……最後は笑っていたのか？」

「ああ。最後までな」

答えを得たシロウは、そうかと呟いてそのまま俯いた。……他人を救いたいと願うのは、こんなにも罪なことなのだろうか？

結局悶々としたまま次の日を迎えた。この日は桃地再不斬が現れる可能性のある期間の始まりで、護衛はナルト、サスケ、白、シロ

ウ、カカシとなった。残りの小次郎、サクラ、アンコは、小次郎は木登りの業を続けつつ、村の警護に当たることとなった。ここ数日ガトーの動きが大人しすぎるとい理由で、村のほうも念のため警戒しようというカカシの判断だ。……アンコが実質お留守番だと駄々をこねたのは言わずもながら。

だが、

「ナルトのやつ……遅すぎる」

「大方、イナリが気になるのだろう」

と言うわけで、出発時間に遅れたナルトを置いて、護衛組はタズナとともに先に家を出たのだった。

霧が出ているこの日、建設中の橋で一行が目にしたのは、惨劇だった。

タズナに賛同して再び手を貸してくれた、彼より先に現場入りしていた人間が、全員切傷を負っていた。深さは人それぞれだが、致命傷を受けてはいないようだった。

「おい、大丈夫か!？」

タズナが急いで近くに倒れていた1人に駆け寄る。

「うう……あの、化け物が……」

それだけ言うと、タズナに抱えられたら彼は気を失った。

「カカシ先生、橋の奥に客だ」

「……シロウ、視力なんぼよ」

シロウが敵を目視したが、他のメンバーは見えなかったようだ。

先ほどぼやいたカカシもすでに左目を隠す額当てを、いつでも直せるようにしている。

「……来たぞ!!」

敵の急接近を見切ったカカシが大剣をクナイで受け止め、シロウが投擲されたクナイを一瞬で投影した双剣で弾く。反応しきれない白とサスケは、予め受けた指示通り、タズナを挟むように陣取っていた。奇襲にも以前より動揺しなかった。

「あら、もう1人はどうしたの、再不斬君？」

「…… 必要ないから置いてきただけだ」

1週間前の襲撃は4人で来たと言っていたのだが、今回は再不斬を含め3人だった。暗部のようなフード付きマントと動物を模したような仮面をつけている。初めて対峙したシロウも、敵が（肉体的に）同じくらいの子供だと理解した。

しかし…… 1人足りないことを力カシに指摘された再不斬の反応の仕方が、シロウには気になった。彼は霧隠れの里の悪しききたりで、同胞を皆殺しにした鬼人と謳われた人物だと聞いた。だが、本当に彼がその人なのか……

「サスケ、白、シロウ。お前等はその2人と戦いつつタズナさんを守れ。俺は再不斬を殺る」

「殺れるもんなら殺ってみな」

そう言つて2人は建設途中の橋の奥へ疾走していった。

残されたシロウたちは、シロウ、サスケ、白が、タズナを囲む三角形を作るように陣を張る。前衛はもちろんシロウだ。敵2人は距離10mほどの位置で立ち止まっている。体格は同じくらいで、顔につけている仮面ぐらいいしか違いがわからない。一人は鳥の面を、もう一人は犬の面を被っている。

「サスケ、一人いないのが気になる。再不斬の様子が変わったところは無かったか？」

「…… いや、気がつかなかった」

前回の戦闘に出ていたサスケに聞いてみるが駄目だった。まあ、期待はしていなかったが。彼の力カシに向けられていた殺気を向けられたら、サスケ達ではそれどころでは無いだろうからだ。シロウも本人に会つて、なかなかの手練れだとは思つたが、もつと鋭い殺気を経験しているので支障は無かった。

気になって周辺に気を配っても、隠れている様子もないし、視線も感じない。本当に3人目はこの場にはいないのだ。

しかし……再不斬のあの様子は何だ？焦りか……？

「悪いですが時間がありません。さっさと仕留めさせてもらいます」  
鳥面がつぶやくと同時に、目の前の敵が動き出した。鳥の面を被っている方が、マントから脇差程度の刃渡りの小刀を取り出す。犬面の方は体勢が低くなつた程度だが、攻撃態勢が出来ているのだから。

一直線に小刀を突き出してくるのをシロウが投影した双剣『干将・莫耶』で受け止め、その後ろからタズナを狙つての手裏剣による攻撃を、サスケと白のクナイを投げることで弾く。いくら氷遁と相性が良くても、千本では手裏剣やクナイは弾けないぞ、と里出発の前日に白に忠告しておいて正解だったとシロウは密かに思っていたりする。

鳥面はシロウと切り結ぶ前に飛び退く。犬面も明らかにターゲット（タズナ）狙いだつたのだが……この2人、攻め方が単調過ぎやしないだろうか？接近戦を持ち込むにしても、素早さを生かしてフエイントを混ぜることも可能だし、投擲だつて牽制を入れてから本命を狙う方が良いに決まっている。

「2人はタズナさんと犬面を頼む。俺はあの鳥面をもらうぞ」

「俺に命令

」

「わかりました」

サスケの発言を遮って同意してくれた白に感謝しつつ、シロウは一気に鳥面との距離を縮める。横をかすめた犬面を無視し、両手に握っていた双剣を手放す。目の前に迫る鳥面の狙いはまだタズナだ。なら、シロウがすべきことは、

「通すと思っているのか？」

鳥面の注意をこちら（シロウ）に引くこと。犬面同様自分の横をすり抜けようとフエイントを混ぜつつ迫る敵を、投影したハルバード（神秘性なしのただの武器）で妨害する。斧槍とも呼ばれるハルバードは、別名通り槍の穂先に斧状の刃を取り付けた代物で、2～3mのリーチを持つ。その斧刃により、槍以上の使い回しが可

能なのだ。だが、その形状故に重い。今シロウが手に持つのは、長さ2m重さ2.5kgと小型のモノだが、『強化』をかけた身体でなら問題なく扱うことが出来る。

「……私たちの狙いはあなた方ではありません。どうか引いてください」

声が高い。先ほども声を聞いたが、おそらく鳥面は少女だ。ただの少女では無く、なかなか強い。現に今もシロウの振るうハルバードを避けつつ、手に持つ小刀で受け流しつつ、隙をうかがう。ただ彼女からもまた、焦りを感じる事が出来た。

「威勢が良いのは口だけか？ この間合いから先に進めると思っなよ？」

「チツ！」

明らかに急いている。相手の様子を見つつ、視線をずらして犬面の方を伺うが……、投擲がメインのようだ。手裏剣、クナイ、それぞれを上手く投擲している。サスケが牽制し、白がタズナを狙う得物を上手く弾いているようだが……。こちらがわずかに劣勢だとシロウは見抜いた。

目の前の敵は、悪いがサスケ達よりも上だ。今は何かに焦るよう動いているために対処しているが、本気で殺しに来たらそれこそ防戦一方になるだろう。今この場でまともに戦えるのはおそらくシロウ一人。出来ればあちらの加勢に行きたいが

「通さんと言ったはずだ」

隙を見て飛びかかってきた鳥面に斧状の刃を振るう。間一髪で小刀で受け止めるも、ハルバードの質量による遠心力で拭き飛ばす。だが、しっかりと空中で受け身をとる当たり、実力が伺える。

「私も援軍に行きたいが、君があちらに行くともむしろマイナスだからな」

「……」

無言。こちらに集中を切り替えているようだ。それなら揺さぶりをかけてみるか……

「もう一人いると聞いたが、人質にでも取られたか？」

「！」

シロウの言葉に面白いように反応し、後ろに回り込み首を狙ってくる。が、

「甘いぞ」

ハルバートから干将・莫耶に一瞬で換装し、防ぐ。しかし、人質か……。シロウの内心は、戦闘に集中しつつも、この現状と原因として考えられる事象に頭を巡らせ始めた。

白とサスケのほうは、犬面の投擲で張る弾幕に踊らされつつあった。

しかも敵は跳躍してからの投擲で、投げてくる手裏剣やクナイが失われないようにしつつ、自分やサスケ達が投げた得物を回収してまた投擲する。着地時を狙おうにも、白はタズナをかばいながらでは勢いのある投擲は出来ないし、サスケも弾幕の処理でそれどころでは無かった。

それより、サスケは普段よりも自分の目がよく見える事に

自らの写輪眼の開眼に気がついた。そのため、飛んでくるクナイでより危険なモノを判断し、それを的確にはじくことが出来た。が、  
「くそ、少しは止まれよ！」

一進一退の現状に我慢できなくなった。やけくそ気味に手裏剣を投擲するも、弾幕にのまれて弾かれる。

「クソッ      ツ！」

飛び退いた先には、目の前にまで数本のクナイが迫っていた。誘導されたのだ。到達まであと0.5秒

「でりゃあああああ！」

クナイはサスケには届かなかった。そして自分の目の前に、見覚

えのあるオレンジが飛び出してきた。

「やいやいやいやい！　うちのサスケがいくら弱いからって、あんな虐めてくれるなよ。　このうずまきナルト様が、今からてめえをぶっ飛ばしてやるからな！」

「ブツ」

「……………」

サスケのピンチにぎりぎり飛び出したのはナルトだった。だが、彼の一言のせいで犬面とサスケの動きが止まる。白は必死に口と腹を押さえて笑いを堪えている。彼女がつぼったのが果たしてサスケの件かは本人のみぞ知る……………。

「ナルト、さっきの発言に関しては後でゆっくり話し合うとして、助かった」

「……………サスケ、お前頭でも打ったか？」

「それだけあいつが強いつて事だ」

「わかりやすく助かるつてばよ。そういえばサスケ、その眼……………」  
「ようやく写輪眼が開眼したんだよ。でも、“この眼”でも見切るのがやつとの弾幕だ」

サスケにお礼を言われるとは微塵も思っていなかったナルトは、まるで未確認生物を見付けたかのような目をするが、緊張を解かないサスケは乗らずに相手の強さを強調する。そんなサスケの様子に、ナルトも気を引き締める。

「相手が何人になろうと関係ない。早く爺さんを殺さないと、姉さんが……………」

犬面が初めて口を開いた。同じ年ぐらいの少年のような声だ。だが彼が言った言葉

「てめえの姉ちゃんが、どうかしたのか？」

ナルトがおそろおそろ尋ねるが、

「あんだ達には関係ない！」

叫んで再び手裏剣で弾幕を展開する。ナルトとサスケはそれぞれ逆方向に飛び退く。これでは人数が増えただけで先ほどと変わらな

い。が、ここでナルトが加わることで、練られる戦略が増えたことは確かだ。

「ナルト、あれ行くぞ」

「おう！」

2人だけがわかる意思疎通をし、ともにクナイと手裏剣を投擲する。それに犬面も弾幕を張り応戦する。が、

「……風魔手裏剣、影風車！」

サスケが、手にした巨大な手裏剣を投擲する。その手裏剣は上下に3枚に分離し、犬面に襲いかかる。

「こんなの」

「「残念だったな」」

「ッ！」

真上に跳躍してかわすが、後ろから3つの同じ声が響いた。と同時に、後ろから背中に強烈な衝撃を受け、飛ばされる。そして、目の前に広がるは、真っ赤な赤と熱

「火遁・豪火球の術！」

そのまま火の塊に突っ込んだ犬面は、その身を焼かれながら何とか横っ飛びで脱出する。が、受けたダメージにより受け身をとれず、転がるようにして橋の上に横たわった。

「即興だったが、うまくいったな」

「だな！」

カラクリはこうだ。サスケが放った3枚の風魔手裏剣は影分身を含めたナルトが変化したモノであり、犬面が避けた直後に変化を解除。空中に飛んでいるナルト本体を、先に着地した影分身達が掴んで振り回し、背中に蹴りを与えたのだ。そして手裏剣の投擲後、すぐにチャクラを練ったサスケが、相手に豪火球の術をする、という連携技。ナルトの影分身、サスケの機転があつてこそその技だ。

だが、完璧に決まったからこそ油断が生じた。そう、犬面を今ので倒したと油断したことこそ誤算

「2人とも危ない！」



「「!!」」

白の叫び声で我に返った2人に、またクナイによる弾幕が迫ってきていた。しかも今までよりもより密で、数の多いものが

ナルトが目を開けると、自分にはクナイが刺さっていないことに気がついた。そして前を見ると、

「え？」

サスケが立っていた。身じろぎせずに。

「おい、サスケ」

「何してんだ、ウスラトンカチ……」

「!!」

仰向けに倒れてくるサスケの体には、黒い凶器が何本も刺さっていた。そこから赤黒い何かを流して。

「何で……どうして!!」

「知るかよ……。体が勝手に動いたんだよ……馬鹿」

それだけ言って、サスケの瞼が落ちた。

惨劇を目の当たりにした白は、タズナとともにサスケの側に来た。前方にはぼろぼろのマントと焦げ目の付いた犬の仮面をつけた敵が、何とかといった様子で立っていた。そして視線をこちら側に寄せると、クナイが散らばる一帯が存在した。先ほどの弾幕に反応出来たサスケの足掻きのあとだ。

問題のサスケは、体にクナイが何本も刺さっているが、急所は外れている。だが、出血が激しい。止血しないとさすがに不味い状況だが、痛みと失血で気絶したのは、こちらにとっては良かったかもしれない。何故なら、ここで痛みに喚かれたら、こちらの士気に関わるからだ。

だがナルトは、サスケがやられたという現実を追いついていけな

かったのか、呆然としてる。いや、彼の拳が震えているあたり、怒りに駆られているのかもしれない。

「タズナさんは側にいてください。止血します」

タズナを引きつけてから、サスケの傷口に手をあてて凍らせる。

霧が出ているのが幸いした。空气中に水が多く存在するので、凍らせる分の水分をそこから調達出来るからだ。

「……てめえ」

「ナルト君？」

ナルトから聞いたことの無いような低い声が聞こえたため、恐る恐る彼を見上げる。その顔は怒りで歪み、頬にあるひげのような本線が徐々に太くなっていた。

「邪魔するなと言った。こうなることを覚悟して立っているんじゃないのか？」

犬面が小さな声でつぶやくように言う。周りが静かなため、白やタズナにも聞こえてくる。だが、ナルトの耳には入っていなかった。「よ、く、も……サスケをおおおおおおおお！」

体中から目に見えるほどの橙色のチャクラを放出させ、ナルトが犬面に突っ込んでいった。

## 第12章 橋上の戦闘（後書き）

イナリ放置しちゃったなあ。あそこでシロウを絡ませるかどうか悩みましたが……作者の腕では無理でしたorz  
サスケの写輪眼開眼が無理矢理という……

### 第13章 漫食される世界（修正版）

戦況というモノはどんなことでひっくり返るかわからない。それ故に戦っている者は目先にとらわれず、起こりうる事象に対して備えをしなければならぬ。のだが、さすがに自分の背後から後ろにいた敵が飛んでくるのは、シロウには予測できなかった。

鳥面とにらみ合っていると、後ろから何かを感じ取ったシロウは、本能に従い真横に飛んだ。直後に黒い塊が、自分が立っていた場所を横切り、鳥面に抱えられる。そのとき初めて飛ばされたモノが、サスケ達と戦っていたはずの犬面だと気がついた。

「どうやって……。」 ナルト？

また後ろから強大な何かを感じ取ったため後ろを振り向くと、そこには邪悪な橙色のチャクラを身に纏い、怒りの感情を含んだ殺気を放つナルトがいた。

「てめえ、よくもサスケを……。」

「サスケが……。」

目をこらせば、そこにはサスケが確かに倒れていた。側にいる白の様子を見る限り、サスケは一命は取り止めたようだ。だが、サスケの下に見られるあの赤い血痕を見れば、ナルトがしているように勘違いしてもおかしくはないか……。この距離から細部まで確認できるのはシロウだけだが。

しかし……このナルトから放出されているというか、まとわりついているというか、あの橙色のチャクラは何だ？あれ（・・）は……いったい何だ？何故あのような禍々しい力を持っている？

「大丈夫？」

「ああ。だけど、今の一発は……。」

鳥面が急いで犬面に近づき、無事を確認する。2人と現状が理解できなかつたようだ。特に犬面の方は、先ほどまで優勢な戦いをしていた相手が、急に強力な力を発したのだ。「このやるおおおお

「おお！」

ナルトがまた襲いかかるうとする

「私に触れぬー（ノリ・メ・タンゲレ）」

赤い布が一瞬でナルトを覆い、拘束する。その布を持っているのがシロウだということに、この場にいた3人が驚きを隠せなかった。

「悪いがナルト、少し黙っていてくれ」

「シロウ……で、めえ！」

必死にさらなる橙色のチャクラを纏い布を引きちぎろうとするが、一向に拘束が解かれる気配が無い。

「悪いが君もだ」

「ッ！」

この隙を逃すまいと、クナイを持って突っ込んできた犬面にも赤い布が襲いかかり拘束する。

「このマグダラの聖骸布は男である限り能力ごと拘束する。あとナルト、サスケは生きている。少しは頭を冷やせ」

それを聞いたナルトが意味を理解するのに数秒かかった。だがすぐに橙色のチャクラが消えたということは、理解したということだろう。

鳥面を睨んだまま、聖骸布を投影した分の魔力を回復するために、白特注のシロウオリジナル兵糧丸を2つ取り出して口に含む。投影はうまくいったと言えるが、基本的にシロウが宝具等を投影するとオリジナルよりランクは一つ落ちる。しかも本来必要な魔力量チャクラよりも少ない量で投影した。さらに、シロウの属性は『剣』だ。剣以外の何かを投影するには剣の2〜3倍の魔力を消費する。投影のできは心配だったが、拘束しきれているから問題はなさそうだが。

隙を見せないように意識して眼光を鋭くしたが、それが功を奏したようだ。あの様子を見ると、完全に萎縮したようだ。……こういうときに自分の鷹のような目つきがあつて良かったと思うが、こいつ（・・・）のせいで怯えられるんだよなあと少し憂鬱になる。だが、憂鬱になるのは後だ。今は彼女、鳥面に聞かなければならない

事がある。

「さつき聞いたな、人質を取られたのかと。それはもう一人だろう？」

鳥面と犬面がビクツと反応する。

「あ、だからさつき姉さんって……」

「なるほど。姉か……。再不斬が焦っていたのもそのせいかな？」

それを聞いた2人の気配が変わる。驚愕と焦りが生まれている気がする。信じられないと言うような気持ちもあるのかもしれない。

「貴様らはいったい何者だ？ どうしてタズナを狙う？」

ナルトは何を尋ねているんだと聞いているが、シロウはあえてこの質問をぶつけた。この根本的な部分をはっきりさせないといけないのだ。

鳥面がシロウから目をそらそうとするような仕草をするが、さらに鋭く睨みつける事でそれを阻止する。

「……私たち3人は孤児だった。居場所が無くてずっとさまよって……再不斬さんとあったのはその頃」

鳥面が俯いて、こぼすように言葉を紡いでいく。場の静けさがその言葉をはつきりとシロウたちに運ぶ。

「再不斬さんのおかげで、私たちは救われた。あの人は私たちを必要としてくれた。居場所を作ってくれた」

ここまでいって、顔を上げてはつきりと、こう言った。

「だから私たちは、“道具”としてあの人のために動く！ あの人が必要としてくれることで、私たちはこの世界にいられるの！」

「だが、再不斬はそんな風に思っていなかった」

「……え？」

シロウの言葉で、面をつけた2人の何かに亀裂が走った。

「もう一人を人質にとったのは、お前達の雇い主のガトーだろう？」

2人は無言を貫くが、それが肯定を意味することは言うまでもな

い。

「やはりな。」

しかし、再不斬の別名は鬼人だ。仮にも道具としてつれている子供一人を捕らえることで扱いやすくなると思ったのか？現にそうだったようだが

「ッ！」

この場にいた全員が同じ方向を向く。カカシと再不斬が戦っている方向から、強力なチャクラが感じられたからだ。ビリビリと肌を突き刺すような感覚に襲われ、濃い霧に隠れていた戦いが露わになる。すでに聖骸布は不完全な投影のせいで崩れているため、拘束されていた2人も身構えた。

そこにいたのは、忍犬に腕、脚を拘束されて動けない再不斬と、左腕に雷状のチャクラを大量に集中させるカカシがいた。

interlude in

子供たちと離れてから、再不斬の霧隠れの術によって視界が悪くなった。

カカシも、再不斬に関して違和感を感じていた。以前の再不斬はこの術を発動した後、狂言をこぼしながら余裕の雰囲気を出していたが……。今の再不斬は本気で自分を殺そうとしているのをカカシは感じていた。というよりも、敵が全く余裕が無いようにも見受けられた。だが、今はそんなことはカカシには些細な事だった。奴は、自分たちの敵だ。

「しょうがないけど……」口寄せ・土遁・追牙の術」

ポーチから巻物を取り出し、地面に開く。右手の親指の先を噛みきり、血をつける。そこから白煙が立ち上り、8匹の犬　カカシが契約している忍犬たちが口寄せされる。

「どうしたカカシ、俺たちをこの術で口寄せするなんて？」

「あいにくとこの視界でね」

カカシに話しかけたパグのような小型犬、パツクンの問いに、親指を立てて霧をさして答える。

「なるほど。で、相手は？」

「霧隠れの“鬼人”だよ」

「……………そうか」

それだけのやりとりで、忍犬たちはまた白煙に包まれて消える。

これで仕込みはすんだ。後は……………

「……………ッ！　なんだ、こいつら」

再不斬の悲鳴が聞こえてきて、徐々に霧が晴れる。そこには肢体を忍犬たちに噛まれ身動きのとれない“的”が立っていた。

「お前の未来は、死だ」

左手にチャクラを集中し、“雷”に性質変換する。“コピー忍者カカシ”と呼ばれる木ノ葉の誇る上忍はたけカカシ唯一のオリジナル技、“千鳥”。この術で雷を切ったという逸話から、カカシは“雷切”と呼んでいる。

身動きのとれない再不斬の表情が強張る。この術を見た敵たちと同じ表情……………。これから自分に死を与えるモノに対する恐怖が憤怒か。

再不斬を見据えて左手を構える。すでに十分な量のチャクラが纏われており、チツ、チツ、チツ、チツ……………と今か今かと鳴いている。「ここがお前の終着駅だったんだ。桃地再不斬」

左手を突き刺す格好で、一気に“的”に向かって走る。雷切、もとい千鳥という術は、雷属性に性質変換したチャクラで肉体を活性させて行つただの突きだ。だがその速度と、カウンターを見切るこゝとが出来る写輪眼が在ること、その殺傷力は群を抜いている。

あと3m……………そこで何かカカシと再不斬の間に割り込んできた。だが、高速での直進を止めるすべは無く、

「……………君は」



再不斬の心臓に突き立てられるはずだった左腕は、間に割り込んできた、猿の仮面を首にかけた“3人目”の子供　少女の胸の上部を貫いていた。

i n t e r l u d e   o u t

「姉さん!!」

仮面2人が全力で走っていき、シロウとナルトもそれに続く。

傷跡は……完全に心の臓を貫いていた。即死　全員の頭に

その単語がよぎった。

「……よくやった」

そういつて再不斬は首斬り包丁を持ってカカシに飛びかかる。が、その動きは単調となっている。全てを見切られ、肢体にクナイを投げ込まれる。それを首斬り包丁で払うが、振り切った右腕にクナイが刺さり、剣が手から離れる。

「甘いぞ。終わりだ」

「ちよつと待ったー!」

クナイを振り下ろすカカシを止めたのは、村で待機しているはずのアンコだった。

「アンコ、どういうつもりだ?」

「訳ありに決まってるで……遅かったか」

倒れていた猿の面を下げた少女を見て、舌打ちをする。

「……知り合いか?」

「先ほど村に来てな。『再不斬さんを助けてくれ』と泣きついてきたのだ」

シロウの横に小次郎が立っていた。その表情にいつもの余裕はなく、苦痛で歪んだようなものだった。サクラは……サスケの所にいるので触れないでおこう。

「……シロウ」

「さすがにすでに死んでいるモノに手は尽くせん」

シロウのストックする宝具でも、さすがに死人を蘇らせるような能力をもつ宝具はない。

「お、逃げ出したと思っただら……。まあ、わざわざ手を下す手間が省けたと言うことか」

霧がかかる橋の奥から声がした。そこには、小柄で小太りの、下卑た雰囲気が出ている男と、それを取り巻くように数多の男たちが囲むようにいた。ただ、その取り囲んでいる男たちの様子がおかしい。目に生気がないというか……。彼ら一人一人についているあの黒い血管のようなモノはなんだ？しかも心臓のような、核のような巨大なモノがどこかにある。何だあの魔力の質は……。どこまでも禍々しい。しかも、どこかで見たことのあるような、そんな気がする。だが、他の人間は見えていないのか……。？特別なりアクションをしない辺り、見えていないのかもしれない。

「ガトー……」

再不斬が太った男を睨みつけた。

「全く……。てめえはやっぱ役にたたねえなあ。せつかくとつた人質だったが、おめえの目の前で死んだんだ。結果オーライだな」

「……」

再不斬が怒りに打ち震えている。臍をやられ、すでに握りしめることの出来ないだろう両手が握りしめられようとしている。

「……小僧、クナイをよこせ」

ドスのきいた声でナルトに声をかける。反射的にナルトはクナイを出すと、それをふるえる手で口まで持っていき、柄をくわえる。

「……カカシ、ガキどもを頼む」

吐き捨てるようにいい、集団に突っ込む。それを止めようと壁が動くが、それをくわえたクナイで一人ずつ首や得物を持つ手をはねる。

そこで、異変がでた。

「　　ッ！！！」

傷を負いながら一人ずつ切り捨てていったはず。それなのに、背中、真後ろから思い切り斬りつけられた。そこには、先ほど首を切り捨てたはずの男が、一徐々に首を再生しながら「……………」  
「……………」手に持つ刀で斬りつけてきたのだ。

他にも切り捨てた半数以上の死体が切り口を再生しながら蘇っていた。ただ、首に黒い魔力の核が在った者は、そのまま蘇ることは無かった。つまり、あれを潰さない限り、敵は再生し続けるということが……………。

「……………不意だがな。投影開始」  
トレース・オン

考えるより先に、シロウは動いていた。その左手には、普段狙撃で使う洋弓より半回り大きくゴツゴツとした、それでいて洗礼されたフォルムの弓。ギリシャの英雄ヘラクレスが生前「ヒュドラ殺し」で使用した宝具。

「……………セット全行程投影完了、射殺す百頭！」  
ナインライブズ

右手に光の矢が現れ、それが6つの光となって再不斬の周りの敵の黒い核を射抜く。

「……………6発が限界か。なら、投影開始」  
トレース・オン

洋弓を消し、夫婦剣、『干将・莫耶』を投影し、一気に敵に接近し、核を通るように切り捨てる。

「血路を開く。小次郎手伝え」

「……………全く、仕方のない奴だ」

本当ならアンコやカカシを入れたい所だが、すでにカカシは写輪眼使用の反動で動けないし、アンコも彼をかばっているから動けない。アンコが止めようとしていたようだが、そんな事お構いなしと太刀を持って颯爽と登場する。これで後におとがめがあるかもしれないが、まあ良しとしよう。

「……………てめえら、何故？」

「ここで貴様が死ねば、あの子供たちはどうなる？ 彼らには貴様が必要だ。どんな形でもな」

敵を睨みつけたままいう。これに関しては、再不斬に有無をいわせる気はない。とにかく今は、この状況を打開するしかないが……こいつら全員殲滅するのは少し骨が折れる。

それに、あの力を持たせたのはガトーだとは考えにくい。裏があると考えて良いのか……？ 裏で糸を引いている人間がいるとすれば、その目的は何だ？

冷静になって考える。この黒い魔力はシロウにしか見る事が出来ない。つまりこれは自分に対する何かとらえて良いのか？ だがここまででは現状を打開する方法には結びつかない。一人一人に破戒すべき全ての符を突き立てるわけにも行かない。……一か八か。

「小次郎、なんとしても道を開くぞ。再不斬はいち早くガトーを潰してくれ」

「ふむ、エミヤ殿がそういうのなら、仕方あるまい」  
「……すまない」

本来なら断つていそうだが、再不斬は今回は了承した。それだけあの男が憎いか……。

「よし、行くぞ！」  
「おう！」

小次郎が先頭を切り開き、再不斬が続き、シロウが支援し、確実に黒の核を討つ。

「ひ、き、貴様らちゃんと壁になれ！」

ガトーが場の流れの変化に気がつき、怯えながら叫ぶ。だが、3人の鬼気迫る突撃は勢いをゆるめることはない。何より再不斬の殺気に感化されて、2人の表情も普段よりも堅い。絶対に墮とすと書いてあるほどだ。

「ひ」  
「ひ」  
「逃がさねえ」

再不斬とガトーの影が重なり、ガトーの首が胴体から離れる。

「ふう、これで」

小次郎が一息つき、再不斬が崩れる。カカシにつけられた傷が深いのだ。出血も進んでいる。早く手当をするべきなのだが、

「いや、まだまだ」

ガトーは死んだ。あまりにもあっけなく。だが、問題の死ににくい男どもは未だに健在なのだ。真ん中を突っ切つて来たから、4割方は片づけたのだが、残りは未だに健在だ。しかも囲まれている。

……見積もつて、30人か。

こちらの状況は、小次郎とシロウは浅い傷があるモノの特に問題はない。再不斬はカカシの戦闘で付いた傷が深いため危ない。ならば……

「小次郎、道を造る。再不斬をつれて走り抜ける」

「……了解した」

訝しげな視線をぶつけてきたが、承諾してくれた。手ならある。

問題は、どれ（・・・）を引き出すか、だ。

「トレース・オン  
投影開始」

自分の結界に登録されている剣の中から、基本骨子が複雑でなく、それでいて爆ぜた時のエネルギー量が多いモノを……。

「ロールアウト  
工程完了。全投影、待機。小次郎、走れ！」

シロウの周りに数多の剣が浮いている。その数12。それを確認した小次郎が駆け出す。

「フリースアウト  
停止解凍、全投影連続層写！」

道を空けるために4本、間隔が一定になるように残りを勢いよく発射。黒い核を狙って。

……小次郎たちが抜けた。最後の片付けた。シロウは注意を引くために逃げるわけにもいかない。さて……ファイナーレだ。

「ブローケンファンタズム  
壊れた幻想」

そこにあつた全ての剣が、爆ぜた。

「おい、シロウ、無事か!？」

ナルトの声が聞こえる。体中に痛みが走っている。爆発のど真ん中にいたのに、気絶しなかったのは良かったのか、悪かったのか。重たい瞼を何とか開けると、そこには心配そうにのぞいてくるナルトと白の顔があった。白に至っては目に涙を浮かべている。

火傷で痛む体を何とか起こす。本当ならここで白の機嫌をとるべきなのだろうが、今はなすべきことがある。

「ナルト、敵はどうだ？」

「誰も起き上がってこないってばよ……」

ナルトの表情は暗い。先ほどの少女がカカシの雷切に貫かれて死んだときと同じような表情だ。まあ、いいたい事はわかる。だが、それよりも

「再不斬は無事か？」

足を運ぶと、再不斬は失血で倒れていて、その周りに面をつけた子供たちが座っている。

「シロウ、こいつはこいで

「始末などさせんぞ。投影開始」

トレス・オン

「

右手を再不斬の手前に止め、あるモノを投影する。かつて自分に埋め込まれていた、騎士王アーサーの持つ聖剣の鞘、全て遠き理想郷<sup>アウア</sup>。今の魔力ではEXランク宝具は投影できないであろうが、これは別だ。衛宮士郎が言峰綺礼と対峙したときに、どんなに追い詰められた時でも、この宝具は投影することが出来たのだ。というより、今の魔力量では他の回復系宝具を投影しても未完全だろう。なら効果<sup>アウア</sup>が薄くても確実に投影できるモノの方が良いと判断した。ただ、やはり持ち主がいらないこの世界では、全て遠き理想郷回復力はあまり期待できないが、ないよりは良いだろう。

……傷が段々とふさがる。これならあの失血量でも何とかなるだろう。

「責任なら私がとる」

そういつてカカシの目を見る。

「……はあ。変な動きしたら速効で殺すからな」

カカシが折れる形で、何とかこの場をしのげた。まあ、また逆上すれば、そのときにはまた聖骸布で拘束してしまえばいいのだ。シロウはこの場だけは譲る気はなかった。再不斬を殺すことを。何故なら、彼を必要としている子供たちがいるのだから。

interlude in

「あーあー、台無し」

橋の一件を見ていた一人が、面白く無さそうにつぶやく。

ガトーが再不斬たちの扱いに困っているときに、力を与えたのはこの人物だ。元々、たまに有り余る魔力を放出しないと身が持たないのだ。今回の一件でそれが果たされたのだから問題ないのだが。

「しっかし、うらやましいねえ“正義の味方”よお」

自分が便乗させてもらったのではあるが、やはりこの処遇は腹が立つ。やはり自分に絡んでくるモノはレベルが違うらしい。全く持つて腹立たしい。いっそのこと溜まりに溜まったモノをはき出して国一つ潰してやっても良いが、それではこの余興を仕込んだ意味がない。

「さてと、あの変態野郎のご機嫌取りも面倒だな」

そう吐き捨てて、男は自分の仮初めの居場所に戻るのだった。

interlude out

### 第13章 漫食される世界（修正版）（後書き）

修正版アップしました。いろいろ悩んだ末、プロットと睨めっこしながらここまで来ました。とうかがこれが限界です……。最後に、皆さんの沢山の助言、ありがとうございます。ここでまとめてですが、感謝申し上げます。



## 第14章 任務の終わりに

建設途中の橋の近くの森に、小さな墓が出来た。名の掘られる墓石すら無いものである。そこにあるのは、犬、鳥、猿の描かれた仮面が備えられている。

「ここにいたのか。探したぞ。」

シロウが墓の前の人影に声をかける。シルエットが人と同サイズの長方形、大剣を背負う人物は1人しかない。

「しかし、“桃地”に“犬、鳥、猿”とはな。どこかの昔話だな」「フン。ガキどもにせがまねなければ、こんなものを与えていなかったださ」

再不斬の口調はあくまで乱暴ではあるが、その表情は、どこか昔を懐かしんでいるようなものだった。

「……なぜ俺を助けた？」

「二度は言わないぞ」

橋上での戦闘から3日、再不斬と仮面の子供2人は生きていた。子供たちは怪我はなかったものの、姉的存在であつたらしい1人を失ってから元気はない。再不斬も少し覇気がなくなっているかのようにも見える。

3人はさすがに村に入れるわけにはいかなかったため、今は廃屋を整理したところに匿っている。言い出したシロウが責任を持って食事を運んだりしているのだ。

「俺は人殺しだぞ。俺があいつ等の世話をしてやる資格はない」

「貴様がどう思っていてても、あの子供たちには貴様が必要なのだ。」

……失うには大きすぎる」

子供と自分を重ねてしまっているようだ。切嗣を失ったときの喪失感はたまったものではなかった。まだ自分には藤ねえがいたから良かったものの、彼らは再不斬以外には頼ることができる存在かい

ないのだ。

「それに、私だって貴様みたいなやつに育てられた。問題ないだろう」

自分、衛宮士郎の父親である切嗣も、魔術師側の世界では再不斬に引けを取ることのない存在だったのだ。それに自分は彼を失った際にある種の呪いを受け取ってしまった。あの子供たちも今はまだ再不斬の道具という呪縛に取り付かれているが、再不斬が生きている今ならそれを取り払える。

「子供達がどうなるかはお前次第だ、桃地再不斬」

「……貴様に言われるまでもない」

その答えを聞いて、シロウは満足し、踵を返す。と、10m程先に、なにかが後ろから飛んできて地面に刺さった。

「こいつを、あの刀を振り回すガキにやっつけてくれ」

彼が“霧の忍刀七人衆”が1人であり、この首斬り包丁がその証であり得物であることは聞いていた。その彼の忍としての証を、手放そうというのだ。

「いいのか？ その墓に残しておいてやらなくて」

「ああ。あいつには忍（道具）として、辛い生き方を強いてきちまった。死んだ後くらい、忍という鎖が無くても良いだろ。仮面（思い出）があれば、な……」

再不斬の表情は、もう鬼人と呼ばれたそれではなく、切嗣と同じような、親のような表情だった。

その日、再不斬達は姿を消した。

「シロウ、何か聞いているか？」

「……いや」

カカシに聞かれるが、とりあえず笑っていう。

ちなみに首斬り包丁は、柄を外した状態で、小次郎が引きずりそうになりながら背負っている。これを届けたときは童心に返ったごとく（現に子供だが）喜んでいたが、重いという理由で、後で巻物か何かに収納するらしい。

「……………」

「ナルト、どうした？」

黙ったまま俯いているナルトがあまりにもらしくなかったので、つい声をかけてしまった。

「大方あの死んでしまった子のことを考えているのだろうが、止めておけ」

「でも……………！」

シロウの冷たく感じられる一言に食ってかかるが、その先を言い出すことができなかった。

「人間にはいきる理由が必要なものもいる。彼女はそれがあの再不斬だったというだけだ」

カカシも口を出す。他の面子は思い思いの表情を浮かべて黙っている。

「……………でも、それじゃあの子が可哀想すぎるってばよ」

「かもしれないな。だが、再不斬はもう同じことはしないさ」

私だって……………俺だって、可能なら彼女を救いたかった。1を切り捨てて9を救ってきた。もう慣れたはずだ。なのに、何故こんなに胸が苦しいのか……………。

「忍の世界は難解なことばかりだ。今回みたいに救いのないこともある。割り切るしかないこともあるんだ」

独白のようにカカシの口からでた言葉を、各々は噛み締める。なにも言い出すことが出来なかった。

「なら、俺が強くなって、みんなを救ってやるってばよ!」  
いきなり大声でナルトが宣言した。

「……すべてを救うことはむずかしいもんだぞ」

「まっすぐ自分の言葉は曲げねえ！　それが俺の忍道だ！」

「確かに、難しいな」

カカシの言葉に賛同したのは、やはりシロウだった。

そう。全てを救うことなどできはしない。必ず選択を迫られる瞬間<sup>とき</sup>が来る。

独りでは、な。

「シロウも無理だつづつのかよ」

「さあな。でも、目指してみるのも、いいんじゃないか？」

何故、ここまで気を楽に保て定めるのか、自分でも分からない。

きつと、仮に何かを切り捨てることになっても、そこには確かに“救い”があると気がつけたからなのか。この気持ちをはかることは出来なかった。

## 第14章 任務の終わりに（後書き）

終わり方が味気ないですが、これで再不斬編は終了です。前回多数のご意見を承り、あのような修正を加えました。今後とも何かあればドシドシ書いてください。極力返信します。

## 第15章 試験に向けて

日差し、熱、そして蝉の声。

夏、夏、夏。木の葉の里は夏に突入している。

「あ、あんたたち中忍試験受けなさい」

日向宗家の屋敷の縁側で、アッコが宇治金時をつつく。

「中忍試験？」

「まだ下忍になってそんなにたっていないのに、可能なのですか？」

メロンシロップを小次郎が、イチゴシロップをシロウがつつく。

「あ、アッコ先生、お代わりいります？」

「あ、ちよーだい」

ペンギン型のかき氷機で自家製氷を削る白。もちろん白の氷遁を使っていないことをここでしっかりと強調しておく。

空の器を並べて、いつものように任務を聞く体制に入る。

「で、中忍試験はもう申し込んであるから。あと一ヶ月あるから修行出来るしね」

「また勝手に……」

すでに第9班の子供は、担当上忍の横暴は諦めている。ただ能力以上の無理矢理な要求は無いため、小言が出つつもしっかりとこなせている。

「でも私、試験官やらないとだから忙しいのよ。だから残りの時間はずっと修行ね」

「あ、だから最近任務多かったですね」

最近、連日で任務が入っていて、何気に忙しい生活を送っていた。お陰で懐は暖かかったりする。夏だがほっかりしているのだ。

「じゃあ午後は第8演習場に集合ね」

そう言い残してアッコが去っていった。シロウたちのため息が出

ない日は無さそうである。

3人が演習場に着いたとき、やはりアンコは先に着いていた。集合場所になっていた場所には、ひとまわり小さな湖があった。

ちなみに第10班の夏場の服装は、シロウとアンコは変わらないが、小次郎は薄手の和服で、白は厚手だったインナーを薄いものに代えている。

「じゃあ今日から新しい訓練するわよ。木登りの業は出来るわよね？」

確認するまでもないと、3人は頷く。

「よし、じゃあ次はその応用で、水面歩行の業よ」

アンコが湖に足を踏み入れる。本来なら足は水中に入るはずだが、その足は水面を確かに踏みしめていた。

「足裏にチャクラを集中させる訓練が木登りの業。そして水面歩行の業は、一定量のチャクラを常に足裏から放出する訓練よ」

奥に歩きながら話し、言い終わると同時に振り返る。

「チャクラコントロールの修行でもあるけど、これは重要だから聞きなさい。忍同士の戦いで水面上で行われることだ。だからこの修行が出来てようやくまともに忍同士の戦闘が出来るってことよ」

いつになく先生らしいアンコの様子に、気が引き締まる。その様子を見て満足そうに笑って、

「チャクラが少なすぎても多すぎてもだめよ。コツをつかむまで大変だろうけど、頑張りなさい！」

最後にはしっかりとフォローをいれる。だからこそ、アンコは班員に慕われているのだ。

3人はそつと足を水面に触れさせる。木登りの業の要領で足の裏にチャクラを集中し、水面の様子を見る。水面に波紋が現れて、強まって弱まって……それを繰り返す。

「ちょうど良い具合で足を踏み出してみなさい」

波面が安定した頃合いで、シロウと小次郎が足を踏み出す。が、その足は自然の摂理に従い、水面を突き抜けて水没。

「シロウは安定してはいるけど弱いわ。小次郎はムラがあるわね」とのこと。続いて白も足を踏み出す。3秒ほど立っていられたが、その後水面が弾けて同じく水没。

「これは木登りよりも難しいからね。地道に繰り返しやるしかないのよ」

3人で岸に上がり、また水面に足を踏み出す。

……やってみて初めてわかるものだが、これは木登りの業と比べても段違いに難しい。ワンランク上の修行のように思える。シロウと小次郎は相変わらず微妙なチャクラコントロールに苦戦する。コントロールの良い白でさえ苦戦している。しかもチャクラを出しっぱなしにしているから、まだコツのつかめない段階ではスタミナを消費する。小一時間3人で試行錯誤しながらやってみるが、1秒程度時間伸びた程度だった。

「一時間で一秒か……。まあぼちぼちかしらね」

アンコが作っておいたたき火に当たりながら、ようやく息をつく。ついでに湖にいた魚を焼いて腹ごしらえの準備もする。

「一ヶ月でモノになるような修行なのか？」

「一ヶ月もあればあんたたちなら戦闘できるレベルにまで上達するわよ」

シロウのぼやきにアンコが励ます。特に白なら今週中には出来るようになるだろうし、中忍試験まで十分な準備が出来そうだとアンコは踏んだ。試験官としての仕事これから次々と溜まってくるはずだから、見てやれるのはせいぜい2週間ないくらい。その間にどれだけ彼らを成長させることが出来るかが、担当（特別）上忍としての腕の見せ所だ。

それに……。アンコはここ数日いやな予感がしていた。特にはつきりとしたモノではないが、なにやらいやなモノが現れるような……



…。それに最近、木ノ葉の里を抜けた自分の師の動きがない。裏で色々と危ないことをやっているから、何かしら噂程度だったりの情報が流れてきていたのだが、最近はこれっぽっちもない。それこそ、何かをしでかす気がする。

今は呪印が無いためにある程度まともに戦えるだろうが、中忍試験では生徒を演習場に放り出すようなものもある。教え子を鍛えておいて損はない。

休憩が終わった後、すぐに修行に戻る3人を見て、たくましさを感じずにはいられなかった。

一週間後。

「やっぱ白は才能ありすぎね」

すでに白は水面を歩くことが出来るような状況だった。シロウと小次郎は、集中していればしっかりと水面に立っていられる具合だ。

「じゃあシロウと小次郎は引き続きやって。白は私と組み手よ。この上でね」

それだけ言っただけアンコは水面に飛び乗る。まるで普通の地に足を付けているかのように直立不動の姿勢は、自信を感じさせるものだった。

「なら、私たちは大人しく修行するでしょう」

シロウと小次郎は大人しく水面に足を踏み出す。水面はアンコほど安定してはいないが、確かに一週間前と比べればかなり安定している。

「なら、遠慮せず行かせてもらいます」

「本気で来なさい！」

両手に千本を仕込んで、仁王立ちするアンコへと飛びかかる

水面を影が駆け回り、時にぶつかり合う。時に一つの影からは水が立ち上がり、もう一方を襲う。

アンコは水遁をそこまで得意としていない。むしろ得意な火遁や土遁を組み合わせたりと、得意分野を使って苦手を補うタイプである。つまりこの水遁の術はすべて白が使う術なのだが、

( やっぱりね…… )

自分のあまり当たっていて欲しくない想像が当たってしまったことに嫌悪する。

「ハア、ハア……」

「あら、もう終わり？」

水面で膝に手をおく白を挑発する。

「まだ、まだですよ」

つぶやくと同時に蹴りかかってくるのを、受け流して逆に蹴りを入れる。空中で受け身をとって水面に着地する。そこまで出来るとは思っていなかったが、表情は苦しそうだ。

「白、あなたの弱点、自覚してる？」

「……？」

怪訝そうな顔でみてる。これは自覚なしと考えていいだろう。

「一つ目。忍術に依存してる。あなたはチャクラコントロールは確かに良いけど、絶対量はまだ並程度なのよ。それなのにさっきみたいにバンバン術使ったら一気にガス欠よ」

水辺でなら確かに白の得意とする水遁はかなりの力を発揮できる。だがペース配分を間違えれば、あつという間にチャクラ切れを起こす可能性があるのだ。

まだこれはいいほうだ。問題は次……。

「二つ目。あなた、無意識に手を抜くでしょ」

「……抜いてません」

「なら、あなたは今の組み手で水遁使ったかしら？」

「ッ！」

静寂が流れる。風一つなく揺れない水面で、ただ白の周りだけ水

面が揺れているかのようだった。

白はその事実にとった今気がついたようだ。確かに、白は才能あふれる天才の部類だが、その性格故にその面があまり出てこない。基本的に優しすぎるのだ。

「あなたが氷遁を嫌う理由は知ってる。でもさっきあなたは遠慮しないと云ったはずよ。これがあなたの本気？ それとも私じゃ役者不足？」

「違います！ 僕は……」

それきり白は完全に俯いてしまった。

『氷遁は殺傷能力が高すぎて、あまり使いたくないんです』

以前白が戦い方の相談をしてきたときに、彼女がふと漏らした言葉だ。

確かに氷遁は、彼女から説明してもらった術を考慮してみると、これほど抹殺暗殺に向いているものはないと納得できた。その使い手がこんな心優しい少女というのは、いったいどんな皮肉であろうか。

確かに、彼女の担当上忍である自分と本気で戦えなど、なかなか厳しいのかもしれないが、実戦では仲間の裏切りだつて考えられるのだ。

「あなたの優しさは本物よ。でも、戦いに過度の優しさは危険よ。自分だけじゃなく仲間も危険にさらす。そのことを覚えて起きなさい」

今日はもう終わりにしようと思つた。幸いシロウ達も水辺から上がって暖をとろうとしている所だ。あとの白のフォローは……シロウに任せていいだろう。

水面がかすかに揺れ、二つの陰が周りの木の揺れとともに消えた。

その日の夜。

「白、どうかしたか？」

日向宗家の縁側、よくシロウが座って月を眺める場所に、先客がいた。

「……少し、考え事をしていました」

とても切なそうな顔で、白は呟いた。

会話はそこで止まる。シロウが白の隣に腰掛け、いつものように月を眺める。

「優しいことは罪ではない。ただそれが甘さになっては誰も救えないぞ」

考えを見透かされたことに驚いたのか、白がビクツと反応する。

シロウも白の優しさが甘さになることを考えていたのだ。

「そんなこと分かっています。でも……」

「割り切れないよな」

苦笑が漏れる。分からなくもないのだ。自分も散々甘ちゃんだったと思う。正義の味方を夢見ては、打ち砕かれた思い出ばかりだ。

「……そうだな。白はゆっくりと答えを探せばいい。こればかりは自分で悩み通すしかない」

「……はい」

シロウとしては、変わってほしくない。白には今のままでいい。それに、仮に彼女の甘さが裏目に出ても、今の第9班なら乗り越えられるはずだ。天秤にかける必要もないだろう。

その夜、縁側で結局寝てしまった白を布団に寝かせて、シロウも床につくのだった。

## 第15章 試験に向けて（後書き）

中忍試験編に突入しました。ここからが盛り上げどころですね。頑張ります！

## 第16章 一次試験開始

木ノ葉の森にある湖の上に、3人の子供が立っていた。

「……あと30分か」

白髪の少年 シロウの一言で、後の2人、第9班のメンバーである白と小次郎が水面を跳ぶ。水面に3つの波紋が横に、その列が縦に続いて、陸地までたどり着いた。

修行を初めて2週間経ったころ、アンコは試験官としての仕事の本格的に多くなり、それを言った日から彼女は修行を子供たちに任せた。すでにコツを掴んでいた白がコーチとなり、シロウと小次郎もすでに水面歩行の業を習得していた。

それぞれの腕時計を確認すると、確かに試験開始まで後30分。走れば10分掛からずに着く。

「よし、行くか」

「はい」

「うむ」

シロウが先頭を切り、2人も続いて駆けだした。

「確か301だったな」

シロウたちの第一試験場は、すでにアンコから指定されていた。わざわざ中に入ってから向かうのも面倒だったので、窓から入ろうとしたが、

「開かない？」

窓の鍵は全てしまっていた。夏場で暑いために、ふつつなら窓を開けていそうなものであるのに、全て嚴重に鍵が閉まっていた。

「仕方ない。入り口から入ろう」

3人は入り口からおとなしく入る。階段を上がると、301の教室前にはすでに多くの忍がいた。

「……何故彼らは201に集まっているのだ？」

「……は？」

小次郎の意味不明な発言に、2人は驚く。

「いや、気がつかなかったのか？」

小次郎に催促されて、シロウと白も目をこらす。集中力が増してくるにつれて、確かに201だと確認できた。

「幻術の類ですかね。どうしてわかったのですか？」

「さあな。だが確か父から対幻術の修行は幼い頃から受けていたからな」

まさかの新事実。ある意味ご都合主義。だが、生い立ちを考えると、一番忍らしいのは確かに小次郎なのだ。シロウは論外だし、白は血系限界を隠してきたため、日向宗家の屋敷で生活するようになってから教育を受け始めたのだ。

「おかげでこの程度の幻術ならまずかからない」

「……まさかの才能だな」

「対幻術担当ですね」

というわけで、小次郎はこの班の対幻術担当となった。確かにこの班では幻術タイプの人間はいない。だが、幻術を受けた時の対処は必要不可欠なモノである。ここで対幻術が優れている人間がいたとわかっただけで、この班の実力はさらに上がったと思われる。

「さて、では301に移動するか」

後ろから謎の喧噪が聞こえてきたが、時間が無いためスルー。そそくさと会場へと向かうことにした。

3人が会場にたどり着いたとき、すでに多くの下忍が会場入りしていた。

「何というか、ガラの悪い面ばかりだな」

背中に太刀を背負った小次郎がぼやく。確かに、にらみを効かせる輩が多い。その中で、見知った顔もいくつか見あたられた。

「あ、シロウ君に白ちゃん」

「ヒナタさん！」

奥からヒナタがやって来る。住んでいる家は同じだが、下忍になつてからは班行動が多いため、あまりあえていないのが現状だった。「お、こいつらがシロウに小次郎か。話に聞いてたとおり強そうだな」

「アンアン！」

「おう、赤丸。それでも最強は俺たちだな！」

「……油断しないことだ。何故なら、第9班はここ数年で最強のチームと言われているからだ」

ファー付きのパーカーを着て、赤丸と呼ばれた白い子犬を頭に乘せた少年と、サングラスをかけてやはりパーカー等の服を着込んだ少年が、ヒナタの後ろから現れた。前者が犬塚キバ、後者が油目シノという名だとヒナタから紹介された。……この班は何故こうも服を着込んでいるのだ？

「こちらの紹介は省略していいな。しかし、ここの空気は悪すぎるな」

「それには同意する。何故なら、周りの下忍の視線がきついからだ」

「でも雑魚ばつかじゃねえか」

「うむ。太刀を使うまでもない」

「ちよ、ちよつとみんな……」

「事実だから良いじゃないですか」

どれが誰の台詞かは、改めて示す必要も無いだろう。周りの目が集中するも、この6人はけるつとしていて。シロウはヒナタがおそらく怯えると思っていたが、気にしている用には見えない。気がつかないうちに、ヒナタも成長しているのだろう。

「お、シロウ……！」

聞き覚えのある間抜けな声。誰だかはすぐにわかるが、とりあえず振り返る。そこには満面の笑みのナルトと、普段以上にむすつとしたサスケ、その後ろで部屋の空気にもまれてるサクラ、第7班の面子がいた。



「相変わらず元気だなお前は」

「へへん！ シロウ、それが俺のアインティティだからな」

「アインティティ、ね」

「難解な言葉をおうとするからそうなる」

「……うるせえつてばよ！」

ナルトの間違いに突っ込みを入れるサクラと小次郎。

「お、なんだうるさいと思ったらお前たちか」

「シカマル！ 久しぶりだな」

アカデミー時代に仲の良かったシカマルとの再会に、シロウはうれしさを隠せなかった。まだ子供だというのに、自分が他人との再会でここまでうれしさを感じるようになっていることに、シロウは気がつかないが。

「っげ、イノブタ（デコチン）」

「やつほー。お菓子いる？」

あつて早々いがみ合うのとサクラ、常にマイペースなチョウジと、ルーキーと呼ばれる本期生がそろった。

「君たち、少し静かにいたらどうだい？」

どこからともなく冷ややかな声が飛んでくる。声の主は、小さめの丸いめがねをかけた、灰色の髪と紫を基調とした服の青年だった。おおかた、何回かこの試験を繰り返していそうな風格であるが……彼は視線を動かし、最後にシロウで止まった。数瞬長く見ただけで終わったが、シロウは何か違和感を感じた。

コイツハアツテハナラナイ

「ッ！」

「シロウ、どうかしましたか？」

顔の右半分を覆う形で手を当て、気を紛らわす。急に何か脳裏をよぎった。それは一瞬よぎっただけであるが、それは無視出来る

ような感覚では無かった。だが、あまりにも一瞬の出来事だったために、シロウは結局それを追求することが出来なかった。

そして、その青年の口元がわずかに上がったことも、誰の目にも映らなかった。

「ほら、注意されちゃったし、行きましょ」

サクラの一言で解散となった。

その後すぐ、

「静かにしやがれ！ クソ野郎ども！！」

黒板の前に白煙が立ち上がり、複数の影が現れた。一人をのぞいて全ての人間が中忍の制服を着用し、その例外は黒コートを着ていた。その人物は額当ての布で頭部全域を覆い、顔にも多くの傷跡が存在した。何とというか、明らかに任務経験の豊富な、試験官らしい試験官がやってきたものだ。

「待たせたな。『中忍選抜第一の試験』試験の森乃イビキだ。」

鋭い眼光が下忍たちを一人一人射抜く。ルーキーやくの一達は少し怯えているが、第9班は凜としていた。

「ではこれから中忍選抜第一の試験を始める。志願所を順に提出し、変わりに」

いつの間にかおかれていた、くじが入っているかのような箱を指さす。

「この箱に座席番号の書かれた紙があるからそれを1つ引いて、その番号の席に着け。番号はお前達が座る席の右上にあるのがそれだ。その後、筆記試験の用紙を配る」

つまりは、一次試験はペーパーテストということか。ルーキーで固まっていた場ではこそそと相談するモノが現れるが、とりあえずどのレベルの問題が出てくるかで対処の仕方が変わると言うことか。

順番が回ってきて、アンコから渡されていた志願所を提出し、く

じを引く。番号通りの席にたどり着くと、そこには……全身緑タイツが座っていた。

「……」

「あ、どうも！ 僕はロック・リーと言います」

「あ、エミヤ、シロウだ」

あまりの格好に何も言うことが出来なくなった。それはそうだが、だっていきなり全身タイツが、テカテカのおかつぱ頭が、ゲジマユが……。心の準備とは言い方がおかしいが、そういった類のモノが無ければ対応できない。はずだ。うん。

「シロウって……、第9班のあのシロウですか！？ アカデミー時代に抜け忍を1人倒したという、あのシロウ君ですか！？」

「……他にシロウという人間はいないだろうし、それであっているのではないか？」

とりあえずこの会話を打ち切りたい。とにかく、一息つかせてくれ。一度落ち着かないと、彼とは正面から対峙出来ない。衝動がすでに喉元までせり上がっているのだ……

そんなシロウの心を知ってか知らずか、左となりに黒子衣装で背中に包帯でぐるぐる巻きの荷物を背負った少年が来た。その顔には歌舞伎役者のようなメイクがほどこされ、額部分には砂隠れの額当てが着いていた。

「……」

互いに無言で睨み合う。他里で顔見知りでなければただの敵と言うことだ。

無言のまま彼が座るのを見届けて前に向き直る。……右からなにやらキラキラとした視線を感じるが、いまはそちらを見てはいけな  
いぞ、うん。

「それでは試験用紙を配布する。試験官が一枚ずつ裏にして机に置くから、絶対に表にするなよ」

試験官が机の間を通り、前にある机に用紙を配布する。

「答案用紙は裏のままだ。そして、俺の言うことを良く聞け。この第一の試験には、いくつか大切なルールってもんがいくつもある」  
短くなったチョークを手に取り、続ける。相変わらず睨みは効かせたままだ。

「黒板に書いて説明してやるが、質問は一切 受け付けんからそのつもりでよく聞いておけ」

周囲が小声で話しているのか、教室が少し騒がしくなった。すぐにイビキの一瞥で沈黙したが。

「第1のルールだ！ まず、お前らには最初から各自10点ずつ持ち点が与えられている。」

黒板にチョークで文字を書きながら話し続ける。

「筆記試験は全部で10問、配点は問題格点ずつ。そして、この試験は減点式となっている。つまり問題を10問正解すれば、持ち点は10点そのままだ。しかし、問題で3問間違えれば持ち点の10点から3点が引かれ、7点と言う持ち点になる訳だ。……これが第1のルールだ」

減点方式という特殊な体型に、会場がざわめく。さすがのシロウも驚いた。裏がありそうな臭いが濃くする。

「第2のルールだが……、この筆記試験はチーム戦、受験申し込みを受け付けた3人1組の合計点数で合否を判断する。つまり、合計持ち点30点をどれだけ減らさずに試験を終われるか、チーム単位で競って貰うってことだ」

この一言で周りのざわめきが大きくなった。隣のロック・リーだかは顔を青くしている。座学が苦手なのか、チームメイトで危ないものがあるのか……。

その点うちのチームは……どうなのだろうか？アカデミーではシロウは中、白は上だった。ということは小次郎は

シロウが全力で小次郎の座る後ろの席を見ると、某人は涼しげな

表情を浮かべている。ただ、シロウの目は、その額に浮かぶ脂汗をしっかりと捉えていたとか。

「ちよ、ちよっと待って！ 持ち点減点方式の意味ってのも分からないけど、チームの合計点ってどーいう事よ！！」

前の方に座るサクラが手を挙げながら発言したが、その行為はイビキの神経を刺激するだけだった。

「うるせえ！ お前らに質問する権利はないんだよ！ これにはちゃんと理由がある、黙って聞いてろ！」

「う……」

完全に萎縮するサクラ。他の私語をしていた面々も黙り込んでしまった。

「分かったら『肝心の』第3のルールだ。試験途中で妙な行為……つまり『カンニング及び、それに順ずる行為を行った』と此処にいる監視員たちに見なされた者は、その行為『1回につき、持ち点から2点ずつ減点さ せて貰う』。つまり、この試験中に持ち点をすっかり無くして退場する奴も出るってことだ」

試験官たちはそれぞれ自分の持つバインダーをちらつかせる。いつでも見ていると言いたげな表情だ。

「そして最後のルールだ。この試験終了時までには持ち点を全て失った者、及び、正解数0だった者の所属する班は……3名全て道連れ不合格とする！！」

下忍の中の動揺がマックスに達した。それはそうだが、班員の一人でも過ちを犯せば、その時点でチャンスが奪われるのだ。だが、同じチームの仲間のミスを恐れるようなチームが、果たしてこの試験を乗り越えられるのか。

否。それを第9班は理解している。この試験で求められるものを。試験時間は一時間だ。……よし、始める！」

イビキの一言で、下忍は皆鉛筆を走らせる。

いま、中忍試験が始まった。

## 第17章 カンニング戦

減点方式、難解な問題、そして不正行為のペナルティーの低さ

つまり、この試験はいかにバレないようにカンニングをし、答案を作ることにある。

時間とともにこの試験の本質に気がついた者たちは増え、行動を起こしていた。もちろん、シロウたちも例外ではない。

(なるほど……本当に白がいてくれて助かったな)

左手の掌にある氷の鏡を横目で見ながら、つくづくそう思う。

第9班では、それぞれの掌に白が鏡を作り出し、さらに答案を作ることが出来ている人の真上にも鏡を作っている。

シロウの視力なら、横に視線を移すだけで、端の席の答案でも見ることが出来るが、この鏡のおかげでより早く情報を集めることが出来た。

しかし、

(何なのだ……この10問目は?)

『第10問

この問題に限っては、試験開始後45分経過してから、出題され  
ます。

担当の質問を良く理解した上で、回答して下さい』

とだけあるのだ。シロウたちはカンニングがそれなりにうまくい  
っているから良いものの、やはり気になる。気になるったら気にな  
る。

だが、今はとにかく問題に集中することにする。はてさてどんな  
問題が出るのか……。

試験開始からまもなく45分が経とうとしていた。

今のところ脱落者はそこまではない。数名カンニングがバレて点数を失い退場にはなった。

……何か甘くないか？

まだ一次試験ではあるが、仮にもこれは中忍試験なのである。例年の合格者数をシロウたちは確認していたが、基本1桁だ。ならこの一次試験で半分以上が篩にかけられると考えられる。ということは、この試験の鬼門は第100問目か

「では100問目を出題する。が、その前に」

イビキの声が教室内に響く。

「一つ、最終問題に付いてのちょっとしたルールの追加をさせて貰う」

『!?!?』

きた。つまりこれが篩なわけだ。

ガラッ……

教室の扉を開き、入ってきたのは左隣の席の男だった。

「フ……強運だな。『お人形遊び』が無駄にならずに済んだみただいな？ ……まあいい、座れ」

イビキが言っていることを理解する者はほとんどいなかった。そして彼が同じ砂の忍の少女に何か紙切れを渡したところを見た者もいなかった。

「では、説明しよう。……これは絶望的なルールだ」

イビキの視線が厳しくなる。

「まずお前らには、この第100問目



の試験を……『受ける』か『受けない』かのどちらかを選んでもらう」

「え、もし『受ける』を選ばなかったらどうなるんですか？」

サクラがおずおずと手を挙げながら言う。他の下忍たちもイビキを凝視し、答えを待つ。

イビキは睨みをさらに効かせながら告げる。

「『受けない』を選べば、その時点でその者の持ち点は0となる。

つまり失格だ！ もちろん同班の2名も道連れ失格だ！」

誰も予想を遙か上を行く条件。場にいた下忍の多くは騒ぎ出す。それはそうだ。『受けない』を選んだだけで今までの苦労が無駄になるのだから。

「そしてもう一つのルール……」

イビキが騒動を無視して話し出す。

「『受ける』を選び、正解できなかった場合……その者については今後、永久に中忍試験の受験資格を剥奪する！」

「……」

試験を受けていた下忍のほとんどが取り乱す。我に戻った受験生から、イビキを睨みつけたり、騒ぎ出したり……。

「そ、そんな馬鹿なルールがあるか！ ふざけんじゃねえ、お袋に聞いたぞ！ 中忍試験は年に2回。1回落ちても、次受けて合格すれば中忍になれるってな！」

ヒナタと同じ班の……キバが抗議の声を上げる。が、イビキはどこ吹く風と行った顔をする。

「ククク……、運が悪いんだよ、お前らは。今年は俺がルールだ。その代わり、引き返す道もちゃんと与えてるじゃねえか」

「え……？」

「自信の無い奴は大人しく『受けない』を選んで、来年も再来年も受験したらいい」

……これこそが、本当の一次試験ということか。受験生が言葉の

意味を理解するにつれ、場は静かになる。迷っているのだろう、皆。「では、始めようか。この第10問目、『受けない』者は手を挙げろ！ 番号確認後、ここから出て貰う」

……すぐに手を挙げる者はいない。が、時間が経つにつれて空気は変わっていく。自分があれば班員も失格となる。挑戦して失敗すれば一生下忍のまま。自信のない者は迷うであろう。

第9班のメンバーは特に問題ない。それぞれ視線を交わし、うなずき合う。そう、ここで立ち止まる気はない。合格するつもりで準備してきたのだから。むしろ心配は、同期の誰かが辞退しないかどうかー

「お、俺はっ……止める！ 『受けない』！ すまない、岩、ナル……」

「50番失格。130番、111番、道連れ失格」

ついに1人が辞退した。班員の2人は彼を責めることなく、教室を出て行く。

そこから、均衡が崩れた。

「お、俺もだ！」

「わ、私も……」

「す、すまない。みんな！」

「俺も止める！」

「私も、止めます……」

次々と下忍が辞退していく。これがイビキの狙いか。彼の視線は一切色がない。やはりこれを見越しての出題ということか……！！

(ナルト！！)

前の方に座っていたナルトが手を挙げた。こればかりはシロウも驚いた今までナルトと付き合ってきて、彼がこのプレッシャーには負けない人間だと思っていたのだ。彼はどんなことがあっても諦めなかった。この程度の試練で諦めるような奴では無いはずなのに……。

「15番か。では」

「なめんじゃねえ！」

あげた手を思い切り机の上にたたき付けた。ナルトの性格を知らない人間は何事かと驚いているが、シロウは、実は安堵した。

「受けてやるよ！！ 一生下忍のまま？ はっ、いいぜ。もしその問題を解けなかったらッ下忍のまま強くなってやる。そして、その下忍がお前や他の中忍、上忍なんかより強いつて事を、証明してやるってばよ！！ そんなで、意地でも火影になってやるってばよ！！」

さすがはナルト、といったところか。サスケやサクラも、半ば呆れている。だが彼のおかげで、この教室の空気は何かが変わった。

「もう一度訊く……。やめるなら今だぞ」

「真っ直ぐ自分の言葉は曲げねえ！ それが俺の忍道だ！」

ナルトが自らを戒めるために立てた目標。それが、この場の下忍達にどれほどの影響を与えるのだろうか。

（さすがナルトと言ったところか……）

（ナルト君……君という人は）

（面白い童だな。自分の言葉は曲げない、か）

シロウにとっては複雑で、白にとっては安堵が、小次郎にとっては興味が、それぞれの胸に思うものがあった。

あれほどまでに、自分に素直になれたのはいつの頃だろうか……、いや、いつから胸を張れなくなったのだろうか。

ナルトの一言で、下忍は皆浮きかかっていた腰を下ろした。誰も立とうとしないのを確認し、イビキは周りの試験官と目配せする。

「良い決意だ。ではこの場にいる全員に

『第一の試験』の合格を申し渡す！！」

## 第17章 カンニング戦（後書き）

一次試験のタイトルが雑なのは手抜きではありません！思いつかないだけです！（え

## 第18章 第2の試練へ

今、シロウたち第一の試練を合格した下忍たちは今、第二の試練の会場である、第44演習場の前に来ている。

第44演習場、通称“死の森”。通常使われないこの演習場は、有刺鉄線付きのフェンスに囲まれて、立ち入り禁止となっている。ご丁寧に“立入禁止区域”の注意書きが一定間隔で施されている。

「ここが、第二の試練の会場、第44演習場……別名“死の森”よ！」

声高らかに宣言するのは、第9班担当、特別上忍である、みたらしアンコである。

第一の試練の後、試験会場に突然飛び入ってきたのだ。あの時《・・》と同じように。木ノ葉の忍はアンコとシロウたち第9班の關係を知っているのです、ものすごく視線が集まった。本当に恥ずかしかつた。後でぶちのめすと第9班で心に誓った。

「なんか、薄暗い森ね……」

「フフ……ここが“死の森”と呼ばれる所以、すぐに実感することになる、わ……。ねえ、そこ、本気で怖いから」

サクラの問いに機嫌良く答えるアンコだったが、シロウたちの冷たい視線に耐えかねたようだ。

しかし、先ほどから、いやな視線を感じる気がする。何というか、つま先から脳天までをねっとりとなめ回すかのような視線。

だが、その視線を追う前に、別の誰かにそれたようだ。

「それじゃ、第二の試練をはじめる前に、あんた達にこれを配っておくわね」

一人一枚ずつ、紙が回されていく。そこに書いてあったのは、“同意書”の3文字。

「これは“同意書”。こっから先は死人もでるから、それについて

同意をとっておかないとね！ そうしないと、後で私たちの責任になっちゃうからさ〜」

機嫌良く話しているが、それを下忍たちは恨めしそうに見るだけである。

「じゃ、第二の試練の説明をはじめろわ。早い話、ここでは究極のサバイバルに挑んで貰うわ」

「それじゃまず、この演習場の地形から順に追って説明するわよ。

この第44演習場は鍵の掛かった44個のゲート入り口に円状に囲まれていて、川と森、中央には塔がある。その塔からゲートまでは約10km。この限られた地域内で、“ある”サバイバルプログラムをこなして貰うわ。その内容は……各々の忍具や忍術を駆、使した、何でもありありの“巻物争奪戦”よ！」

つまりそれは、たとえ相手を殺してでも巻物を奪い合い、勝ち残りということだ。

ここにいる下忍達は、木ノ葉の里のものだけではない。他の国の隠れ里から受験をしに来た者達が入るのだ。他の里の忍と戦闘になれば、それは殺し合いにもなりかねない。

それ故の、“同意書”なのだろう。

「ここにある“天の書”と“地の書”、この2つの巻物を巡って戦って貰う。ここには78人、つまり26チームが存在する。その半分の13チームには“天の書”、もう半分には“地の書”を、それぞれ1チームずつ渡す。そしてこの試験の合格条件は……」

アノコは右手に“天の書”を、左手に“地の書”を掲げている。

「天地両方の書を持って、中央の塔まで3人で来ること。ただし、制限時間内だね。この第二の試練、期限は120時間……各々ちよつと5日間で行うわ！」

5日間で敵から目標を奪取し、チーム全員で目的地に達する能力。これこそが第2の試練で求められるものであるということを、ほんどのものが理解出来ただろう。

「なるほどな……これは私好みの試練だ。血が騒ぐぞ」

小次郎、バトルマニアの血はまだ押さええてくれないか。

「シロウ君と5日間一緒に森の中……。これはこれでアリかもゴニヨゴニヨ……」

白、何を企んでいるかは知らんが、何か失ってはいけないものを失いそうで怖いからやめてくれ。

「食事は自給自足。仮にも忍なのよあんたらは。あ、でも……人食い猛獣や毒虫・毒草には気をつけてねえ」

どうもにやにやが止まらない様子のアニコだった。

「それに13チーム39人が合格なんて、まずあり得ないから。何せ行動距離は日を追うごとに長くなり……。回復にあてる時間は逆に短くなっていく。おまけに周りは敵だらけ、うかつに寝ることもままならない。つまり、巻物争奪で負傷する者だけじゃなく、サバイバルのプログラムの厳しさに耐えきれず死ぬ者も必ず出る、ということ」

脱落者を増やすのに、巻物を多く確保する、という手段もある。そうなった方が後から楽なのは自明だ。

「続いて失格条件について話すわよ。まずは一つ目、時間内に天地の巻物を塔まで持ってこれなかったチーム。二つ目、班員を失った。又は再起不能者がでたチーム。ギブアップは無し、5日間は森の中だからね！そして最後、巻物の中身は塔の中にたどり着くまでは決して見ぬこと！」

「途中で見たらどうなるんだ？」

サスケも問いに、アニコは満面の笑みで答える。

「それは、見た奴のお楽しみ」  
だそうだ。

「中忍ともなれば、超極秘文章を扱うことも出てくるわ。これは、その信頼性を見るためよ。説明は以上。同意書3枚と巻物を交換するから。その後はゲート入り口を決めて、一斉にスタートよ！最後にアドバイスを一言……死ぬな！」

最後にアンコらしく締めくくって、各チームは各々分かれていった。

シロウたち3人が同意書にサインし、巻物との交換まで時間があるため作戦会議をしていたところに、アンコがやってきた。

「お、あんた達も参加するのね」

「当然です！ それよりアンコ先生は私たちに会ってて大丈夫なんですか？」

「へーきへーき！ 一応教え子の顔はちゃんと見ておきたいじゃない？」

白が気になって質問してはいたが、あくまでアンコは試験官のはずだ。班員とはいえ、個人的に受験生と話をしているって大丈夫なのか？

「あんた達なら大丈夫だって信じているからね。絶対巻物2つ持って合格しなさいよ！」

「……おう！」

手短に挨拶を終え、同意書と巻物を交換しに、3人が動き出した。

「それでは中忍試験第2の試練、開始！」



天の書を渡された第9班は、合図とともに開かれたゲートの中の光景に閉口していた。

確かに、ここは立入禁止だと思う。日の光のほとんど差さない、薄暗い得体の知れない森が広がっていた。

第9班の巻物はシロウが管理することになった。前衛の小次郎には任せられないし、後衛の白は逆に巻物を持っているのではと疑われかねない。そのため、オールマイティなシロウが持つのが無難と判断したのだ。

「さて、手早く巻物を手に入れて、塔に向かうぞ！」

「フン」

「行きましょう！」

各々で気を引き締め、森へと歩みを進めた。

interlude in

つい先日引き入れた“奴”の入っていたとおり、白髪の少年は確かに試験を受けていた。

うちの末裔も魅力的だが、この少年もなかなかいじりがいいがあれそうだと思うってしまった。全く、今年は素材が多くて目移りして困る。

「さて、“魔術師”がどんな生き物なのか、見せて頂戴ね。シ・ロ・ウ・君」

蛇は茂みへと消え、後には“顔のない”人間だったものが転がっていた。

interlude out

第18章 第2の試練へ（後書き）

お久しぶりです!!

## 第19章 蛇、襲来（前書き）

また1ヶ月以上放置……定期更新したいです

## 第19章 蛇、襲来

第二の試練開始から、シロウたちは他の受験生と会うことはなく、既に夜を越すための準備をしていた。

火を起こし、食料担当の小次郎が刈ってきた熊を焼いているところだった。

「見張りは白に任せる。2時間おきに交代でいくぞ」

「分かりました」

「では頼んだ」

小次郎とシロウが横になり、白は、あらかじめ用意した見張り用の罠に注意しながら、見張りに勤しむ。

たき火の揺れる炎を見ながら、白はそれとなく今までのことを振り返っていた。

シロウと出会って、木ノ葉の里に来て、家族が増えて、仲間が来て……。考えたこともなかった、こんな生活。想像したことなんて一度もなかった、こんな幸せ。

帰る家があつて、暖かい家族がいて、そして……。

緊張感を保ちつつも睡眠をとるといふ、器用なことをやってのけている、シロウの寝顔を見る。鷹のような鋭い眼光も今では閉じられ、年相応の安らかな顔に、つついっ頬が緩んでしまう。

自分を絶望の淵から引上げ張りをくれた。自分の前に立って守ってくれた。ただいまと言ってくれた。おいしい料理を作ってくれた。数え切れないくらいありがとうをくれた。

これが、人を好きになる、ということなのだろうか。

でも、果たして自分は、彼の隣に立つことが出来るのだろうか？  
いつも、シロウの影に隠れて、自分の力にすら怯えるこの体たらくで。

どうしても、それが枷となり、白の心を縛るのだった。

翌朝、寢床として使用した痕跡を消し、シロウたちは森の奥へ進んだ。そして、あり得ない異変と遭遇した。

「何だ、これは……」

そこに転がるのは、死体、死体、死体……それも、無惨にも顔を全て抉られた。人としての尊厳を剥奪されたソレを直視出来るのはシロウだけで、白は口を押さえて顔を背け、小次郎も目を伏せている。

シロウはこれ以上の剥奪（惨劇）を知っている。だから理性を保っていられる。かといって、感情をコントロール出来る訳ではない。嫌悪感、そして怒りが込み上げてくる。

そして悪いことに、この死体はまだ新しい。この惨劇の犯人はまだ近くにいるということである。となると、離れるのが打倒だと思われる。

「白、小次郎。移動するぞ。まだ死体は新しい」

「……」

「そっだ、な」

白は相変わらず俯いているが、ぐずぐずしている暇は無いと踏んだ。小次郎も分かって同意してくれた。

が、これを見つけてしまった時点で遅かったのかもしれない。

「……ッ！」「……」

冷たく、粘り着くような殺気が、3人に注がれる。

「あなた達、見ちゃったのね」

森の中から、全方位から声が聞こえてくる。幻術の類かどうか、小次郎に目線でコンタクトをとるが、首を横に振っている。

「しかも、あなたがいるなんてね。エミヤシロウくん。本当は別のものが欲しかったんだけど、まさかこんな所で会うなんてね」

「私に何かようか？ あいにくと顔も見せられないような知り合いはいないのだが」

「フフ、話で聞いたとおり、可愛げの無い子ね」

正面から、木が揺れる音がして、1人の男が出てくる。それが、そいつの存在が、良いようもなく違和感がある。

「ひとつ聞きたい。これ（・・・）は、お前の仕業か？」

「フフ、顔はいくらでもあった方が便利じゃない？」

そういつて、顔の表面をこすったかと思えば、まさに顔がとれて、その下にある蛇のような顔が露わになる。

「ヒッ！」

「なるほど、それが本当の顔か」

白は怯え、小次郎は背の太刀の柄を手に取る。

「さて、それじゃあシロウくん以外は、退場して貰おうかしら？」

殺気が一気に増幅した。間違いない、こいつは白と小次郎を殺す気だ。

「引けっ！」

シロウの命令で、3人が一斉に解散する。一気に後退するが、敵が近づいてくる気配はあくまでゆっくりである。明らかにこちらの出方をうかがって楽しんでいる。

「どう思う？ シロウ」

「こちらから打って出るには、情報が少ない。しかも先手をとられた分、一度仕切り直さないと」

小次郎の質問に答えつつ、白の方を見る。先手をとられて、完全に萎縮している。仕切り直しが必要だ。

「いつまで逃げるつもり？」

段々と殺気が近づいてくる速度が速くなっている。得物を一歩ずつ追い詰めていく、まるで狩りのようだ。それに、まんまと乗せられている白がいる以上、どうしたものか。

「どわー！」

いきなり聞き覚えのある、間抜けな叫び声が聞こえてきた。かとおもえば、

「くくわっ」「く」

巨大な蛇が、上から降ってきた。

「このやる、出せつてばよー！」

そして口からナルトの音がする。食われたのか、あいつは……

「ふん！」

小次郎が太刀を構える。刃が風を纏ったかと思うと、蛇の顎の部分を切り上げた。まるで豆腐を切るかのごとく、蛇の首は輪切りにされた。

「ひ、ひどい目にあつたつてばよ……」

声の主、ナルトはやはり食われていたようで、蛇の顎を内側から持ち上げて出てきた。

「おい、無事かナルト……つて」

「あれ、何でシロウたちがいるのよ？」

ナルトを食らっていた蛇が来た方向から、サスケとサクラがやってきた。このクソ忙しいときに……。

「なんでお前達がここに？」

「さつきそのウストラトンカチが蛇に食われたから、それを追ってきたんだよ」

「シロウ、のんきなやりとりをしている暇は無いぞ」

シロウとサスケのやりとりを小次郎が打ち切るうとしたときだった。

「あらあら、うちはサスケ君までいるじゃない。神なんて信じないけど、もしかしてこれが神のご加護って奴なのかしらね」

上方からの声に振り返ると、先ほどの蛇のような男が、木の枝に逆さにぶら下がっている。彼の長い髪が全て下に垂れ下がっているため、まるでホラー映画に出てきそうな絵図になっている。

ナルトたちとの再会というハプニングが、彼の接近を許してしま

ったのだ。距離が無かったわけでは無いが、忍が本気を出せばあの短時間で接近できない距離ではないということだろう。

「何だよ、お前誰だつてばよ!」

「自己紹介がまだだつたわね。大蛇丸つて言えば、分かるかしら?」  
「大蛇丸!」

彼の声に最初に反応したのは、意外とサクラだった。

「大蛇丸つて、まさかあの伝説の三忍の?」

「伝説の三忍つて?」

「その名で呼ばれるのも久しいわね」

シロウの問いを遮る大蛇丸を睨む。

「今の三代目火影様と、教え子として四人一組フォー・マンセルを組んだ3人のことよ。地来也、綱手、そして……」

「この私の事よ」

そういつて舌なめずりをする大蛇丸から、またもや殺気が溢れてくる。

「な、なんだつてばよこれ……」

「ざけんなよ、おい」

震えた声で、ナルトとサスケが悪態をつく。完全に萎縮している。サクラと白も怯えているはずだ。となると、動けるのはシロウと小次郎の2人。

「本当の目標も出てきてくれたし、シロウ君とサスケ君をお持ち帰りさせて貰いましょうか」

「そんな事させると思っているのか?」

シロウが干将・莫耶を、小次郎が巻物から首斬り包丁を取り出し、構える。

「行くぞ変態!」

2人同時に斬りかかり、後退する大蛇丸を追う。とにかく、この場から、敵を遠ざけないと。

「ぜりゃあああ!」



小次郎が風を纏わせた首斬り包丁を振り下ろし、それを避ける大蛇丸に干将・莫耶を投擲する。その後、愛用の洋弓を手に取り、黒鍵を矢として、前衛を担当する小次郎を援護する。

「フフ、シロウ君だけじゃなく、あなたもそこそこやれるようね。風遁のチャクラを使った、面白い手品をするのね」

「ふん、芸がなくて悪かったな」

小次郎が振るう首斬り包丁には、風のチャクラを纏うよう文様が掘られている。小次郎の一族が持つものらしい。そのおかげで、小次郎が持つ事で風のチャクラが起動を援護し、切れ味が上昇する。この重量の得物を自由自在に操る所以である。

「でも、やはり面白いわね。その”投影魔術”というのは」

「ッ！」

今、こいつはなんと言った？ 投影魔術と、言わなかったか？

「面白い素体よね、魔術師って。この世界にはない力。非常に興味深いわ」

「貴様、何故魔術の事を知っている？」

「あなたのお知り合いが、こっちにいるってだけ行っておくわ」

大蛇丸の発言に、シロウは怪訝な表情を浮かべつつ、彼の言葉について思考を働かせる。

こちらに魔術は存在しない。なのに何故こいつは、自分が使う力が忍術でなく魔術だと知っているのか。信じるわけではないが、本当に、自分以外の人間が、こちらに来ているのか。だとしたら、誰が？

「なるほど。俺を狙う理由は分かった。では問う、貴様の協力者は誰だ？ そして、何故サスケも狙う？」

シロウの問いに、大蛇丸は気味の悪い笑みを浮かべる。

「彼は写輪眼を持つ一族の末裔。あの写輪眼は是非欲しい。あなたには分からないでしょうけど、あの目の力は神を地に落としようとする力なのよ」

こいつ、ただ力を求める人間には見えない。もっとたちの悪いこ

とを考えているように見える。ただ、今のシロウたちには、それを  
知りうる事は出来ないのだが。

「でも、そろそろ飽きて来ちゃった。とりあえず、その坊やには  
死んで貰おうかし、ら！」

そう言い放つと、大蛇丸が口から何かを小次郎に向けはき出した。  
いや、発射したというのが正確な表現だろう。

それは剣だった。小次郎が首斬り包丁を盾にしようとしたが、シ  
ロウの“解析”が、それが無理だと警告した。

「かわすかたたき落とせ！」

「承知！」

小次郎は首斬り包丁を地面に刺すと同時に、それを足場にして跳  
躍した。それと、剣が包丁を貫いたのは同時だった。

小次郎らしくない転がるような着地に、シロウは彼の元に駆け寄  
る。彼の右脚に、一直線の切り傷が入っていた。

「くそ、何故……」

「これは草薙の剣。あれの強度は、現存する全ての剣を上回る」

直接魔力を通して実際に解析したわけではない。だが、魔剣や聖  
剣といったものを除けば、あれは最強の一振りといっても過言では  
ない。

「ち、このままでは……」

シロウが状況の悪化に悪態をついた時、

「火遁、業火球の術」

大蛇丸めがけて、見覚えのある炎がおそったのだった。

## 第20章 悪夢の始まり(前書き)

お久しぶりです

……何回目だろう、この手の挨拶orz

## 第20章 悪夢の始まり

予想外の援護に、普通の人間ならほっとするところであろうが、シロウの心中は複雑であった。

これでは、何のために置いてきたのか分かったものではない。

「何故来た！ 奴はサスケ、お前を狙ってきたんだぞ」

「それならシロウも同じさ。それに、来たのは俺だけじゃない」

「何？」

サスケの発言に、とつさに周りを見渡す。と、

「水遁・水乱波<sup>みずらっぱ</sup>」

上方、とある木の枝の上から、大量の水が大蛇丸に向かって押し寄せた。攻撃は跳んで避けられたものの、地面には各所に水たまりが出来ている。

「あらあら、下忍レベルの術じゃないわね」

「褒められたって何も出ませんよ。それに、これは下準備です」

目の前に、先ほどの術の主が降り立つ。そこには、シロウのよく知る少女が立っていた。

素早く印を結び、大蛇丸を睨む。

「水遁・氷龍弾の術」

先ほどの水が、白の目の前に収束、そこから巨大な氷の龍が出現し、大蛇丸へと向け放たれる。

「これは不味いわね」

大蛇丸も、印を結び、構える。その一瞬とも呼べる速度から、彼の忍としての実力が伺える。

「火遁・火龍弾の術」

白の生み出した氷の龍と同じ大きさの、炎の龍が衝突する。氷と炎、ぶつかればどうなるかは自然の摂理が証明している。お互いに触れている部分から大量の高温な水蒸気と化し、視界が包まれる。

「氷遁……そう、あなたも血継限界の持ち主なのね」

「水龍弾より水龍弾の方が、意表を突けそうでしたからね」  
水蒸気によつて遮られた状況での会話。

「しかし、こんなものが私に通じるとでも？」

「さあな」

「ッ！」

目の前にいきなり巨大な手裏剣が飛んでくるのを、屈んで回避する。

「残念だったな！」

手裏剣が煙とかし、ナルトの姿が現れる。この班での連携の常套手段だ。同じ敵に二度は使えないが、初見でなら上手くいく事が多かった。しかし、

「甘いわよ、坊や。潜影蛇手！」

「いつ！ おわあ！」

ナルトに振り向いたかと思えば、大蛇丸の右袖から何匹もの蛇が現れた。全てがナルトに絡まりつき、束縛し、締め上げる。

「あなた達の行動はよく知っている。手癖の悪い子は嫌いよ」

「へ、へへ。なら、こんなのはどうだってばよ？」

蛇に捕らえられていたナルトが、拘束による圧迫感から顔をしかめつつも、にやりと笑う。

その刹那、ナルトの後ろから鋭利な殺気が

「I am the bone of my sword

d（我が骨子は捻れ狂う）」

何かが来る。しかも相当危険なものが。大蛇丸の勘がそう告げる。しかもナルトの様子を見る限り、これは盾にはならない。なら…

…とそこまで思考した時、

「カラドホルク  
偽・螺旋剣」

稲妻が放たれた。

視認できたのは、空気、いや、空間を引き裂き、ねじ切り、飛来する螺旋。こんな得物を持っていたものはいなかった。すなわちこれはエミヤシロウの投影の産物であることは明白だ。

そして、自らに接近するこの剣の威力を、大蛇丸は肌で感じ取った。確かによほどの存在でなければ、この一撃をまともに受け止めることは出来ないだろう。

この事実には、大蛇丸は怖じ気づくことなく、むしろ歓喜した。想像以上の実力。これに興味を引かれるなど言うのは、無理な話だ。（欲しい。あの子が、エミヤシロウが欲しい！）

大蛇丸の中で、シロウへの興味が一段と大きくなった瞬間だった。

シロウが放った偽・螺旋剣は、まさに一瞬でナルトと大蛇丸を貫き、射線上の障害物をなぎ払った。

はじめからこれを狙っていた。大蛇丸の術、能力が未知数な今、無理に接近戦を展開する必要はない。

なら、遠くから狙撃するのが無難な策だろう。そして、今回は一撃必殺の威力を選択した。

「うわぁ……なんか森に穴が開いたみたいだっばよ」  
後ろにいる、ナルトがぼつりと漏らす。

大蛇丸に拘束されていたのは、もちろん影分身だ。連携で、何もわざわざ本体がリスクを負う必要はない。それに影分身なら、自らが受け取った経験値を本体にフィードバック出来る。そのため、影分身がどのような攻撃を受けたのかも共有できた。

「おかげで、こちらはからっきしだがな」

洋弓をおろすシロウの表情は暗い。魔力が底をつきかけている。仮にも宝具を投影したのだ。心中ではもう少し楽に投影できると思っていたが、どうも予想を外していたようだ。まだ自分の魔力量を少なめに見積もっておくべきだろう。

白から渡された兵糧丸を口に含み、魔力を回復させる。

「これでやったと思うか？」

「さあな。警戒しつつ離れるべきか」

サスケの問いにシロウが答える。手応えがなかったわけではないが、どうにも不快感が残っているのだ。

「あの威力で生きてたら、そりやもう化け物の類よ」

「変わり身の術を使う可能性だってあるだろう」

「でも、俺の影分身が消えるまで、あいつずっと蛇で拘束してたつばよ」

今の一撃で仕留められていないのが信じられない、といった表情でいるが、シロウの言葉を信じて警戒は皆怠らない。

「賢い子は嫌いじゃないわよ」

聞こえるはずがないと思っていた声。そして、僅かに足下が揺れる。まるで、何かが下でうごめくような

「　　ッ！　　跳べ！」

シロウの叫びで、全員飛び上がった。

立っていた地面が縦に割れ、灰色の足場が急浮上した。

真上に立っていたナルト、サスケ、サクラ、白は、その現れた何かに巻き込まれ、後ろへと投げ出された。

シロウと小次郎は、立ち位置が良かったため衝撃をかわすことが出来た。小次郎の場合は足をあまり動かさなかったため、転がるように飛び出したわけであるが。

見上げた先にいたのは、大蛇。しかも普通では存在しないようなサイズの。

「口寄せか。また奇怪なものを喚んだものだ」

小次郎が苦い顔でぼやく。

口寄せの術とは、血で契約した生き物を好きなとき・好きな場所に呼び出す空間忍術の一種である。習得レベルCであるこの術は、汎用性、応用性に富んだ術であるため、習得する忍は多い。

そして、その口寄せの術を大蛇丸は発動した。下忍レベルの自分

たちがあの大蛇を相手にするには分が悪い。

しかも、分断された。大蛇丸の狙いは完全に自分に向いている、と考えて良いだろう。

「さて、役者は揃ったわね」

舌嘗めずりをして、物色するかのように視線を飛ばしてくる。

シロウがこちらに来て、最初の悪夢が始まった。



## 第20章 悪夢の始まり（後書き）

この大蛇丸との戦いは、この小説で非常に重要な位置にあるため、あえてここで切ります。短くてすみません（汗

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0964r/>

---

NARUTO 無限剣製

2011年12月17日23時46分発行